罪と罰「5」（ドストエフスキー）

第五篇

一

ドゥーネチカとプリヘーリヤの親子を相手に、運命を左右するような談判をしたその翌朝は、さすがのルージンも酔いのさめたような気がした。彼がこの上なく不快に感じたのは、実際できてしまったこととはいいながら、昨日のうちはまだ夢みたいな、ありうべからざるもののように思っていたあのでき事を、しだいにとり返しのつかぬ既定の事実として、受け入れなければならなくなってくることだった。傷つけられた自負心の黒い蛇が、夜っぴて彼の心臓を吸いつづけたのである。寝床から起き出ると、ルージンはすぐに鏡を見た。夜の間に胆汁が体じゅうに回りはしなかったかと、それを気づかったのである。しかし、その方面は今のところ無事だった。近ごろすこし脂ぎってきた、上品な、色の白い自分の顔をながめた彼は、ことによったらもっとたち優った花嫁を、どこかほかで捜し出せるに相違ないと腹の底から確信して、ちょっとの間慰藉の念を感じたくらいである。けれど、すぐさまわれに返り、やけに脇の方へぺっと唾を吐いた。この仕種は、彼と同居している若い友人、アンドレイ・セミョーヌイチ・レベジャートニコフの口辺に、ことばにこそ出さね皮肉な微笑を浮べさしたものである。この微笑に気がつくと、彼はさっそく腹の中で、それをこの若い友人との貸借勘定の中へ入れた。最近この友人に対する彼の勘定書は、だいぶ計算がかさんでいたのである。ことに、昨日の会見の結果をこの男に話したのは間違いだったと考えついたとき、彼のむしゃくしゃはいっそう募ってきた。それは彼が熱くなって、つい口数が多くなるにつれて、かんしゃくまぎれにしゃべってしまったので、昨日としてはもう二つめの失策なのであった……それから後も、この朝はまるでわざとねらったように、不愉快な事ばかりあとからあとから起こった。あまつさえ大審院の方でも、今まで奔走していたある事件の失敗が、彼を待ち受けていた。とりわけ彼をいらいらさせたのは、間近な結婚を見越して借り受け、彼が自分のふところで造作までした住まいの家主である。この家主というのは成り上がりもののドイツの職人で、この間取り決めたばかりの契約の解除を、いっかな承知せず、ほとんどま新しく造作した住まいをそのまま返すというのに、契約書にうたってある違約金の全額支払を要求した。家具屋がこれまた同じく、買ったばかりでまだ届けてない家具の手付金を、一ルーブリも返そうとしなかった。

『まさか家具のために、わざわざ結婚するわけにもいくまい！』とルージンは腹の中で歯ぎしりした。が、それと同時に、彼の頭にはもう一度死にもの狂いの希望がひらめいた。『いったい、いったいあの話はほんとうにも

うあれきりとり返しのつかぬほど瓦解して、おじゃんになってしまったのだろうか？　いったいもう一度やってみるわけにゆかないだろうか？』ドゥーネチカのことを思うと、彼の心はまたもや誘惑に動かされて、ずきずきした。彼は悩ましい心持でこの瞬間をじっと忍んだ。もし今すぐただの願望だけでラスコーリニコフをなきものにすることができたら、ルージンはゆうよなくそれを実行したにちがいない。

『失策はまだこればかりではない。あの二人に金をまるでやらなかったことだ』レベジャートニコフの小部屋へ、沈んだ気持で帰って来ながら、彼はそう考えた。『なんだって、くそいまいましい、おれはこうユダヤ人じみてしまったのかなあ？　それじゃまるで先の見とおしがなかったというものだ！　おれはあの二人にも少し不自由さしておいて、おれを神様のように思わしてやろう、とこう考えていたのだが、どっこい、あの始末だ！……ちょっ……いや、もしおれが二人にこの間じゅうから結納や贈物――たとえば箪笥だとか、手箱だとか、宝石だとか、反物だとか、全体にそういったような、クノップの店やイギリス商館などで売ってるがらくたに、千五百ルーブリも出していたら、この事件はもっと手ぎれいに……もっとがっちりまとまっていたに違いないのだ！　そうしたら今度みたいに、ああ手軽く破談にするわけにもいかなかったろうに！　ああいう手合は、破談にする場合には、贈物も金も必ず返さなくちゃならんと思う、そういう質の連中なのだからな。ところが、返すのはつらくもあるし、惜しくもある！　それに、良心の方からいったって、尻くすぐったいわけだからな。今まであんなに金ばなれがよく、かなり優しくしてくれた人を、そうそう薮から棒に追い出すなんて、できるわけのもんじゃない……といったようなぐあいでな……ふむ！　こいつはしくじったわい！』

ルージンはまたもや歯がみをしながら、自分で自分をばかと言った――もちろん、腹の中だけで。このような結論に到達すると、彼は出がけより二倍も毒々しい、いらいらした気持で帰ってきた。カチェリーナの部屋で行なわれている法事のしたくは、いくらか彼の好奇心をひきつけた。彼はもう昨日のうちから何かの拍子で、この式の話を聞いていたのみか、なんだか自分も招待されているような覚えさえあった。が、自分の用にまぎれて、ほかの事はいっさい聞き流していたのである。墓地の方へ行っているカチェリーナの留守を預って、食事の用意にかかったテーブルのまわりを、忙しそうにしているリッペヴェフゼル夫人のところへ、彼は急いで尋ねに行き、法事が盛大にとり行なわれるはずで、同じ家に住んでいるものがほとんど全部招待されていることを知った。その中には、故人と一面識もない人まではいっていて、カチェリーナと喧嘩したことのあるレベジャートニコフさえ招待されている。そして最後には当の彼ルージンも、ただ招待されているというだけでなく、この家の間借人全体の中で、一番おもだった客として、今か今かと待たれているのであった。またそういうリッペヴェフゼル自

身も、これまでいろいろさや当てがあったにもかかわらず、礼を厚うして招かれていた。で、彼女は今ほくほくしながら、主人代わりにまめまめしく世話をやき、そのうえ、喪服ではあったけれど新しいものを着て、めちゃめちゃにめかしこみ、得意然としていたわけである。こうした様々な事実と情報は、ルージンに一種のヒントを与えた。で、彼はなんとなく思い沈んだ様子で、自分の部屋――といってもレベジャートニコフの部屋へ帰って来た。それはほかでもない、招待された人たちの中に、ラスコーリニコフも交じっているのを知ったからである。

レベジャートニコフはどうしたわけか、この朝ずっと家に引きこもっていた。この男とルージンの間には一種奇体な、しかしある点から見れば自然な関係が、ちゃんとできあがっていた。ルージンはここに移って来たそもそもの日から、むしょうやたらに彼を軽蔑(けいべつ)し憎んでいたが、同時にいくらか彼をけんのんがっているようなところもあった。彼がペテルブルグへ着くとともに、この男の所に宿を決めたのは、けちな経済観念のためばかりではなかった。もっともそれも原因だったに相違ないが、そこにはまたほかの理由もあったのだ。彼はまだ田舎にいる時分、かつて自分の教え子であったレベジャートニコフが、もっとも尖端的(せんたんてき)な若い進歩主義者の一人として、とほうもない内容を持ったある面白い団体で、重要な役割を働いているとの噂を聞いた。これがルージンに非常なショックを与えたのである。こうした底力のある、いっさいを知りいっさいを軽蔑し、かつ万人を暴露する団体は、もうかなり以前からルージンに脅威を感じさせていた。それは何かしら特殊な、しかもすこぶる漠然とした恐怖なのである。むろん彼自身は、まだ田舎にいた時分の事だから、こうした種類の事柄については、概略的な程度でも正確な観念を持つことができなかったのである。彼もまた多くの人々と同じく、都会――ことにペテルブルグには、何かしら進歩主義者とか、虚無主義者とか、暴露主義者とか、その他何々何々という連中のいることを聞いていた。そして多くの人々同様に、これらの名称の性質や意義をばかばかしいほど誇張し、曲解していたのである。この数年来、彼が何よりも恐れていたのはこの暴露主義であった。これこそ彼の絶え間なき不安の最大原因なのであった――しかもその不安は、折から彼が自分の事実をペテルブルグへ移そうと空想していた際とて、いっそう誇大されていた。この点、彼はちょうどよく小さい子供がおどかされるようなぐあいに、いわゆる『おびえ上がって』いたのである。五、六年前、彼がまだ田舎でやっと自分の栄達を築こうとし始めたばかりのころ、その時まで彼が一生懸命にしがみついていた県の有力者で、かつ彼の保護者である人が、むごたらしく暴露の犠牲になった場合を二つまで見た。一つの場合は、なんだかかなりな醜態を演じて結末になったし、もう一つの方はあやうく面倒なことになりかかったくらいである。つまりこういうわけで、ルージンはペテルブルグへ着くと同時に、とりあえずこうした方面の真相を調

べ上げ、必要に応じては万一の場合のために先手を打って、『わが新しき世代』にとり入ろうと決心したのである。この万一の場合のために、彼はレベジャートニコフに期待をかけていた。で、たとえば、ラスコーリニコフを訪問した時なども、彼はもう他人の口まねで覚えたきまり文句を、どうにかすらすらと使いこなせるようになったのである。

もちろん彼は、レベジャートニコフが恐ろしく単純な俗人であるということを、早くも見わけてしまった。しかし、この事実も、いっこうにルージンの迷いを解きもしなければ、元気をつけもしなかった。たとえ進歩主義者が一人のこらず、同じような馬鹿者であると確信しても、なお彼の不安は静まらなかったに相違ない。実のところ、そうした教理とか、思想とか、体系（システム）とかこういうものでレベジャートニコフは彼に突撃して来たのである）、そういったものなどは彼になんの用もなかった。彼には独特の目的があった。彼はただゆうよなく寸時も早く、そこでは何がどうなっているかを知るのが、必要なのであった。はたして、これらの人々に実力があるかどうか？　はたして自分にとって恐るべきものがあるかどうか？　もし自分が何か仕事をはじめたら、彼らは自分を暴露するかどうか？　もし暴露するとしたら、いかなる点に対して暴露を行なうのだろう？　また全体に、このごろはどんな点に対して暴露を行なっているのか？

もし彼らが実際に力を持っているとすれば、どうにかして彼らに接近した上、さっそく彼らにいっぱい食わしてやることはできないか？　これは必要なことか、どうか？　たとえば彼らの力を利用して、何か自分の出世の助けになるようなことはできないか？　一口に言えば、彼の前には数百の疑問が控えていたのである。

このレベジャートニコフはどこかの勤め人だが、腺病質（せんびょうしつ）のるいれきもちで、不思議なくらい亜麻色の毛をした、背の低い小柄な男で、カツレツのような頬ひげを立て、それを自慢にしていた。おまけにほとんど年じゅう目が悪かった。気持はかなり柔和な方だったが、ことばは恐ろしく自信ありげで、時には度はずれに高慢くさく聞こえることがあった――それが彼の貧弱な風采（ふうさい）と比較して、ほとんどいつも滑稽（こっけい）の感を与えた。それでも、リッペヴェフゼルの下宿人の中では、かなり幅のきく方だった。つまり酔っ払い騒ぎをしないし、間代もきちょうめんに払ったからである。こうした性質があるにもかかわらず、レベジャートニコフはどこか間が抜けていた。彼が進歩主義や『わが新しき世代』に合流したのは、実は感激から出たことなのである。この男はお手軽に最新の流行思想に付和雷同して、すぐさまそれを凡化してしまい、時にはきまじめで奉仕しているいっさいのものをまたたく間にカリカチュア化してしまうような、そんじょそこらにうようよしている俗人や、へなへなした月足らずや、何一つ学びおおせたことのないわからずやなどの、種々雑多な大群の一人なのであった。

もっとも、レベジャートニコフはごくのお人よしだったにもかかわらず、自分の同居人であり昔の後見人であ

るルージンが、こっちでもやはりいやでたまらなくなりかかっていた。それは双方からとつぜん相互的に起こったことなのである。レベジャートニコフがいかに単純でも、ルージンが自分をだましていることも、内心ひそかに軽蔑していることも、『実際はけっしてそんな人間じゃない』ということも、だんだん少しずつ見抜いたのである。彼はルージンにフーリエの教義や、ダーウィンの理論などを説いて聞かそうと試みたが、こちらは特に近ごろになって、なんだかあまり冷笑的な態度でそれを聞くようになったのみか、最近は悪口までつくようになった。それはほかでもない、ルージンが本能的に相手の正体を見抜くようになったからである。つまり、レベジャートニコフは平凡な薄馬鹿であるばかりか、もしかすると嘘つきで、自分のサークルでさえ、少し重立ったところとはなんの関係もなく、ただまた聞きで少しばかり知っているにすぎない。のみならず、話のしどろもどろになり勝ちなところから見ても、自分の宣伝事業すらろくすっぽ知らないらしいから、暴露家などにはどうしてどうしてなれそうもない！　ついでにちょっと言っておくが、ルージンはこの一週間半ばかり（ことに最初の間は）、レベジャートニコフから妙な賛辞を受けていた。といって、つまり別に抗議をしないで、黙って聞いていたのである。たとえば、間もなくどこか町人街（メシチャンスカヤ）あたりに、新しい『共産団』ができれば、あなたは喜んでその建設に尽力するだろうとか、あるいは結婚のその当日に、ドゥーネチカが恋人を作るような了見を起こしたとしても、あなたはそのじゃまをしないだろうとか、また将来生まれる子供にも洗礼を受けさせないだろうとか、すべてそういった風のことだった。ルージンはいつものくせで、どんな性質を自分に押しつけられても抗弁しようとせず、こんな風な賞め方でも黙認していた――それほど彼はあらゆる賛辞がうれしかったのである。

　この朝、どういうわけか、五分利つきの証券をなん枚か両替してきたルージンは、テーブルに向かって紙幣や債券の束を勘定していた。今までほとんど金というものを持ったことのないレベジャートニコフは、部屋の中を歩き回りながら、この紙幣（さつ）束を無関心なといおうより、むしろ侮蔑の気持で見ているような顔をしていた。ルージンの方では、レベジャートニコフがこんな大金を平気でながめられようとは、これっから先も信じていなかった。またレベジャートニコフの方でも、情けないような気持でこう考えた――もしかするとルージンは自分のことをそんな風に考えかねない男かもしれない、それどころか、自分の無力さや、二人の間に大きな距離のあることを当てつけるために、紙幣の束をひろげ立てて自分の気持をくすぐり、嘲弄（ちょうろう）する機会が来たのを喜んでいるのかもしれない。

　レベジャートニコフはルージンをつかまえて、新しい特殊な『共産団』の建設という、十八番（おはこ）の題目を進展させにかかったけれど、今日は相手が今までになくいらいらして、いっこう注意を払おうとしないのに気がついた。そろばん玉のかちかちという合い間合い間に、ルージン

の口から漏れる簡単な抗弁と批評はあまりにも見え透いた意識的な侮辱と嘲笑にみちみちていた。が、『人道主義的』なレベジャートニコフは、ルージンの不機嫌を昨日の破談のせいにして、一刻も早く、その題目へ話を持ってゆこうとあせった。彼はこの問題について、この先輩の失望を慰めうるのみならず、将来の精神的発達に『必ず』裨益しうるような、進歩主義的で宣伝価値のある意見を持っていたのである。

「いったいあすこじゃ、あの……あの後家さんのとこじゃ、どんな法事があるんです？」レベジャートニコフのことばを一ばんかんじんなところでさえぎりながら、ルージンはふいにこう問いかけた。「まるでご存じないような口ぶりですね。つい昨日わたしがそのテーマについて話をした上、すべてこうした宗教的儀式に関する思想を発展さしたじゃないですか……それに、あの女はあなたも招待したじゃありませんか。わたしは、聞きましたよ。あなたはご自分で昨日あの女とお話しなすったし……」

「僕はまさかあのばかな乞食女が、あのもう一人のばかやろうからもらった金を、すっかり法事に入れ上げようとは夢にも考えなかった。今あの傍を通って、びっくりしたくらいですよ。酒だとかなんだとかいって、たいへんなしたくなんですからね……おまけに何人も客を呼んでるが、なんのことだかさっぱりわけがわからん！」とルージンは何か目的でもあるらしく、何やかや尋ねるような顔をして、話をこっちへ持ってきながらことばを続けた。「なんだって？　僕も招待されてるんですって？」急に頭を上げながら、彼は言い足した。「それはいったいいつのことです？　僕は覚えがないが。もっとも、僕は行きませんよ。僕があんな所へ行ってどうするんだ？　僕はただ昨日ちょっと通りすがりに、あの女と話しただけなんですよ――貧しい官吏の未亡人として、一時扶助という形で一年分の俸給を、扶助金にもらえるかもしれないという話をね。してみると、あの女はそのお礼に僕を招待したんじゃないかな？　へ、へ、へ！」

「わたしもご同様行かないつもりです」とレベジャートニコフは言った。

「そりゃそうだろうとも！　自分が手を下してなぐったんだからね。気がさすのはわかりきってるさ。へへ！」

「誰がなぐったんですって？　誰を？」とレベジャートニコフは急にどきっとして、顔まで赤くした。

「なに君がですよ、カチェリーナ・イヴァーノヴナをね、ひと月ばかり前に、どうです！　僕は聞いたんだからね、昨日……つまりこれが君らの信念というやつなんですよ！……それじゃ婦人問題の議論だって怪しいもんだ、へ、へ、へ！」これで気休めになったらしく、ルージンはまたそろばんをはじきにかかった。

「そんなことは皆でたらめの誹謗ですよ！」この一件を持ち出されるのを、たえずびくびくしていたレベジャートニコフはむきになった。「それはまるで事実と相違していますよ！　それは別の話ですよ……あなたは聞きちがえをしていらっしゃる。根もない世間の陰口ですよ！

あの時わたしはただ自己防衛をしただけなんです。あの女が先にわたしに飛びかかって、引っかこうとした……あの女はわたしの頬ひげを片っ方すっかり引抜いてしまったんですからね……どんな人間だって、自分の身柄くらいは守ってもよさそうなものですね。それに、わたしは誰にだって暴行を加えることなんか、許すわけにゆきませんよ……主義としてね。だって、あれはもう専制主義（デスポチズム）です。いったいわたしはどうすればよかったんです？　ぼんやりあの女の前に立ってるんですかね？　わたしはただあの女を突きのけただけですよ」

「へ、へ、へ！」とルージンは意地の悪そうな笑い方を続けた。

「あなたは自分が腹が立って、むしゃくしゃするものだから、わざと突っかかってくるんでしょう……あんなのくだらない話で、婦人問題なんかにはけっして少しもふれちゃいません！　あなたの解釈は間違っています。わたしはこう考えたんですよ。もし婦人が万事につけて、体力までも男子と同等だとすれば（このことはもう肯定されていますよ）、そうすればしたがって、あの場合だっても平等でなくちゃならんはずです。もっとも、後でよく考察した結果、そんな問題は本質的に存在すべきでない、と論結しました。なぜかといえば、喧嘩（けんか）はあってはならないもので、喧嘩なんて場合は来るべき社会において、考えることさえできないものだからです……したがって、もちろん、喧嘩の中に平等を求めるのは、奇怪なことに決まっています。わたしもそれほど馬鹿じゃありませんからね……もっとも、喧嘩というものはありません……つまり、今後はなくなるけれど、今はまだある……ちょっ！　ちくしょう！　どうもあなたと話してると、妙に脱線してしまう！　わたしが法事に行かないのは、ああした不快ないきさつがあるからじゃない。ただ主義として行かないだけです。法事などといういまわしい偏見の仲間入りをしたくないからです、そうなんですよ！　そりゃ、もっとも、行ったってさしつかえはないですよ。ただ冷笑してやるために。ね……ただ残念なのは、司祭が来ないということです。さもないと、むろん行くんですがね」

「というと、つまり他家（よそ）へごちそうになりに行って、そのごちそうと一緒に、自分を招待してくれた人たちにまで、その場で唾（つば）を引っかけようというんですね。いったいそうなんですか？」

「いや、けっして唾を引っかけるのじゃありません、ただ抗議をするんです。わたしは有益な目的をいだいて行くんです。開発と宣伝を間接に助けうるわけなのです。人は誰でも開発し、宣伝する義務があります。それも峻烈（しゅんれつ）であればあるほど、いいのかもしれませんよ。わたしは思想の種を投ずることができます……その種から事実が生じるというわけですよ。なんでわたしがあの人たちを侮辱することになります？　もっとも、はじめは怒るかもしれないけれど、やがてそのうちに、わたしが利益をもたらしてやったことに、自分でも気がつくでしょう。現にわれわれ仲間のテレビヨーワですね（いま共

産団にはいっている婦人なんです）、それが家庭を飛び出して……ある男に身を任せた時、自分の両親にあてて、偏見の中に住んでいるのはいやだから、自由結婚をするという手紙を送った。ところがそれではあまり乱暴すぎる、両親にはもう少し斟酌（しんしゃく）しなくちゃ、手紙だってもう少し穏やかに書かなくちゃと言って、非難するものがあったのです。が、わたしに言わせると、そんなことは全くくだらないことで、穏やかに書く必要は少しもありません。むしろそういう時にこそ抗議する必要があるくらいですよ。あのワレンツなどは七年間も夫と同棲しながら、二人の子供を捨てて、一挙に手紙で夫にこう宣告したものですよ。『わたしはあなたと一緒にいては、幸福でいられないことを自覚しました。あなたは、共産団という手段による、ぜんぜん別な社会組織のあることをわたしに隠して、このわたしをだましていらっしゃいました。それは永久に許すわけにいきません。わたしは最近そのことをある立派な人から聞いたので、その人に身を任せ、一緒に共産団を組織することにしました。あなたをだますのは破廉恥（はれんち）なことと思いますから、率直に申します。あとはどうともお好きなように。わたしを引戻そうなどとは考えないでください。あなたはあまり手遅れにしておしまいなすったのですもの。ご幸福を祈ります』まあ、そうした種類の手紙はこんな風に書くもんですよ！」

「そのテレビヨーワってのは、君がいつか三度目の自由結婚をやったとかいってた、あの女じゃありませんか？」

「いや、厳密に判断すれば、やっと二度目ですよ！　しかし、よしんば四度目であろうと、十五度目であろうと、そんなことはくだらない枝葉の問題ですよ！　わたしなんか、いつか自分の両親が死んだのを悔んだことがあるとすれば、それはもういうまでもなく今です。もしもまだ両親が生きていたら、それこそプロテストでもって、うんと心胆を寒からしめてやったものをと、そんなことをなん度空想したかもしれないくらいです！　わざとでもそうしたはずですよ……子供はいわゆる『切り離されたパンのきれ』で、親のふところへ戻りっこないなんて、ちょっ、そんな旧式の消極主義はだめです！　わたしは親たちに思い知らせてやったんだがなあ！　びっくりさせてやったんだがなあ！　まったく、誰もいないのが残念ですよ！」

「びっくりさせるためにですか？　へ、へ、それはどうでもお好きなように」とルージンはさえぎった。「それより、一つお尋ねしたいことがある。あなたはあのなくなった役人の娘を知ってるでしょう、あの貧相なひ弱そうな女！　あの娘のことでみんなが言ってるのは、全く事実なんですかね、え？」

「それがいったいどうしたんです？　わたしに言わせると、つまりわたし一個の確信によると、あれは女としてもっともノーマルな状態ですよ。なぜあれがいけないんでしょう？　つまり distinguons（特性）なんですものね。現在の社会では、そりゃもちろん、全然ノーマルとはいえません。現在は強制的なものですからね。しかし

未来の社会では完全にノーマルなものになります。なぜなら、自由行為なんですもの。それに、今だってあの娘はその権利を持っていたんです。あの娘は苦しんだが、それはあの女の基金、つまり資本で、あの娘はそれを自由にする権利があったんですよ。もちろん、未来の社会では、基金も不必要になるでしょうが、あの娘の役割は別の意味を付せられるようになり、整然とした合理的な条件を与えられるでしょう。ところで、ソフィヤ・セミョーノヴナ一個に関しては、現在わたしは彼女の行為を社会制度に対する勇敢な、具象化された反抗（プロテスト）と見ています。そして、このために彼女を深く尊敬しているのです。彼女をながめていると、喜びを感じるくらいです！」

「だが、この家からあの娘をいびり出したのは、ほかでもない君だってことを聞きましたぜ？」

レベジャートニコフは猛烈な勢いで怒り出した。

「そらまた中傷だ！」と彼は絶叫した。「真相はまるで、まるで違っています！　それこそ話が違いますよ！　それはみなカチェリーナ・イヴァーノヴナが何もわからないもんだから、あの時でたらめを言ったんです！　それに、わたしはけっしてソフィヤ・セミョーノヴナをねらったことなんかない！　わたしは全くそういう野心なしに、ただもうあの女に反抗（プロテスト）の意識を呼び起こそうと努力し、彼女の精神発達を志したきりです……わたしにはただ反抗（プロテスト）が必要だったんです。それに、ソフィヤ・セミョーノヴナ自身が、もうこの家にいられなくなったんじゃありませんか！」

「じゃ、共産団へでもはいれとすすめたんですかね！」

「あなたは始終ひやかしてばかりいらっしゃる。しかも、それがはなはだまずいんですよ。失礼ながらご注意しときます。あなたはなんにもおわかりにならないんです！　共産団にはそんな役割はありません。共産団はそんな役割をなくするために設立されてるんですよ。共産団になると、この役割は現在の本質をすっかり変えてしまいます。そして、ここで愚劣だったものも、あちらでは賢明なものになる。ここで、現在の状態では不自然なものも、あちらではきわめて自然なものになる。万事はすべて、人間がいかなる状況の中に、いかなる環境の中にいるか、で左右されるものです。すべては、環境のいかんにかかっているので、人間そのものは問題じゃないのです。ソフィヤ・セミョーノヴナとわたしは、今でも円満に交際していますが、これで見ても、彼女がまだ一度もわたしを自分の敵だとか、侮辱者だとかいう風に思わなかった、立派な証拠じゃありませんか。わたしは彼女に共産団入りをすすめていますが、ただしそれはぜんぜん、ぜんぜん別な基礎の上に立つ共産団です！　あなた何がおかしいんです？　今われわれは従前のものよりいっそう広い基礎の上に、自分自分の特殊な共産団を創立しようとしているのです。われわれは信念の点からいって、さらに一歩進んでいるのです。われわれはさらに多くを否定するものです！　もしドブロリューボフが棺の中からよみがえってきたら、わたしは彼と一論争したでしょう！　ベリンスキイなんか一ぺんでやっつけてやります

よ！　がまあさしあたり今のところ、ソフィヤ・セミョーノヴナの啓発を続けますよ。あれは実に実に美しい性質の持主です！」
「ふん、つまりその美しい性質を利用しようってんでしょう、え？　へ、へ！」
「けっして、けっして！　けっしてそんな！　まるで反対です！」
「ふん、まるで反対もすさまじい！　へ、へ、へ！　よく言ったもんだね！」
「ほんとうですというのに！　いったいどんな理由があって、あなたに隠す必要があるんでしょう、まあ考えてもごらんなさい！　それどころか、わたしは自分でも不思議なくらいなんですよ――わたしとさし向かいになると、彼女はなんだかとくべつ固くなって、恐怖に近いほど純潔なはにかみやになるんですからね！」
「それで君が大いに啓発してるわけなんでしょう……へ、へ！　まあ、そういう羞恥なんて無意味なものだと、証明してやってるんでしょうな？……」
「まるで違います！　まるで違います！　あなたはまあなんてがさつに、なんて愚劣に――いや、これは失礼――啓発という語を解釈していらっしゃるんでしょう！　あなたはなあんにもおわかりにならないんだ！　ああ、驚いた、あなたは実にまだ……できていないんですねえ！　我々は女性の自由というものを求めているのに、あなたの頭にあるのはただ……わたしは女性の純潔とか羞恥とかいう問題は、それ自体無益な偏見だと思うから、頭から問題にしないことにしていますが、彼女がわたしに対して純潔な態度を持しているのは、十分に十分に認めてやります。なぜって、そこに彼女の意志と権利の全部があるからです。もちろん、もし彼女が自分からわたしに向かって『あなたと一緒になりたい』と言えば、わたしは自分を非常な幸運児と考えるでしょう。わたしはあの娘がとても気に入ってるんですからね。しかし今のところ、少なくとも今までは、わたし以上に礼儀ただしくいんぎんに彼女に対し、彼女の価値に尊敬を示した人間は、かつて一人だってありゃしませんよ……わたしは待っているんです、望みをかけてるんです――ただそれだけです！」
「君それより何かあの女に贈物をしたらいいでしょう。僕は賭けでもするが、君はまだこのことを考えもしなかったに違いない」
「今も言ったことだが、あなたはなあんにもわからないんですね！　そりゃもちろん、彼女の境遇はそういったものに違いないです。しかし――これは別問題ですよ！　ぜんぜん別問題ですよ！　あなたはてんからあの女を侮蔑していらっしゃる。あなたは侮蔑に値すると誤認した事実だけを見て、人間そのものに対してまで、人道的な見方を拒もうとしていらっしゃるんです。あなたはまだあの女がどんな性質を持っているか、よくご存じないんだ！　ただ一つ非常に残念なのは、彼女が近ごろどうしたのか、すっかり読書をやめてしまって、わたしのところへも本を借りにこなくなったことです。もとはよく

借りてたんですがね。それからもう一つ残念なのは、反抗（プロテスト）に対する意力と決心とはありあまっていながら、――しかも一度はそれを実地に証明して見せながら――まだどうも独立心が、つまり自己以外のものに左右されない精神、いっさいを否定する精神が足りないので、ある種の偏見や……ばかげた習慣などから、全く絶縁しきれないことですよ。が、それにもかかわらず、彼女はある種の問題に対してはきわめてすぐれた理解力を示しています。たとえば、彼女は手の接吻（せっぷん）に関する問題を立派に理解しました、つまり、男が女の手に接吻するのは、非平等の観念で女を侮辱するものだということですね。この問題は我々仲間で討論されたことがあるので、わたしはすぐ彼女に伝えてやったわけです。フランスにおける労働組合のことも、彼女は熱心に聞きましたよ。わたしはいま未来の社会で、他人の部屋へ自由に出入りができるという問題を、彼女に説明してやっているところです」

「それはまたいったいなんのことです」

「最近われわれ仲間でこういう問題を討論したんです。つまり共産団の団員は、他の団員の部屋へ、それが男であろうと女であろうと、いつでもはいる権利があるや否やの問題ですが……結局、あるということに決議されました……」

「じゃ、もしその時その男なり女なりが、欠くべからざる要求の遂行中だったら、どうするんです、へ、へ！」

レベジャートニコフは腹を立ててしまった。

「あなたはいつもそんなことばかり！　あなたは唯もうそんなことばかり、そんないまいましい『要求』なんてことばかり言っていたいんですね！」と彼は憎々しげに叫んだ。「ちょっ、わたしはあなたに体系（システム）を説明するとき、つい早まって、このいまいましい要求なんてことを口にしたのが、実にしゃくにさわる。腹が立ってたまらない！　ちくしょう！　これはあなた方のような人にとって躓（つまず）きの石です。一番いけないのは、まだはっきり会得のいかない前から、笑い草にしてしまうことですよ！　しかも、それで自分たちの方が本当だと思って、得々としているんだからなあ！　ちぇっ！　わたしは幾度となく主張したんですよ――こういう問題を新参者に説明するのは、いよいよその当人が十分発達をとげ、方向が決まった時でなくちゃだめだってね。それにまあ考えてもごらんなさい、下水溜（だ）めにだって何も恥ずかしい軽蔑（けいべつ）すべきものはないじゃありませんか？　わたしなんかまっさきにどんな下水溜めでも、掃除して見せる用意があります！　これは自己犠牲でもなんでもありませんよ！　単に仕事です、社会のために有益な高尚な活動にすぎません。それは他のいかなる活動にも劣るものでなく、むしろたとえば、ラファエルやプーシキンなどの活動よりも、はるかに上位にあるくらいです。なぜって、この方がより有益だからです」

「そしてより高尚なんでしょう、より高尚なんでしょう、へ、へ、へ！」

「より高尚とはいったいなんですか？　人間の活動を定

義する意味において、そんな表現はわたしにはわからないです。『より高尚』とか、『より寛大』とかいうような、そんなことはことごとく無意味です、愚劣です、わたしの否定している古い偏見にとらわれたことばです！　人類にとって有益なものはすべて高尚なんです！　わたしはただ有益という一語を解するのみです！　まあ、いくらでもひひひ笑いをなさい。しかしそれはそうなんですから！」

ルージンはむしょうに笑った。彼はもう勘定をすまして金をしまっていた。けれど、その中のいくらかは、なぜかそのままテーブルの上に残しておいた。この『下水溜めの問題』は、下劣きわまる性質を有しているにもかかわらず、もう幾度となく、ルージンとその若い友人の間で、不和と反目の原因になっていた。何よりもばかげているのは、レベジャートニコフがむきになって腹を立てると、ルージンはそれをいい腹いせにしていることだった。ことにいま彼は、特別にレベジャートニコフを怒らしてみたかったのである。

「あなたは昨日の失敗が原因（もと）で、そんなにむしゃくしゃして、やたらに人にからんでくるんです」とレベジャートニコフはとうとう腹にすえかねて、こう言ってしまった。彼は概して言えば、その『独立心』や反抗（プロテスト）の精神にもかかわらず、どういうものか、ルージンには思い切って反対する勇気がなかった。全体として、いまだに彼はルージンに対して、長年の習慣になっている一種のうやうやしい態度を、守り続けているのであった。

「まあ、それよりこういうことを聞きたいんですがね」とルージンは高飛車な調子でいまいましそうに言った。

「君にできるかしらん……いやそれより、こういった方がいいかな――君はほんとうに今いった若い娘とそれだけ親密なんですか？　なら、今すぐちょっとここへ、この部屋へ呼んでもらいたいんですがね。もうみんな墓地から帰ったらしい……なんだか騒々しい足音が聞こえてきたから……僕は、一つあの女に会って話したいことがあるんだけれど、あの娘とね」

「あなたいったいなんの用で？」とレベジャートニコフはびっくりして尋ねた。

「なに、ちょっと用があるんでね。僕は今日明日にもここを立つつもりだから、ちょっとあの女に知らせておきたいことがあるんですよ……もっとも君もその話の間ここにいてさしつかえありませんよ。いや、むしろいてもらいたいくらいだ。でないと、君はどんなことを考えるかわかりゃしないからね」

「わたしはけっして何も考えやしませんよ……ただちょっと聞いてみただけですよ。もし用があるんでしたら、あの女を呼び寄せるくらい造作もないこってす。すぐに行って来ましょう。が、ご安心なさい、あなたのじゃまなんかしませんからね」

はたして五分ばかりたつと、レベジャートニコフはソーネチカを連れて帰ってきた。ソーニャはさも驚いたらしい様子で、いつものくせでおどおどしながらはいってきた。彼女はこういう場合いつもおどおどして、新しい

顔、新しい知己を極端に恐れるのであった。以前まだ子供の時分からそうだったのが、このごろではいっそうひどくなっていた……ルージンは『優しくいんぎんに』彼女を迎えたが、そこにはなんとなく浮わついたなれなれしさがあった。もっともそれは、ルージンの意見によると、彼のように名誉もあれば重みもある男が、彼女ごとき年の若い、ある意味において興味のある女に対するには、ふさわしいものなのであった。彼は急いで彼女を『元気づかそう』と努めながら、自分とさし向かいにテーブルに着かせた。ソーニャは腰をおろし、あたりを見回して――レベジャートニコフから、テーブルの上においてある金に、それからまたちらとルージンに目を移した。そして、まるで釘づけにでもされたように、そのまま彼から目を放さなかった。レベジャートニコフは戸口の方へ行こうとした。ルージンは立ち上がって、仕ぐさでソーニャにすわっていろという意を見せ、レベジャートニコフを戸口のところで引止めた。

「あのラスコーリニコフは、あすこにいますかね？　来ていましたかね？」と彼はささやくように尋ねた。

「ラスコーリニコフ？　いましたよ。それがどうしたんです？　ええ、あすこにいますよ……いまはいって来たばかりです。わたしは見ましたよ……それがどうしたんです？」

「いや、だからこそ僕は特にここに残って、われわれと一緒にいてくれたまえと頼むんですよ。僕があの……娘さんと二人きりになってしまわないようにね。話はくだらないことだけれど、それがためにどんな臆測をされるかわからないからな。僕はね、ラスコーリニコフにあそこですっぱ抜かれるのがいやなんだ……僕が何を言ってるか、わかるでしょう？」

「あ、わかりました、わかりました！」とレベジャートニコフは急に察しがついた。「そうだ、あなたはその権利がある……もっとも、わたし一個の信ずるところによると、むろんあなたの心配はちとおおげさすぎますがね、しかし……それでもあなたには権利がある。よろしい、わたしは残りましょう。ここの窓の傍に立っていて、あなたのじゃまをしないようにします……わたしの意見では、あなたはその権利があります……」

ルージンは長椅子へ戻って、ソーニャの向い側に腰をおろし、じっと穴のあくほど彼女を見つめていたが、ふいに、恐ろしくしかつめらしい、いくらかいかついくらいの顔つきをした。それは『お前だって何か変なことを考えるんじゃないよ』とでもいうような風だった。ソーニャはすっかりまごついてしまった。

「第一に、ソフィヤ・セミョーノヴナ、あなたのお母さんにあやまっていただきたいんです……確かそうでしたね？　カチェリーナ・イヴァーノヴナは、あなたにとってお母さん代わりですね？」とルージンは大いにしかつめらしい、とはいえ、かなり愛想のいい調子で口をきった。

彼がきわめて友誼的な意図をいだいているのは、よそ目にもそれと察しられた。

「ええ、そのとおりでございます。そのとおりですわ。母がわりなので」とソーニャは早口に、おどおどした調子で答えた。
「ところで、実はわたしはやむを得ない事情のために、失礼しなければならないので、そのことをお母さんにお断わりしてくださいませんか。せっかくご親切に招待してくだすったのですが、僕はお宅のお茶の会に……いや、法事に出られなくなったんで」
「は……そう申します……今すぐ」ソーネチカはあわただしく椅子からとび上がった。
「まだそれだけじゃないんですよ」ルージンは彼女がうすぼんやりで作法を知らないのを見、にやりと笑いながら、彼女を押し止めた。「あなたは私をよくご存じないんですね、ソフィヤ・セミョーノヴナ。わたしがこんなつまらない、自分一人に関したことで、あなたのような方をわざわざお呼び立てしてご迷惑をかけるなんて、そんなことを考えてくだすったら困ります。わたしの目的はもっと他にあるんですよ」
ソーニャは急いで腰をおろした。テーブルの上におきっ放しにしてある灰色（二十五ルーブリ）や虹色（にじいろ）（百ルーブリ）の紙幣が、またしても目の中でちらついたが、彼女はすばやくそれから顔をそむけて、ルージンを見上げた。と、ふいに彼女は、他人の金に目をくれるのが無作法な、特に彼女にとって無作法なことに思われたのである。彼女はルージンが左の手で押えている金の柄付眼鏡（えつきめがね）と、それから同じ手の中指にはめている大きな、どっしりした、すばらしく立派な黄色い石入りの指環（ゆびわ）に、視線を止めようとした。が、急にそれからも目をそらしてしまったので、やり場に困ったあげく、またもやルージンの目をまともに見つめた。こちらはしばらく無言の後、前よりもいっそうしかつめらしくことばを続けた。
「わたしは昨日ふと通りがかりに、お気の毒なカチェリーナ・イヴァーノヴナと、一言二言口をきき合ったんですが、その一言二言でも、あの人が不自然な状態におられることを承知するのに、十分なくらいでした――もしこうしたいい方ができるとすればですね……」
「そうでございます……不自然な」とソーニャはあわてあいづちを打った。
「あるいはもっと簡単に、もっとわかりやすく言えば――病的状態ですな」
「はあ、もっと簡単に、わかりやすく……そうですわ、病気なのですわ」
「そうですよ。そこでわたしは、あのひとのさくべからざる運命を見通して、人道的な感情――そのう、いわば同情の念に堪えないので、何かお役に立ちたいと思うのです。どうやらあの気の毒千万な家族一同は、今もうあなた一人を命の綱にしているようですな」
「失礼でございますが」と急にソーニャは立ち上がった。「昨日あなたは母に年金がいただけるかもしれないと、お話しになったそうでございますね？　で、母はもう昨日からわたしをつかまえて、あなたが年金のおりるように骨折ってくださるって、そう申しておりました。いっ

たいそれは本当でございましょうか？」
「いや、けっして。ある意味からいうと、そんなことはばかげているくらいですよ。わたしはただ服職中に死んだ官吏の未亡人に支給される、一時金のことをそれとなしにお話ししたまでです――それもひきがあればという話なんですよ――ところが、たしかあなたのご親父は、年限を勤め上げていらっしゃらないばかりか、最近ではまるで勤めにも出ておられなかったようでしたね。要するに、たとえ望みがあるとしても、それはきわめて幻のようなものですよ。なぜといって、実際のところ、この場合には扶助料を受けるなんの権利もないどころか、むしろその反対なんですからね……それだのにあのひとはもう年金なんてことを考え出すなんて、へ、へ、へ！なかなかがっちりした奥さんだ！」
「そうでございますわ、年金のことなんか……というのも、つまりあのひとが信じやすい、いい人だからでございますの。人がいいために、なんでも本当にするのでございます。そして……そして……そして……そして……頭があんな風な……そうですの……では、ごめんくださいまし」とソーニャは言って、また出て行きそうに立ち上がった。
「失礼ですが、あなたはまだすっかりお聞きにならないんですよ」
「はあ、すっかり伺いませんでしたわ」とソーニャはつぶやいた。
「ですから、おかけなさいよ」

ソーニャは恐ろしくどぎまぎして、また三度めに腰をおろした。
「あのひとが不仕合せな幼い子たちをかかえて、ああしている様子を見ると、わたしは――今もお話しした通り――何か力相応なことで、お役に立ちたいと思うんです。つまり力相応のことで、それ以上じゃありませんがね。たとえば、あのひとのために義捐金を募るとか、あるいは、慈善富くじのようなものでももよおすとか……まあ、そういった風のことをするんですな――よくこうした場合に親しい知人とか、または縁のない他人でも、一般に人助けをしたいと思う連中の企てることですね。つまり、そのことをお話ししたいと思ったのです。それはできると思いますが」
「はあ、けっこうでございますわ……きっと神様があなたを……」じっとルージンを見つめながら、ソーニャはあいまいな調子でいった。
「できますとも。しかし……それはまたあとで……いや、今日でも始めようと思えば始められることです。晩にお目にかかって、ご相談の上、いわゆる基礎を作ることにしましょう。そうですな、七時ころにここへ、わたしのところへ来てください。多分アンドレイ・セミョーヌイチも、われわれの仲間にはいってくれるでしょう……しかし、ここに一つ前もって、ようく申し上げておかなければならないことがあるんです。ソフィヤ・セミョーノヴナ、つまりそのためにわざわざあなたをお呼び立てして、ご迷惑をかけたわけなんです。ほかでもありません

が、わたしの意見はこうです――金をカチェリーナ・イヴァーノヴナの手へ渡すのはいけません、第一危険ですからね。その証拠は――今日のあの法事です。いわば明日の日なくてはならぬパンの一きれもなければ……はきものとかその他、何もかも不自由な身の上でありながら、今日はやれヤマイカのラム酒だの、やれマデイラの赤ぶどう酒だの、やれ……コーヒーだのと買い込むんですからな。わたしは通りすがりにちょっと見ましたよ。ところが明日はまた、パンの一きれのことまで、あなたの細腕にかかって来る始末でしょう。それはもうばかげた話ですよ。だからその義金募集にしても、わたし一個の考えによると、あの不幸な未亡人には金のことは知らさないで、ただあなただけに含んでいてもらうようにしなければなりません。わたしのいう通りでしょう？」

「わたしにはよくわかりません。でも、母があんなのはただ今日だけなんですの……何分生涯に一度きりのことですから……母はもうちゃんと供養がしたい、立派にあとを祭りたい、法事がしたいの一心でして……でも、母はたいへん賢い人なんですの。もっとも、それはもうどちらでもおよろしいように。わたしほんとうに、ほんとうに……あの人たちも皆あなたに……神様もあなたを……そして父のない子供たちも……」

ソーニャはしまいまで言い終わらず、泣き出した。

「さよう。では、そのお含みで。ところで、さしむき当座のために、わたし一個人として分相応の額を、とりあえずお納めください。それにつけて、くれぐれもお願いしますが、わたしの名は出さないでください。さあ……自分にもその、いろいろ心配があるので、これだけしかできませんが……」

こう言って、ルージンは十ルーブリ紙幣を念入りにひろげ、ソーニャに差し出した。ソーニャは受け取ると、ぱっと顔を赤くして、おどり上がった。そして何やらもぞもぞ言いながら、急いで別れの挨拶をはじめた。ルージンは得々として彼女を戸口まで見送った。彼女はやっとのことで部屋から飛び出すと、すっかり興奮して、へとへとになり、激しい困惑を感じながら、カチェリーナのところへもどってきた。レベジャートニコフはこの一幕の間、話の腰を折るまいとして、ずっと窓の傍に立ったり、部屋の中を歩き回ったりしていた。ソーニャが出て行くと、彼は急にルージンの傍へ近より、荘重な態度で手を差しのべた。

「わたしは何もかも聞きました、何もかも見ました」特に最後のことばに力を入れながら、彼はこう言った。「あれは実に高潔です。いや、そうじゃない、わたしは人道的と言おうと思ったんです！　あなたは感謝を避けようとなさいましたね、わたしは見ましたよ！　実を言えば、わたしは主義として個人的慈善には同感できない、なぜならば、慈善は悪を根本的に絶滅しないばかりでなく、かえってそれを培うようなものだからです。がそれでも、あなたの行為を見て満足を感じたことを、白状しずにいられません――そうです、大いにわが意を得たりです」

「なあに、つまらんことですよ！」と、いくらか興奮し

た様子で、何かレベジャートニコフの方をうかがうようにしながら、ルージンはつぶやいた。
「いや、つまらなかありません！　あなたのように、昨日の事件で侮辱され、憤慨させられていながら、同時に他人の不幸を考えることのできる人――そういう人は……たとえ自分の行為で社会的に過失を犯しているにもせよ――それでもとにかく……尊敬に値いしますよ！　わたしはね、ピョートル・ペトローヴィッチ、あなたにこんなことができようとは、思いもよらなかったですよ。まして、あなたの物の見方から推してゆけばね、ああ！　あなたの物の見方が、どれくらいあなたのじゃまをしていることでしょう！　たとえば、あの昨日の失敗が、どんなにあなたを興奮させていることか」とお人好し（ひとよ）のレベジャートニコフは、またしてもルージンに好感の増してくるのを覚えながら感嘆の叫びを上げた。「なんのために、いったいなんのためにあなたはこの結婚がぜひとも必要なんです。この法律的結婚が？　わが敬愛するピョートル・ペトローヴィッチ、なんのためにあなたは結婚の合法性が必要なんです？　ねえ、お望みならわたしをぶってもいいです――わたしはあの結婚が破談になって、あなたが自由の身になったのを喜んでいます。あなたが人類のために、まだ全然ほろび尽くさなかったのを喜んでいます。喜んでいますとも……さあ、これですっかり言ってしまいました！」
「それはほかでもない、君のありがたがる自由結婚なんかして、角（つの）を生やさせられたり（妻に不貞を働かれること）人の子供を背負い込まされたりするのがいやだからですよ。だから僕には合法的結婚が必要なんですよ」ただ何か返辞をするためといった調子で、ルージンはこう言った。
　彼は何かしら非常に気がかりなことがあって、考え込んでいる様子だった。
「子供？　あなたは子供の問題にふれましたね」進軍ラッパを聞きつけた軍馬のように、レベジャートニコフはぶるっと身震いした。「子供――これはもっとも重大な社会問題です。それはわたしも同感です。しかし、子供に関する問題は別様に解決されねばなりません。ある人々は子供というものを家庭の暗示として、根本から否定しています。が、子供のことはあとで話すことにして、今は角（つの）の方を論じましょう！　実を言うと、これはわたしの苦手なんですよ。あの醜悪な、軽騎兵（伊達寛濶な女性征服者の代名詞）式なプーシキン的の表現は、将来の辞書には想像もできないくらいですよ。いったい角とはなんであるか？　おお、なんという錯誤だろう！　いったいなんの角です？　なんのための角か？　なんてばかばかしい！　それどころか、自由結婚にはそんなものはありゃしません！　角、それはただ法律的結婚の自然的産物にすぎません。いわばその修正であり、反抗（プロテスト）であるんです。だからこの意味において、少しも恥ずべきものじゃありません……もしわたしがいつか――仮りにそういう愚劣な想像を許すとして――合法的結婚をするとすれば、その時わたしはむしろあなたの呪われる角を喜

ぶでしょう。その時わたしは妻にこう言います。『ねえ、僕はこれまではお前をただ愛していただけだが、今からお前を尊敬するよ。なぜって、お前は立派にプロテストをやったからだ！』とね。あなた笑いますね？　それはまだ偏見から解放される力がない証拠です！　くそっ、わたしだって合法的結婚で、妻に裏切られる場合の不愉快さがどんなものかってことは、よく知っています。しかし、それはただ双方が自ら卑しゅうしている、陋劣（ろうれつ）な事実の陋劣な結果にすぎないのです。自由結婚のように角が公然になってしまえば、その時はもう角なんかはなくなってしまう。そんなものは想像もできないようになり、角なんて名称さえなくなってしまいます。それどころか、あなたの奥さんはその行為によって、あなたを尊敬していることを証明するわけになります。だって、奥さんはあなたという人を、妻の幸福を阻害しない人、新しい夫ができたといって、妻に復讐なんかしない精神的発達をとげた人と見なしたことになるんですものね。いいなあ、ちくしょう、わたしは時々空想するんですよ――もしわたしが嫁入りするようなことがあったら――ちょっ！　何を言ってるんだ、もしわたしが結婚するようなことがあったら（自由結婚でも合法結婚でもそれは同じですが）、もし妻（さい）がいつまでも色男をこしらえなかったら、わたしはおそらく自分から、色男を引っ張って来てやるだろうと思いますよ。『ねえ』とわたしはいうでしょう。『僕はお前を愛しているが、その上にまだお前から尊敬してもらいたいのだ――そうなんだよ！』という風にね。そうでしょう、僕の言うとおりでしょう……」

ルージンはそれを聞きながら、ひひひと笑った。しかしかくべつ身を入れている様子はなかった。それどころか、ろくすっぽ聞いてもいなかった。彼は実際なにか他のことを考えていたのである。とうとうレベジャートニコフもそれに気がついた。ルージンは興奮の体（てい）で、もみ手をしながら考え込んだ。レベジャートニコフは、後になっていろいろ考え合せ、こういうことをすべて思い起こしたのである……

二

いったいどうしたわけでカチェリーナの混乱した頭に、こうした無意味な法事の計画が生まれたのか、その原因を明確に説明するのはむずかしいことである。実際そのために、マルメラードフの葬儀費用として、ラスコーリニコフからもらった二十ルーブリなにがしのうち、ほとんど十ルーブリ近くの金が注ぎ込まれたのである。事によったら、カチェリーナは間借り人一同、わけてもアマリヤ・イヴァーノヴナ（リッペヴェフゼル）に、故人が『彼らと比べてけっして劣らなかったばかりか、もしかすると、ずっとすぐれていたかもしれない』、したがって、彼らの誰一人として、故人を見下す権利を持っていないということを思い知らせるために、『型の如く』彼の供養をするのが、故人に対する義務だと考えたのかもしれない。あるいはまたそこには特別な貧者の誇りが、何より影響していたのかもしれない。この心理のために多くの貧民は、ただもう他人に『ひけをとらない』ために、他人に『うしろ指をさされない』ために、最後の力をふり絞って、今の生活習慣であらゆる人々に必要かくべからざるものとなっている社会的儀式などに、なけなしの貯金をはたいてしまうのである。それからまたカチェリーナは、世の中のすべてから見放されたような気のする今この時、これを機会として、『とるに足らぬけがらわしい間借り人たち』に、彼女が『世の中のしきたりや接待の仕方』を知っているばかりでなく、第一こうした境遇を送るために育てられたのとはまるで違う『立派な、貴族といってもいいくらいな大佐の家庭』に人となったので、自分で床を掃いたり夜中に子供のぼろを洗濯したりするように、しつけられてきたのではないということを、見せつけてやりたいと思った――こういう解釈も真実に近いような気がする。こうした矜持（きょうじ）と虚栄の発作は、時おり非常に貧しい、生活に打ちのめされた人々をも訪れて、どうかするといらだたしい、矢も楯（たて）もたまらぬ要求に変じるものである。しかも、カチェリーナはその上に、けっして打ちのめされた人間ではなかった。彼女は境遇のために殺されたかもしれないけれど、精神的に打ちのめされること、つまりおどしつけて屈服させられることは、あり得ないのであった。ソーネチカが彼女のことを、頭がめちゃめちゃになりかかっていると言ったのは、十分根拠のあることである。もっとも、確かに絶対にそうだとはまだ言えなかったけれど、最近この一年間に、彼女の哀れな頭はあまりに悩まされ通して来たので、いくらか変調を来さざるを得なかった。医者のことばによると、肺病の劇烈な症状亢進（こうしん）も、やはり知的能力の混乱に影響するとのことである。

酒類は複数で現わすように、いろいろ種類があったわけでもない。マデイラ酒も同様である。それは誇張にすぎないが、しかし酒はあった。ウォートカ、ラム酒、リスボンぶどう酒などで、品質は思いきり下等なものながら、量はいずれも十分にあった。食い物の方は、聖飯の

ほかに二、三の料理があったが（その中にはプリンも交じっていた）、それはみなリッペヴェフゼルの台所から運ばれたのである。その上に食後の茶とポンス酒のために、サモワールが一時に二つも用意された。買出しの方はカチェリーナ自身がどういうわけか、リッペヴェフゼル夫人のところに居候している惨めなポーランド人を助手にして取りしきった。この男はすぐさま走り使い用にカチェリーナのもとへさし向けられて、一生懸命に舌を吐き吐き、しかもそれを人目に立てようと努めながら、きのう一日と今朝一ぱい駆け回った。そしてくだらないちょっとした用でも、のべつカチェリーナのとこへ相談に駆けつけたり、勧工場まで追っかけて捜しに行きなどして、ひっきりなしに彼女を『少尉夫人』と呼びかけるので、初めのうちこそ、この『まめな親切な』人がなかったら自分はとほうに暮れていたとこだ、などと言っていた彼女も、しまいには閉口してうんざりしてしまった。

いったいカチェリーナの性分は、誰でも彼でも手当たりしだいの人をつかまえて、この上もなく立派な輝かしい色に塗り上げ、人によってはきまり悪くなるほど性急に賞めちぎるくせがあった。そして相手を賞めたいがいっぱいで、てんでありもしないことまで考え出して、自分でも心からまじめにそれを本当のことと信じてしまう。ところが、あとで突然一時に幻滅を感じて、つい何時間か前までは文字通りに崇拝しきっていた人と喧嘩をして、唾を吐きかけて突き出してしまう、というような風であった。彼女は生来笑い上戸の快活で穏やかな質であったが、つづく不幸と失敗の結果、すべての人が平和と喜びの中に暮らして、それ以外の生活など考えもしないようにという願望をあまり激しく持ちすぎるばかりか、それを要求するほどになったので、生活上のごくなんでもない不調和や、ほんのちょっとした失敗でも、ほとんど狂憤の状態に彼女を突き落とした。今までこの上もなく輝かしい希望と空想をいだいていたかと思うと、たちまち運命をのろいながら、手当たりしだいのものを引裂いたり、投げつけたり、壁に頭をぶつけたりするようになる。アマリヤ・イヴァーノヴナもどうしたわけか、急にカチェリーナから一方ならぬ信頼と尊敬をかち得た一人である。それは唯この法事が企てられた時、アマリヤが衷心からいっさいの面倒を見ようと腹を決めた、その辺からきているらしかった。彼女は食卓のしたくから、テーブル・クロースや食器その他のくめんを始め自分の台所で料理を作ることまで引受けた。カチェリーナはいっさいの全権を彼女にゆだね、留守のことを万事頼んで、自分は墓地へ出かけたのである。

実際、何もかも立派に準備ができた。テーブルはさっぱりとクロースでおおわれた。食器、フォーク、ナイフ、杯、コップ、茶碗、これらのものはむろん、いろんな間借り人から借り集めたので、形も大きさもちぐはぐではあったが、とにかく一定の時間にはそれぞれ各々の場所に並んでいた。で、アマリヤは立派に役目をしおおせたと感じながら、黒の服に新しい喪章をつけた室内帽子をかぶり、大めかしにめかしこんで、やや得意げに帰って

きた人たちを出迎えた。この得意さは当然なものであったにかかわらず、なぜかカチェリーナの気に入らなかった。『まるでアマリヤ・イヴァーノヴナがいなくちゃ、テーブルのしたくもできないといったような顔つきだよ、ほんとに！』それから新しいリボンのついた帽子も、やはり気に入らなかった。『ひょっとしたら、このばかなドイツ女は自分がおかみさんだのに、お慈悲で困っている店子（たなこ）を助けてやるんだなどと、鼻にかけているんじゃないかしら？　お慈悲で！　とんでもないことですよ！　カチェリーナ・イヴァーノヴナの父親は大佐で、ほとんど知事に匹敵するくらいなんですからね、時には四十人分からの食卓を用意したこともありますよ。だから、どこの馬の骨ともしれないアマリヤ・イヴァーノヴナなんか――じゃなかった、リュドヴィーゴヴナといった方がいいのだ――そんな人間なんか台所へだって入れてもらえやしませんよ……』で、カチェリーナは腹の中で、今日こそはどうでもアマリヤをやっつけて、身のほどを思い知らせてやろう、でないと、どこまで増長するかしれやしないと、内々決心はしていたけれど、今のところ唯そっけなくあしらっただけで、いざという時になるまでは、こうした感情は口には出すまいと、腹をきめたのである。

　それからいま一つの不快な事情も、カチェリーナをいらだたせる一部の原因をなしていた。ほかでもない、葬式の場には墓地までついてきたポーランド人をのけると、招かれた間借り人たちが誰一人顔を出さなかったせに、法事には、つまり振舞の方には、ごくつまらない貧乏たらしい、まるで人並みでないようなかっこうをしたやくざな連中が、ぞろぞろやってきたことである。しかも、彼らの中で少しは年功もあり、地位もあるような連中は、申し合せたように、みんなすっぽかしてしまった。たとえば、間借り人の中で一ばん地位のありそうな、ピョートル・ペトローヴィッチ・ルージンなどが、顔を出していなかった。しかもカチェリーナは昨日の晩、世界じゅうの人を向こうに回して、つまりアマリヤだの、ポーレチカだの、ソーニャだの、ポーランド人だのをつかまえて、あの高潔無比で寛大この上もない紳士は、もと彼女の先夫の友人だった人で、彼女の父の家に出入りしたこともあり、広く各方面に縁故があるので、彼女に相当な年金がさがるように、あらゆる手段を講じてやると約束してくれたと、さんざんふいちょうしたのである。ここで注意しておくが、カチェリーナはよし他人との関係や、状況を自慢するようなことがあっても、それはいっさいなんの利害観念も利己的打算もあるのではなく、全くの無心無欲で、いわば感情のあふれ出るままに、ただもう人のことをよく言いたい、そして相手に一段の価値を添えたいという、そうした喜びから出ていたのである。ルージンに続いては、多分『そのまねをした』のだろう『あのいやなやくざ者のレベジャートニコフ』も顔を出さなかった。この男などはいったい自分をなんと心得ているのだろう？　この男こそほんのお慈悲で招待してやったのではないか。それもルージンと同じ部屋に住

んで、その知合いでもあるので、招待しないのも具合が悪かったからというまでのことだ。それから、とうのたった娘を連れているやせた夫人も来なかった、それはアマリヤの貸間へ来てから、やっと二週間にしかならないのに、マルメラードフ一家の部屋で――ことに故人が酔っ払って帰って来た時に――起こる騒ぎや叫び声に対して、もうなん度か苦情を持ち込んだことがある。この話はむろんもうとっくにアマリヤを通じて、カチェリーナの耳にはいっていた。というのは、彼女がカチェリーナと口論して、家族全部を追い出してやるとおどしたついでに、お前さん一家が『お前さんたちなど足もとにも及ばぬ立派な間借り人』に迷惑をかけて困ると、ありったけの声でわめいたことがあったからである。それでカチェリーナはいまわざわざ、自分など『足もとにも及ばぬ』この夫人と娘を招待したのである。ことにこれまで偶然出会うたびに、その夫人が高慢らしく顔をそむけていたのだから、なおさらのことである――つまり、彼女はその夫人に、『自分たちは考え方も感情もあなた方より高尚で、恨みを忘れて招待する』ということを思い知らせ、またカチェリーナがこうした生活に慣れた人間でないことを、見せつけてやろうというのであった。この点は食事の間に、亡父の知事云々のことと一緒に、彼らに説明してやらなければならない。それと同時に、途中で会ったとき、何も顔をそむけることはない、そんなことはばかばかしい話だということを、それとなくほのめかしてやるはずであった。まだそのほかに、ふとった陸軍中佐（実は退職の二等大尉）もやって来なかった。が、これはもう昨日の朝から『酔っ払って足が立たない』でいることがわかった。

要するに、出席したのはただポーランド人と、脂じみた燕尾服を着ていやなにおいをさせる、にきびづらの無口で貧弱な腰弁と、それからもう一人、昔どこかの郵便本局に勤めていたが、いつの昔からかなんのためともわからず、誰かの情でこのアマリヤの貸間に置いてもらっている、つんぼでほとんど盲目同然の老人くらいなものだった。それからいま一人酔っ払いの退職中尉がいたが、これも実は糧秣局の役人で、無作法きわまる傍若無人な笑い声を立てる男で、しかも『どうだろう』チョッキもつけていないのである！　また誰やら得体もしれぬ一人の男は、カチェリーナに挨拶もしないでいきなりテーブルに着いてしまった。それから最後に一人の女が、着物の持ち合わせがないので、寝間着のままではいって来ようとしたが、それは、あまりといえばあまり無作法すぎるので、アマリヤとポーランド人で骨を折って、やっと外へ引っ張り出した。もっともポーランド人は、アマリヤの貸間にはかつて住んだこともなく、ここでは誰もついぞ見かけたことのない、仲間のポーランド人を二人つれてきた。それやこれやが一緒になって、カチェリーナをたまらなく不愉快にいらいらさせた。『こんなことなら、誰のためにあんなしたくをしたのかわかりゃしない！』場所にゆとりをつけるために、子供たちはたださえ部屋じゅうをふさいでいるテーブルにつかせず、うし

ろの片隅で箱の上に布をかけてすわらせた。しかも、二人の小さい子供をベンチにかけさせたので、ポーレチカは姉の役目で、二人の世話をして養ってやったり、『上品な子供らしく』二人の鼻をかんでやったりしなければならなかった。

一口に言えば、カチェリーナはわれともなく常にもまして尊大な、むしろごうまんといってもいいくらいの態度で、一同を迎えなければならなかった。中でも二、三のものには、まずいかつい目つきでじろじろ見回した後、高飛車に着席を請うた。カチェリーナはどういうわけか、すべての不参者に対する責任はことごとくアマリヤが負うべきものと考えたので、急にひどく彼女にぞんざいな態度を取り出した。すると、こちらはすぐにそれを気取って、これまたはなはだ感情をそこねてしまった。こうした発端は無事な結末を予想させるはずがない。やがて一同は席についた。ラスコーリニコフは、皆が墓地から帰ってきたのと、ほとんど同時にはいってきた。カチェリーナは彼の出席を心から喜んだ。第一、彼は来客一同の中で唯一の『教養ある客』だし、それに『人も知るとおり、二年後には、ここの大学で教授の講座を占めるはず』だからである。第二には、彼がすぐさま鄭重なことばで、なんとか葬儀に参列しようと思いながら、その意を果たすことができなかったと、詫びを言ったからである。カチェリーナは彼に飛びつくようにして、自分のすぐ左手にすわらせた（右手にはアマリヤが腰をおろした）。彼女は、料理が順序よく運ばれてみんなに行き渡るよう、のべつ気をくばったりやきもきしたりした。その上、この二、三日ことに根づよくなったらしい苦しげな咳が、絶えず彼女の声をとぎらせ、喉を締めつけるにもかかわらず、ひっきりなしにラスコーリニコフに話しかけて、半ばささやくような声で胸にたまった感情や、法事が失敗に終わった不満などを、性急に吐き出そうとするのであった。けれどその不満はまただしぬけに、ここに集まっている客たち――それも主として当のおかみに対する嘲笑――さも愉快そうなこらえ切れない嘲笑に入れかわるのであった。

「何もかもこのかっこう鳥のせいでございますよ。わたしが誰のことを言ってるかおわかりになりまして？　あの女のことですよ、あの女の！」とカチェリーナはおかみの方をあごでしゃくって見せた。「まあ、あれをごらんなさい。あんな大きな目をして、わたしたちであの女のことを話してると感づいたんですよ。でも、なんのことだかわからないものだから、目の玉ばかりむき出してるんですよ、ちょっ、ふくろうだ！　は、は、は！……ごほん、ごほん、ごほん！　いったいあの女はあの帽子がどうだというんだろう！　ごほん、ごほん、ごほん！　あなた気がおつきになりまして？　あの女はね、しじゅう自分がわたしを保護してるので、この席に出るのはわたしにとって光栄なのだ、とこういう風に皆さんに思われたくってたまらないんですよ。わたしはあの女をしっかりした人だと思ったものですから、少しは気のきいた人たちを、つまり故人の知合いだけを招待してくれと

頼んだのに、まあごらんなさい、なんて連中を引っ張ってきたんでしょう！　なんだか道化みたいな者ばかり！　汚らわしいったらありゃしない！　ちょっと、あの薄ぎたない顔をした男をごらんなさい。二本足を生やしたかさぶたのお化けじゃありませんか！　それからあのポーランド人たち……は、は、は！　ごほん、ごほん、ごほん！　誰一人、誰一人、あんな者を一度もここで見た人はないんですよ。わたしだって、あとにも先にも見たことはありゃしない。ねえ、いったいなんだってあんな連中がやって来たんでしょうね。本当にお尋ねしたいくらいですよ。お行儀よく並んですわってること。あなた、もし！」彼女はふいにその一人に呼びかけた。「あなたプリンをおとりになりましたか？　もっとおとんなさいまし！　ビールを召しあがれ、ビールを！　ウォートカはいかが？　まあ、ごらんなさい、とび上がってぺこぺこおじぎをしていますわ。ごらんなさい、ごらんなさい、きっとひもじくてたまらないんですよ、可哀想に！　なに、かまやしませんよ、少し食べさせてやりましょう。まあ、とにかく乱暴しないんですからね。ただ……ただ、わたしは全くかみさんの銀匙が心配ですの……アマリヤ・イヴァーノヴナ！」と彼女はだしぬけにおかみの方へふり向き、ほとんど皆に聞こえるような声で言った。「もしひょっとあなたの匙が盗まれても、わたしは責任を持ちませんからね、前もってお断わりしておきますよ！　は、は、は！」と彼女はまたラスコーリニコフの方へ向き直って、またもやおかみの方をあごでしゃくり、自分の奇抜な思いつきを喜びながら、からからと高笑いをした。「わからないんだ、まだわからないんだ！　口をぽかんとあけてすわってる様子ったら、ごらんなさい、ふくろうですわ、正真正銘のふくろうですわ、新しいリボンをつけた雄ふくろう、は、は、は！」

その時またもやこの笑いは絶え入るような咳にさえぎられ、それが五分も続いた。ハンカチには血の痕が残り、額には汗の玉がにじみ出た。彼女は無言でラスコーリニコフに血を見せた。そして、やっと息がつけるようになると、もうさっそくむしょうに元気づいて、赤いしみを頬に浮かべながらひそひそ彼にささやき始めた。

「まあどうでしょう、わたしはあの女に、あの奥さんと娘を呼んでくれるようにって（誰のことかおわかりになるでしょう）、いわばごくデリケートな使者を頼んだんですよ。何しろそういう場合には、それこそデリケートな態度で、うんと上手に話をしなければならないのに、あの女のやり方がまずいものだから、あの他所者のばか女が、高慢ちきな下司女が、あのやくざないなか者が、ただ来ないことに決めてしまったばかりか、こういう場合ごく普通な礼儀になっている断わりさえ言ってよこさないんですよ！　それも自分がどこかの少佐の未亡人で、年金の運動をするためにやってきて、お役所にお百度を踏んで、その上もう五十五にもなるというのに、眉を描いたり、白粉をつけたり、口紅をさしたりする（これはもう誰でも知っていますよ）、そのためなんですからね！　それから、ピョートル・ペトローヴィッチがな

ぜ来てくださらないのか、わけがわかりませんわ。それはそうと、ソーニャはどこにいるんだろう？　どこへ行ってしまったんだろう？　ああ、そう言ってるところへあの娘がまいりました、やっとのことで！　どうしたの、ソーニャ、どこへ行ってたの？　ほかならぬお父さんのお弔いだというのに、そんなにだらしなくしてちゃおかしいじゃないの。ロジオン・ロマーヌイチ、どうぞこの娘(こ)をあなたの隣りへかけさせてやってくださいまし。さあ、ここがお前の席だよ、ソーネチカ……なんでも好きなものをおとり。まあ魚の煮凝(にこご)りでもおとりな、それがいいよ。いまプリンを持って来るからね。それはそうと、子供たちにはやったかしら。ポーレチカ、お前たちの方には皆あるかえ？　ごほん、ごほん、ごほん！　ああ、よしよし。いい子をしてるんですよ、ソーニャ。それからおまえ、コーリャ、あんよをばたばたさせるんじゃありませんよ。坊ちゃんらしくお行儀よくすわってらっしゃい。え、なんだってソーネチカ？」

ソーニャはさっそく大急ぎで、みんなに聞こえるように苦心しながら、自分が当人に代わってこしらえ上げて、しかもその上に修飾を施したよりぬきの鄭重なことばづかいで、ルージンの謝辞を彼女に伝えた。それからまた、ルージンがじきじき差し向かいで用件の話もしたり、今後とるべき方法について打合せもしたいしするから、暇ができしだいさっそくお訪ねするという、伝言をも申し添えた。

ソーニャは、この報告がカチェリーナの心をやわらげ、落ち着かせるばかりでなく、その自尊心を喜ばせ、かつ何よりもその誇りを満足させるにちがいないということを、よく承知していた。彼女はラスコーリニコフの傍に腰をおろすと、あわただしく彼におじぎをして、ちらと好奇の視線を投げた。もっとも、それから後はずっとしまいまで、彼の方を見ることも口をきくことも、妙にさけるようにしていた。彼女はカチェリーナのきげんをとるために、その顔ばかり見ていたが、なんとなく放心したような様子だった。彼女もカチェリーナも、着物の持ち合わせがないために、喪服をつけていなかった。ソーニャは何やら肉桂(にっけい)色のじみなものを着ていたが、カチェリーナは一ちょうらのじみな縞(しま)サラサの服を身にまとっていた。ルージンに関する報告は、するすると無事になめらかに通過した。もののしくソーニャのことばを聞き終わったカチェリーナは、同じくものものしい口調で、ピョートル・ペトローヴィッチのごきげんはどうかと尋ねた。それからすぐほとんど聞こえよがしに、よしルージンが彼女一家に深い信服の念をいだき、彼女の父親と古い友情こそあるにしても、ああいう尊敬すべきれっきとした紳士が、こんな『とっぴな一座』に仲間入りなどしたら、まったく奇怪千万なことだったろうと、ラスコーリニコフにささやいた。

「こういうわけですからね、ロジオン・ロマーヌイチ、あなたがこんなていたらくなのもおいといなく、こんな心ばかりのおもてなしをこころよく受けてくださいましたのを、格別ありがたく存じているのでございますよ」

と彼女はかなり大きな声で言い添えた。「もっとも、あの気の毒な主人とああまで親しくしてくださったればこそ、お約束を守ってくださいましたこととは存じますが」

それから彼女はもう一度ごうぜんと品位にみちた態度で、客一同を見回したが、ふいにとくべつ主婦らしい心づかいを見せながら、テーブルごしにつんぼの老人の方へ向いて、『焼肉をあがりませんか、リスボン酒はおつぎしましたかしら？』と大きな声で問いかけた。老人は返事をしなかった。隣席の人たちが面白半分に傍からついたりしたけれど、何を問われたのか長いこと合点がゆかなかった。彼は口をぽかんとあけたまま、あたりを見回すばかりだった。それがまたよけい一座のうきうきした気分に油をかけた。

「まあなんてとんまだろう！　ごらんなさい！　いったいなんのためにあんな人を引っ張ってきたんでしょう？

ところで、ピョートル・ペトローヴィッチのことは、わたしいつも信用しきっていたんですよ」とカチェリーナはラスコーリニコフに向かってことばを続けた。「そりゃむろん比べものになりませんさ……」彼女はこう鋭く声高にいって、ふいに恐ろしくいかつい顔をしながら、アマリヤの方へ向き直った。こちらはそのけんまくにおじけづいたくらいだった。「まったくあの二人みたいなお高くとまったお引きずりとは、比べものになりゃしませんよ。だいたいあの母娘なんか、わたしの父だったら、台所の料理女にだって雇うことじゃありません。まあなくなった夫なら、ああいう底のしれない善人ですから、採用の光栄を授けてやったでしょうけれどね」

「さよう、一杯やるのがお好きでしたな。これが好物でしたな。なかなかいける方で！」と、十二杯目のウォートカをほしながら、糧秣官吏の古手がだしぬけにわめいた。

「なくなった主人は、なるほどそういう欠点を持っておりました。それはもう世間にも知れていることです」とカチェリーナはいきなりその男に食いさがった。「けれど、主人は人がよくて潔白な性質で、自分の家族を愛しもし、尊敬もしておりました。ただ一ついけなかったのは、人がいいためにそんじょそこらの放埒者を一々信用して、まるで得体のしれないような人とでも、自分の靴底だけの値打ちもない人とでも、一緒にお酒を飲んだことですの！　でもね、ロジオン・ロマーヌイチ、まあどうでしょう、あの人のポケットにわとりの形をしたしょうが餅がはいってたんですよ。死人のように酔っ払って歩いていても、子供の土産は忘れなかったとみえましてね」

「にわーとーり？　あなた、にわーとーりとおっしゃったんですか」と糧秣官吏がどなった。

カチェリーナはそれにはてんで返事もしてやらなかった。彼女は何やら考えこみ、ほっとため息をついた。

「ねえ、あなたもやはりみんなと同じように、わたしがあの人をきびしく扱いすぎたとお考えなさるでしょうね」と彼女はラスコーリニコフに向かってことばを続けた。「ところが、それは間違いなんでございますよ！

主人はわたしを尊敬してくれました、それはそれは尊敬してくれました！　優しい心の人でしたからねえ！　ですからどうかすると、あの人が気の毒でたまらなくなることがありました！　よくじっと腰かけたまま、隅っこの方からわたしの顔色を見ておりましたが、そんな時には気の毒でたまらなくなって、優しくしてあげようかとも思いますけれど、すぐ心の中で、『いやいや優しくしたら、また酔いつぶれてしまうだろう』と思い直したものです。ただやかましく言っておれば、多少でも引きしめることができたんでね」

「さよう、よく横びんをむしられたことがありましたなあ、一度や二度でなく」とまたもや糧秣官吏はわめいて、ウォートカをもう一杯口の中へ流しこんだ。

「横びんをむしるどころじゃありません、どうかしたばか者なんか、ほうきで始末してやった方が、よっぽど為になりますよ。ですが、これはもう主人のことを言ってるんじゃありませんよ！」とカチェリーナは断ち切るように糧秣官吏に一矢むくいた。

　彼女の頬の赤いしみはますます濃くなり、胸は大きく波うっていた。いま一分もしたら、彼女はもうひと騒動もち上げかねない有様だった。多くの者はひひひひと笑った。彼らはそれが面白いらしかった。みんなは糧秣官吏を突っついて、何やら彼の耳へささやき出した。明らかに二人をかみ合わそうというたくらみらしい。

「なあんですって、あなたはいったい誰のことをおっしゃるんです？」と糧秣官吏はやり出した。「つまり、誰の……誰さまのことをあてつけて……あなたは今……だが、まあ、どうでもいい！　くだらないことだ！　後家さんなんだからな！　未亡人なんだからな！　許してやろう……中止（パス）だ！」

　こう言って、彼はまたウォートカをごくりとあおった。

　ラスコーリニコフは黙って腰かけたまま、嫌悪（けんお）の念を感じながらこれらの話を聞いていた。彼は唯ほんの礼儀を守るために、カチェリーナが、ひっきりなしに皿へとってくれる料理に手をつけていたが、それもカチェリーナの気を悪くしないためである。彼はじっとソーニャの顔に見入っていた。ソーニャはだんだん不安をまして、しきりに気のもめる様子だった。彼女もやはり、この法事が穏やかな結末を見ないのを予感していたので、恐怖の念をいだきながら、しだいにつのっていくカチェリーナの興奮に注意していた。彼女はなぜいなか出の婦人と娘が、カチェリーナの招待をあまでぶしつけに無視してしまったか、そのおもな原因を知っていた。それはほかならぬ、彼女ソーニャなのである。彼女はアマリヤの口から、母親の方がかえってこの招待に腹を立て、『どうしてあたしはあの女と、自分の娘を一緒にすわらせることができると思います？』と逆ねじを食わせた話を聞いたのである。ソーニャはこの話がどうかして、カチェリーナの耳にもはいっているものと感じた。ところで、彼女ソーニャに加えられた侮辱はカチェリーナにとって、彼女自身やその子供たち――いな、父親に加えられた侮辱よりも、もっと重大な意味を持っていた。つまり、

手っとり早く言えば、致命的の侮辱だったのである。で、今となったらもはやカチェリーナは、『あの引きずり女どもに、ご当人がどんな人間か思い知らせないうちは』、けっして落ち着きそうもない、それをソーニャはよく知っていた。しかもちょうどわざとねらったように、テーブルの一方の端から誰かしらソーニャのところへ、矢に貫かれた二つの心臓を黒パンで作り、それを皿にのせて回してよこした。カチェリーナはかっとなって、さっそくテーブルごしに大きな声で、それを回してよこしたものは、むろん『酔っ払いのろばに相違ない』と言った。やはり何かよくないことを予感すると同時に、カチェリーナの高慢な態度にしん底から業を煮やしていたアマリヤは、一座の不快な気分をほかへそらせ、かつ同時に、みんなに自分を認めさせようと思って、なんのきっかけもなくだしぬけに、『薬屋のカルル』という彼女の知合いが、夜辻馬車に乗って行ったところ、『御者がその男を殺しかけました。カルルは御者に殺さないでください、とたいへんたいへん頼みました、泣きました、手を合わせました。そしてびっくりして恐ろしくって、心臓を突き刺されたような気がしました』という話を始めた。カチェリーナもにやりと笑いはしたものの、すぐそのあとで、アマリヤ・イヴァーノヴナなんかはロシヤ語でしゃれた話をする柄じゃない、と注意した。こちらはよけいに腹を立てて、『わたしの父（ファーテル）は、アウス・ベルリン（ルリンでも）たいへんたいへん、偉い人で、いつも手をポケットに入れて回っていました（ロシア語ではすりを働く意になる）』と言い返した。笑い上戸のカチェリーナはがまんしきれず、腹をかかえながらからからと笑った。で、アマリヤもとうとう堪忍袋の緒を切らしかけたが、やっとのことでおしこたえた。

「ほら、まったくふくろうでしょう！」カチェリーナは浮かれ出さないばかりの様子で、すぐまたラスコーリニコフにささやき始めた。「あの女は、手をポケットに入れて歩いてた、と言いたかったんですが、手を人のポケットに突っこんで回ったことになっちまったんですよ、ごほん、ごほん！　ねえ、ロジオン・ロマーヌイチ、あなた気がおつきになりませんか？　このペテルブルグにいる外国人、といって、つまりおもに、どこから集まってくるんだか得体のしれないドイツ人なんですけれど、そろいもそろってわたしたちよりばかばかりなんですよ！　必らずきまってそうなんですの。ねえ、そうじゃありませんか、『薬屋のカルルが恐ろしくって、心臓を突き刺された』だの、その男が（鼻たれ小僧が！）御者をふん縛ってやろうともしないで、『手を合わせました、泣きました、たいへん頼みました』なんて、お話にもならないじゃありませんか。ちょっ、なんておたんちんでしょう！　そのくせ当人は、これがとても面白い話みたいに思って、自分がどんな大ばかか、夢にも考えてみないんですからね！　わたしに言わせると、この酔っ払いの糧秣官吏の方が、まだしもずっとりこうですよ。とにかく、なけなしの分別まで飲んでしまった道楽者だってことが、ちゃんとわかってますからね。ところで、あの

連中のそろいもそろってお行儀がよくって、まじめなこと……おや、ふくろうさんがつんとして、目を丸くしている。怒ってるんだ！　怒ってるんだ！　は、は、は！　ごほん、ごほん、ごほん！」

すっかり浮かれてしまったカチェリーナは、すぐにいろいろ詳しい身の上話を夢中で始めたが、ふとだしぬけに、年金が手にはいったら、それを元手に必らず故郷の町で、良家の女子を収容する寄宿学校を創立するつもりだ、と言い出した。このことはまだカチェリーナ自身の口から、ラスコーリニコフに話してなかったので、彼女は魅力に富んださまざまなデテールに、すっかり夢中になってしまった。いつの間にどうしてだかわからないが、例の『賞状』が彼女の手に現われた。それはなくなったマルメラードフが、いつぞや酒場でラスコーリニコフをつかまえて、妻のカチェリーナが学校を卒業する時、『知事やその他の人たちの前で』ヴェールの舞をまったことを話した時、彼にふいちょうした賞状なのである。この賞状はいうまでもなく、こんど寄宿学校を設立するに当たって、カチェリーナの資格を証明することになるわけらしかった、が、何よりかんじんなのは、『母娘（おやこ）の高慢ちきなお引きずり』が、法事の席に連なった場合に、二人をぐうの音も出ないようにやっつけて、カチェリーナが非常に素質のいい、『貴族といってもいいくらいな大佐の家に生まれた娘で、近ごろやたらにふえてきた女山師に比べると、確かにずっと気がきいている』ということを、はっきり証明しようという目算で、用意してあったのである。賞状はさっそく酔った客たちの手から手へ渡り始めた。カチェリーナも別にそれを止めようともしなかった。それには、彼女が七等官で帯勲者の娘だということが、立派に間違いなくうたってあるので、したがってまったく大佐（大佐は五党官相当）の娘といっても、ほとんど変わりないからである。有頂天になってしまったカチェリーナは、T市における未来の美しい、平安な暮らしを、さっそくこと細かに詳しく話し出した。寄宿学校の教授に招聘（しょうへい）する中等教師のことや、まだカチェリーナ自身が学校時代にフランス語を習ったマンゴーという尊敬すべきフランスの老人のことや、その老人は今でもT市に余生を送っているので、俸給も折合いのいいところできっと来てくれるに相違ない、というようなことである。ついに話はソーニャのことに及んだ。『この娘はわたしと一緒にT市へ行って、そこで万事わたしの手助けをするのです』ところが、その時ふいに、誰かテーブルの端の方でぷっと吹き出した。カチェリーナは急いでさも軽蔑（けいべつ）したように、テーブルの一端で起こった笑い声には気もとめないふりをしようと努めたが、すぐにわざと声を高めて、ソフィヤ・セミョーノヴナが彼女の助手として、疑いもなく十分な才能を持っていることだの、『彼女がおとなしくて、忍耐づよく、自己犠牲の精神に富んで、潔白で教育がある』ことなどを、むきになって話し出した。そしてソーニャの頬を軽くたたきながら、ちょっと腰を浮かし、彼女に二度も熱い接吻を与えた。ソーニャは真っ赤になったが、カチェリーナは急に

わっと泣き出した。そして、自分で自分のことを、『わたしは神経の弱いばかな女で、興奮しすぎて体の調子が変になってしまった、もうそろそろ切り上げなければならない。それに食べるものも片づいてしまったから、もうお茶でも出したらよかろう』と言った。

ちょうどこの時、誰の話にもてんで仲間入りができず、自分のいうことを誰にも聞いてもらえなかったので、すっかり憤慨してしまったアマリヤが、ふいに最後の試みとして一つの冒険を企てた。彼女はカチェリーナに向かって、こんど出来る寄宿学校では、娘（ヴェーシェ）たちの肌着がきれいなように、とくべつ注意を払って、『かならず皆の肌着によく気をつける、しっかりした婦人（ダーム）をおかなけりゃならない』、第二には『すべて年ごろの娘たちがよる夜中、いっさい小説などを隠れ読みなどしないように』しなければならない、とまことにもっとも千万な、意味深長な注意をした。実際体の調子が変になって、もう接待もいやになっていたカチェリーナは、即座に『愚にもつかぬことばかり言ってる』あなたなんかにはなんにもわかりゃしないのだ、娘（ヴェーシェ）の肌着の心配などは衣服がかりの仕事で、立派な女学校の校長のすることではない、また小説の隠れ読み云々のことは、それはもうまったく無作法というもので、どうか黙ってもらいたいと、きっぱり『とどめを刺し』た。アマリヤは真っ赤になって、さもにくにくしそうに、わたしはただ『為を思って言ったのだ』、わたしは『たいへんたいへん為を思って言ったのだ』、おまけに『あんたはもうずっと前から銭（ゲルト）も払わないじゃないか』とやり返した。カチェリーナはすぐそれに対して、『為を思って言った』なんて嘘の皮だ、現につい昨日まだ故人の遺骸（いがい）がテーブルの上にのせてあるのに、家賃の催促で自分を苦しめたではないかと『やりこめ』た。これを聞くと、アマリヤは恐ろしい順序だった論法で、わたしは『あの夫人母娘（おやこ）を招待したが、夫人たちは来なかった、だってあの母娘（おやこ）は素性の正しい人たちなので、素性の卑しい女のところへは来られないのだ』と言ってのけた。カチェリーナはすかさずそのことばじりを押えて、お前さんなんか下司女だから、どんなのがほんとうに正しい素性なのか判断ができないのだ、と『やっつけた』。アマリヤはたまりかねてすぐにまたもや、『わたしの父（ファーテル）はベルリンでもたいへん、たいへん偉い人で、両手をポケットに入れて回っていた、そしていつもこんな風に――プーフ！　プーフ！　やっていた』と声明した。おまけに、自分の父親（ファーテル）をいっそうまざまざと現わして見せるために、椅子からおどり上がって、両手をポケットに突っ込み、頬をふくらませて、プーフ！　プーフという音に似るように、口で何かあいまいな響きを出し始めた。すると、間借り人一同はどっとばかりに笑いくずれ、つかみ合いの喧嘩（けんか）を予想しながら、わざとアマリヤをおだてた。しかし、カチェリーナもこれだけは我慢し切れなくなり、いきなり皆に聞こえるように、アマリヤには父（ファーテル）なんてまるでありゃしない、アマリヤはペテルブルグをうろうろした飲んだくれのフィンランド女で、以前はきっとどこかの女中奉公か、

まかり違えば、もっと悪い商売をしていたに違いないと、『ずばりと言ってのけた』。アマリヤはえびのように赤くなって、それは多分、カチェリーナこそ『まるで父（ファーテル）がなかったろうが、わたしの父（ファーテル）はアウス・ベルリンあって、こんなに長いフロックを着込み、始終プーフ、プーフ、プーフやっていた』と金切り声を立てた。カチェリーナはさも軽蔑したように、彼女の出生は誰でもが知っていることで、現にこの賞状にも、彼女の父が大佐だったことがちゃんと活字で印刷してある。ところが、アマリヤの父は、『もし父親というものがあったとすれば』、きっと牛乳でも行商していたペテルブルグのフィンランド人だったに相違ない。が、まあ父親などてんでなかったというのが、一ばん勝ちらしい。今日までアマリヤの父称がイヴァーノヴナだか、リュドヴィーゴヴナだか、よくわからないのが何よりの証拠ではないか！と言った。その時アマリヤはすっかりかんかんになって、げんこでテーブルをたたきながら、わたしはアマリヤ・イヴァーノヴナで、リュドヴィーゴヴナではない、わたしの父（ファーテル）は『ヨハンといって市長をしていた。ところが、カチェリーナの父（ファーテル）は一度だって市長などしたことはない』と金切り声でわめき出した。カチェリーナは椅子から立ち上がって、きっとそり身になり、上面（うわべ）だけは落ち着いた声で（すっかり血の気を失って、胸を激しく波立たせてはいたが）、アマリヤに向かい、『おまえさんがまたほんの一度でもそのやくざな父親（ファーテル）とわたしのお父様をひとしなみにとり扱ったら、その時こそわたしは、カチェリーナ・イヴァーノヴナは、おまえさんの帽子をひったくって、足で踏みにじってやるから』と言った。それを聞くと、アマリヤは部屋じゅうを駆け回りながら、自分はおかみだから、カチェリーナに『今すぐ家を引き払ってもらおう』と、ありたけの声をしぼって喚（わめ）き立てた。それから、なんのためにか、いきなりテーブルの上の匙（さじ）をかき集めにかかった。騒々しい物音と叫び声が起こった。子供たちは泣き出した。ソーニャはカチェリーナをなだめようと、その傍に駆け寄った。けれど、アマリヤがふいに黄色い鑑札がどうとか叫び出したとき、カチェリーナはソーニャを突きのけて、帽子云々の先ほどの威嚇をさっそく実行するために、アマリヤの方へ飛んで行った。と、ちょうどこの時ドアがあいて、入り口のしきいの上へ思いがけないルージンが姿を現わした。彼はそこに突っ立ったまま、いかめしく部屋じゅうを見回した。カチェリーナはその傍へかけ寄った。

三

「ピョートル・ペトローヴィッチ！」と彼女は叫んだ。「せめてあなたでも、わたしの味方をしてください！あのばか女に言い聞かせてやってください。不幸にあった潔白な婦人をあんなふうに扱う法はない、そんな事をすると裁判にかかるぞといって……わたしは総督さまへじきじき……あの女はその報いを受けるんです……どうぞ父のお尽ししたことをおぼし召して、みなし児たちを守ってやってください」

「まあ、まあ、奥さん……まあ、失礼ですが、ちょっと、奥さん」ルージンは両手で払いのけた。「あなたのお父さんとは、ご存じのとおり、わたしはまだ一度もお目にかかる光栄を得なかったんですから……まあ、ちょっと、奥さん！　（誰やら大きな声で笑った）それに、わたしはあなたとアマリヤ・イヴァーノヴナの際限のない喧嘩に、かかりあうつもりはありませんよ……わたしは自分の用で来たんですから……さっそくあなたの継娘（ままこ）の、ソフィヤ……イヴァーノヴナに……確かにそうでしたな？……お話ししたいことがありましてな。ちょっと通していただきましょう……」

ルージンは体を横にして、カチェリーナを避けながら、ソーニャのいる反対側の隅をさして行った。カチェリーナは雷にでも打たれたように、そのままそこに立ちすくんだ。彼女は、どうしてルージンが父の交誼（こうぎ）を否定したのか、ふつふつわけがわからなかった。一度この交誼ということを考え出して以来、彼女は自分でそれを神聖犯すべからざるもののように信じ切っていたのである。ルージンの事務的なそっけない、侮辱的な威嚇に満ちた調子も、同じく彼女を驚かした。また一座のものも、彼が姿を現わすと同時に、なんとなくしだいに鳴りをひそめてきた。おまけに、この『事務的なまじめくさった』男は、一座の空気とあまりにもきわ立って不調和に感じられたのである。のみならず、彼が何か重大な用件があって来たということも、彼をこうした集まりへ引き出したのは、よくよくのわけがなければならぬ、そうすれば、今に何か起こるに違いない、何事かあるに違いないということも、はっきり察しられたのである。ソーニャの傍に立っていたラスコーリニコフは、彼を通すために少し脇へ寄った。ルージンは、まるでそれに気づかない様子だった。一分ばかりたって、しきいの上へレベジャートニコフも姿を現わした。部屋の中へははいらなかったが、やはり一種とくべつな好奇心、というよりほとんど驚愕（きょうがく）の表情を浮かべて、そこに立ち止まりながら、じっと耳を澄ましていたが、どうも何やら合点のいきかねる様子であった。

「せっかくのお楽しみの腰を折ることになるかもしれませんが、その段はおゆるしを願います。しかし事柄はかなり重大なものなんです」とルージンは特に誰に向かうともなく、漠然とした調子で口を切った。「わたしはむしろ皆さんがご列席なさるのを好都合なくらいに思いま

す。アマリヤ・イヴァーノヴナ、あなたは家主という意味で、これから始まるわたしとソフィヤ・イヴァーノヴナとの話を、注意して聞いてくださるように折り入ってお願いします。ソフィヤ・イヴァーノヴナ」と彼は驚き惑っているソーニャの方を向いてことばを続けた。「わたしの友人アンドレイ・セミョーヌイチ・レベジャートニコフの部屋であなたがお訪ねくだすったすぐあとで、わたしの所有にかかる百ルーブリ紙幣がわたしのテーブルの上から一枚なくなったのです。もしどうかしてあなたがそれをご存じで、それが今どこにあるのか教えてくだすったら、わたしは名誉にかけて、またここにおられる皆さんを証人として、あなたに誓っていいますが、事はそれで済んでしまうのです。が、もしそうでなかった場合には、わたしはやむを得ず非常手段に訴えなければならなくなる。その時には……あなたはもう自分を恨むより仕方がありませんよ」

部屋の中がしんとなってしまった。泣いていた子供までが黙りこんだ。ソーニャは死人のように青い顔をして立ったまま、ルージンの顔を見つめるだけで、一言も返事ができなかった。彼女はまだ話がよく飲み込めないらしい。幾秒か過ぎた。

「さあ、それで、いったいどうなんです？」ひたと彼女を見つめながら、ルージンは問いかけた。

「わたし存じません……わたし少しも存じません……」やっとソーニャは弱々しい声で答えた。

「知らないんですって？　ご存じない？」とルージンは問い返したが、また幾秒間か黙っていた。「よく考えてごらんなさい。マドモアゼーユ」厳格ではあるが、それでもまだなんとなく諭すような調子で、彼は言い始めた。「よく分別してごらんなさい。わたしはもう少し熟考の時間を差し上げるのに異存ありません。ね、そうじゃありませんか、もしわたしが確信を持っていなかったら、もちろんわたしくらい経験のある人間が、頭からあなたに罪をかぶせるような冒険はしませんよ。なぜと言って、こんな風に真正面から公然と、あなたに無実の罪をかぶせたら、たとえそれが間違いから起こったことにもせよ、わたしはある意味において自ら責任を問われねばなりませんからなあ。それくらいのことはちゃんと心得ていますよ。今朝わたしは必要があって、額面三千ルーブリの五分利付債券を現金に換えたのです。その勘定は紙入れの中に書きとめてあります。家へ帰ると、わたしは――その証人はアンドレイ・セミョーヌイチですが――金の勘定を始めた。二千三百ルーブリまで数えて、それを紙入れにしまい、紙入れはフロックの脇かくしへ入れたのです。テーブルの上には紙幣で五百ルーブリばかり残っていました。その中の三枚はいずれも百ルーブリの紙幣だったのです。ちょうどその時あなたがはいって来られたのです（わたしの招きに応じて）。それから、わたしのところにおられた間じゅう、あなたは非常にもじもじしていらした。で、話の途中に三度も立って、話がまだすっかり済んでいないのに、どういうものかあわてて出て行こうとなすった。この事実はすべてアンドレイ・セ

ミョーヌイチが証明してくれますよ。マドモアゼーユ、おそらくあなた自身も否定はなさらんでしょうな、わたしのことばを確かめてくださるでしょうな――わたしがアンドレイ・セミョーヌイチを通じてあなたを呼んだのは、ただただあなたの義母に当たるカチェリーナ・イヴァーノヴナの（わたしはこの人のところへ、法事に出席することができなかったものですから）孤児同然な頼りない境遇についてお話をし、またこの方のために何か義金募集とか、慈善富くじとか、そういったようなものを催したら、どんなに有意義な事だろうと思って、それをご相談するためだったのです。あなたはわたしに感謝して、涙さえお流しなすった（わたしは何もかもありのままにお話ししているのです。それは第一に、あなたの記憶を呼びさますためと、第二には、どんなささいな事でもわたしの記憶から消えていないのを、あなたに知ってもらうためなんです）。それから、わたしはテーブルの上から十ルーブリ紙幣を取って、あなたの義母のために暮らし向きの扶助という形で、寸志としてあなたにお渡しした。これも皆アンドレイ・セミョーヌイチが見ていたことです。それから、わたしはあなたを戸口までお送りしました――その時もあなたはやはりもじもじしておられた。そのあとでアンドレイ・セミョーヌイチと二人きりになってから、二人で十分ばかり話しました――やがてアンドレイ・セミョーヌイチが出て行ったので、わたしはまた紙幣の勘定を済まして、前から考えていた通り別にしておくつもりで、金ののっているテーブルに向かった。ところが、驚いたことには、その金の中に百ルーブリ紙幣が一枚見えないんです。ねえ、一つとっくり考えてみてください。アンドレイ・セミョーヌイチを疑うことは、わたしにはどうしてもできません。そういうことは想像するのさえ恥ずかしいくらいです。しかし、わたしが勘定間違いをするということも、同様あり得ないことです。なぜといって、あなたの来られる一分ほど前に、一度全部勘定をすまして、総計に間違いないのを確かめておいたんですからな。え、あなただってこれが無理とはお思いになりますまい。あなたのもじもじした様子や、しじゅう出て行こうと急いでおられたことや、それからあなたがしばらくの間テーブルの上に手をおいておられた事を思い出して、さらにまたあなたの社会上の境遇と、それに関連する習性を考えに入れた結果、恐ろしい事ではあるけれど、自分の意志に反しながらも、一つの疑念――もちろん残酷ではあるけれど――正当な疑念を肯定せざるを得なかったのです！　もう一言くり返して言い添えておきますが、わたしは十分明白な確信があるにもかかわらず、この告発がわたしにとってやはり一種の冒険だということを自分でも承知しているのです。けれど、わたしはごらんの通り、そのままうやむやに葬ることをしないで、敢然とたちました。それはなぜかといえば、つまりただあなたのにくむべき忘恩によるのです！　いったいどうでしょう？　わたしはあなたの貧しい義母のためを思って、わざわざあなたをお招きし、その上わたしとしてできる限りの喜捨、十ルーブリとい

う金をあなたに差し上げているのですぞ。それにあなたはすぐその場で、それに対してかような行為をもって報いるんですからな！　いいや、これはどうも実によくない！　教訓が必要です。よく分別してごらんなさい。その上に、わたしはあなたの真実の友として、あなたにお願いする（わたし以上の友はこの瞬間あなたにはあり得ないんだから）、どうか正気に返ってください！　さもないと、わたしはそれこそなんといっても承知しませんぞ！　さあ、どうです？」

「わたし、あなたのものを何もとった覚えはございません」とソーニャはぞっとしたように小声で言って、「あなたはわたしに十ルーブリくださいました。さあ、どうぞお受け取りくださいまし」

ソーニャは、ポケットからハンカチを取り出し、結び目をさがしてそれを解き、十ルーブリ紙幣を抜き出すと、その手をルージンの方へ差し伸べた。

「すると、そのほかの百ルーブリのことは白状しないんですな」その紙幣は受け取ろうともせず、彼は責めるようにいっこくな調子で言った。

ソーニャはあたりを見回した。誰もかれもが恐ろしい、いかめしい、あざけるような、にくにくしげな顔つきをして、彼女をみつめていた。彼女はちらとラスコーリニコフをながめた……彼は腕を十字に組んだまま壁ぎわに立ち、火のようなまなざしで彼女を見つめていた。

「ああ、なさけない！」という叫びがソーニャの胸をほとばしり出た。

「アマリヤ・イヴァーノヴナ、警察へ知らせなけりゃならないから、どうかご面倒ですが、さしずめ庭番を呼びにやってくださらんか」と静かな愛想のいい調子でルージンは言った。

「あれ（ゴット・デル・パルムヘルツイゲ）あれまあまあ！　わたしもあの娘が盗んだのは、ちゃんと知っていた！」とアマリヤはぱっと両手をうち鳴らした。

「あなたもちゃんと知ってたんですって？」とルージンはことばじりを押えた。「すると、以前からもうそんな風に推定する根拠が、多少なりとあったんですね。じゃ、アマリヤ・イヴァーノヴナ、お願いですから今おっしゃったことを覚えていてください。もっとも、証人も大勢いることですがね」急に四方からがやがやと話し声が起こった。一座はざわついてきた。

「な、な、なんですって！」カチェリーナはわれに返って、ふいにこう叫んだ。そして――まるで鎖が切れたように――ルージンの方へ飛びかかった。「なんですって！　あなたはこの娘（こ）を泥棒とおっしゃるんですね？　このソーニャを？　ああ、あなた方はなんて卑劣な、卑劣な人たちだ！」

こう言って、彼女はソーニャの方へ駆け寄ると、しめ木にでもかけるように、やせ細った手で彼女を抱きしめた。

「ソーニャ！　よくもお前はあんな人から、十ルーブリもらってこられたねえ！　ああ、ばかな娘（こ）ったら！　こっちへおよこし！　さあ、すぐその十ルーブリをおよこ

しったら――それ！」
　カチェリーナはソーニャの手から紙幣をひったくり、手でもみくちゃにすると、すぐその手を返してまともにルージンの顔へ叩きつけた。丸められた紙玉はルージンの目にあたって、はね返りながら床の上に落ちた。アマリヤは飛んで行って金を拾い上げた。ルージンは火のように怒り出した。
「この気ちがい女を押えろ！」と彼はわめいた。
　この時戸口には、レベジャートニコフと並んで、四、五人の顔が並んでいた。その中には、例の田舎から出て来た婦人親子ものぞいていた。
「なんだって！　気ちがい女？　それはわたしが気ちがい女だというんだね？　ばかあ！」とカチェリーナは金切り声を上げた。「お前こそ馬鹿だ、三百代言だ、卑怯者だ！　ソーニャが、ソーニャがお前の金を盗んだって。ソーニャが泥棒だって！　ちょっ、かえってあの娘の方がお前にやるくらいだよ、ばか！」こう言って、カチェリーナはヒステリックにからからと笑い出した。「皆さんこの馬鹿をごらんになりましたか？」彼女は一同にルージンを指さしながら、四方八方へ飛んで行って叫ぶのであった。「ああ！　お前もそうだ！」彼女はふいにおかみを見つけた。「ええ、この女腸詰屋（腸詰屋は、ドイツ人に対する悪口）、お前まで尻馬に乗って、今あれが『ぬしゅんだ』と言ったね、スカートをはいたげすなプロシアのにわとりの足め！　ああ、みな！　ああ、皆なんというやつらだろう！　第一あの娘は、お前んとこから帰って来たまま部屋の外へ出しゃしないよ、ちくしょう、ちゃんとここに、わたしと並んで腰をかけたんだよ。それはみんな見ていた。ロジオン・ロマーヌイチと並んで腰をかけたんだよ……あの子を調べてごらんなさい！　どこへも出て行かなかったんだから、お金はきっとあの子の身についてるはずです！　調べてごらん、お調べ、お調べ！　だがね、もしなんにも見つからなかったら、その時こそはお気の毒だがね、お前ただじゃすまないよ！　わたしは陛下のところへ、陛下様のところへ、お情け深い陛下様のところへ、駆けつけて、おみ足のかたわらに身を投げてお願いするんだから、これから、今日すぐ！　わたしは身よりのないやもめだもの！　わたしなら通してくださる！　通してもらえないとお前は思ってるんだね！　おふざけでない、行ってみせる！　行ってみせるとも！　これはなんだな、あの娘がおとなしいもんだから、それを見込んでこしらえたんだな？　お前はそれを当てにしたんだろう？　ところがね、おまえさん、その代わりわたしの方がきかないから！　一泡ふかせてやるとも、お調べったら！　お調べ、お調べ、さあお調べよう！」
　カチェリーナは夢中になって、ルージンをソーニャの方へしょびきながら、こづき回した。
「わたしは覚悟しております、責任を負いますとも……しかし、まあ気を静めてください、奥さん、気を静めて！　あなたがきかない気性なことは、わかりすぎるほどわかりましたよ！……これは……これは……これはいった

いどうしたもんでしょうな？」とルージンはまごまごして言った。「それは警察が立会いの上でなくちゃ……もっとも、今でも証人は多すぎるくらいだから……わたしはそのつもりでいますよ……しかし、いずれにしても男にはやりにくいですよ……性の関係があるから……もしアマリヤ・イヴァーノヴナにでも手を貸していただけば……もっとも、そういうやり方はないし……これはいったいどうしたものかな？」

「誰でもよござんす！　誰でもやりたい人は勝手に調べるがいい！」とカチェリーナは叫んだ。「ソーニャ、あいつらにポケットをひっくり返して見せておやり！　ほら、ほら！　見るがいい、悪党、ほら、空（から）じゃないか、ここにハンカチがあっただけで、ポケットは空だよ、わかったかい！　今度はもう一つの方だ、ほら、ほら！　わかったかい！　わかったかい！」

カチェリーナはもう裏返すどころでなく、両のポケットを一つ一つ外へ引っ張り出して見せた。ところが、つぎの右かくしから、ふいに紙ぎれが一つ飛び出して、空中に放物線を描き、ルージンの足もとに落ちた。一同はそれを見た。多くのものはあっと叫んだ。ルージンはかがみ込んで、二本指で紙ぎれを床からつまみ上げ、みなに見えるように差し上げて、ひろげて見せた。それは八つにたたんだ百ルーブリ紙幣であった。ルージンは手をぐるぐると振り回しながら、みんなに紙幣を見せた。「女泥棒！　さあ出て行け！　巡査（ポリス）、巡査（ポリス）！」とアマリヤはわめき出した。「あいつらシベリアへ追っぱらってやらなくちゃ！　出てくれ！」

叫喚の声が四方八方から飛び始めた。ラスコーリニコフはソーニャから目を離さなかったが、時々ちらとルージンの方へ視線を転じながら、じっと押し黙っていた。ソーニャは意識を失ったように、同じところに立ちつくしていた。彼女はほとんど驚くのを通りこしていたのである。と、ふいに紅がその顔にさっとみなぎった。彼女は一声叫び上げて、両手で顔をおおった。

「いいえ、それはわたしじゃありません！　わたしは、とった覚えはありません！　わたしは知りません！」彼女ははらわたのちぎれるような叫び声と共に、カチェリーナに身を投じた。

こちらは彼女を引っかかえ、我とわが胸ですべての人から守ろうとするように、ひしとばかり抱きしめた。

「ソーニャ！　ソーニャ！　わたしは本当にしやしないよ！　ごらん、わたしは本当にしてやしないから！」カチェリーナは（明瞭（めいりょう）な事実を無視して）、彼女を両手で子供のようにゆすぶっては、数かぎりなく接吻（せっぷん）の雨を降らしながら、その手を探り求めて、食い入るようにむさぼり吸いながら、こう叫ぶのであった。「お前がとるなんて！　まあ、なんてばかな人たちだろう！　ああ、なさけない！　あなた方はばかだ、ばかです」と彼女は一同に向かって叫ぶのであった。「そうです、あなた方はまだご存じないのだ――この娘（こ）がどんな娘（こ）か、どんな心を持っているか、ご存じないのだ！　この子が盗みをする、この子が！　それどころか、この子はね、もしあ

なた方がいると言えば、かけがえのない着物を脱いで売り飛ばし、自分ははだしで歩いても、みんなあなた方に上げてしまいます、この娘はそんな娘なんです！　この子は黄色い鑑札も受けました。それはね、わたしの子供がかつえ死にそうになったから、わたしたちのために身を売ってくれたんです！　ああ、天国にいるわたしの主人、ねえ、あなた！　ああ、セミョーン、セミョーン！　あなたごらんになって？　ごらんになって？　これがあなたの法事なんですよ！　なんていうことだろう！　この子を守ってやってください。いったいあなた方は何をぼんやり立ってるんです！　ロジオン・ロマーヌイチ！　あなたまでがなぜ肩を持ってくださらないんですの？　あなたもやはり本当にしてらっしゃるんですか？　お前さんたちはみんな、みんな、みんな、みんな、あの娘の小指だけの値打ちもありゃしない！　神さま！　どうぞ守ってくださいまし！」

哀れな肺病やみの、みなしご同然なカチェリーナの嘆きは、一同に深い感銘を与えたらしかった。この苦痛にゆがめられた、骨と皮ばかりの肺病やみらしい顔、この干からびて血のこびりついた唇、このしゃがれた叫び声、この子供の泣き声に似たすすり泣き、この信頼の情に満ちた子供らしい、同時に絶望的な、保護を祈る哀願、それは誰でもこの不幸な女に惻隠の情を感じざるを得ないほど、いじらしさ、切なさのこもったものだった。少なくも、ルージンはすぐに惻隠の情を表わした。

「奥さん！　奥さん！」と彼は諭すような調子で叫んだ。

「これは何もあなたに関係したことじゃありません！　誰もあなたに悪意があったとも、共謀になっていたとも、そんなことをあえて思うような者はありませんよ。まして、あなたが自分でポケットを裏返して、犯行を暴露されたんですからな。あなたが夢にもご存じなかったのは明白です。もしなんですな、貧困がソフィヤ・セミョーノヴナを駆って、かかる行為をさせたものとすれば、わたしも同情を惜しむわけじゃありません。が、しかし、マドモアゼーユ、なぜあなたは自白しようとしなかったのです？　恥辱を恐れたんですか？　初犯だからですか？　あるいは気が顛倒していたのかもしれませんね？　それはもっともなことです、大きにもっともなことです……しかし、なんのためにこんな種類のことを断行したもんかなあ！　皆さん！」と彼は一座の人々に向かってこう言った。「皆さん！　わたしはなんです、いま個人的に侮辱まで受けたのではありますが、同情の意味でまあ許して上げてもかまいません。いいですか、マドモアゼーユ、今のこの恥辱を将来の教訓になさるがいい」と彼はソーニャに向かって言い添えた。「わたしもこれ以上追及しないことにして、水に流してしまいます。いよいよこれで打切り、もうたくさんだ！」

ルージンは横目でラスコーリニコフをちらと見た。二人の視線はぴったり出会った。ラスコーリニコフの燃えるようなまなざしは、彼を焼き尽くさんばかりであった。けれど一方、カチェリーナはもうなんにも耳にはいらぬ様子だった。彼女は狂気のようにソーニャを抱いて接吻

していた。子供たちも同じように小さな手で、四方からソーニャにとりすがっていた。ポーレチカはまだよくわからないながら、唯もう涙におぼれつくした様子で泣きじゃくりしながら、涙にはれ上った可愛い顔を、ソーニャの肩に隠していた。

「なんという卑劣なことだ！」この時ふいに戸口のところで、大きな声が響きわたった。

ルージンはすばやく振り返った。

「なんという卑劣なことだ！」じっと彼の目を見つめながら、レベジャートニコフはまたくり返した。

ルージンはぴくりと身震いさえしたような風だった。一同はそれに気がついた（あとで人々はこのことを思い出したのである）。レベジャートニコフは一歩部屋の中へはいってきた。

「あなたはよくもずうずうしく、わたしを証人に立てるなんて言いましたね！」ルージンの傍へ歩みよりながら、彼はそう言った。

「いったいそれはなんの意味です、アンドレイ・セミョーヌイチ！　君はいったい、なんのことを言ってるんです？」ルージンはへどもどしながらつぶやいた。

「ほかでもない、あなたが……誣告をやったということです、これがわたしのことばの意味です！」とレベジャートニコフはしょぼしょぼした小さな目で、相手をきっと見すえながら、熱くなって言った。彼はかんかん玉に憤慨していた。ラスコーリニコフは、その一言一言受け止めて、秤にでもかけて調べるように、穴のあくほどその顔に見入っていた。またもや沈黙が室内を領した。ルージンはほとんど狼狽したような風だった。

「もし君が僕にそんな……」と彼はどもりながら言い出した。「いったい君はどうしたんです？　気でも狂ったんじゃありませんか！」

「僕はちゃんと正気だが、あなたこそかえって……悪党だ！　ああ、なんという卑劣なことだろう！　僕は何もかも聞いていました。僕は万事とっくり了解しようと思って、わざと今まで待っていたんです。というのも、白状すると、今だに十分論理的でないくらいなんだから……いったいあなたはなんのためにこんな事をしたんです……わけがわからない」

「僕が何をしたというんです！　君はそんな愚にもつかないなぞなぞ話を、いいかげんにしてよすつもりはないんですか！　それとも、一杯きこし召してるんじゃないかな」

「それはあなたみたいな下劣な人間なら、酔っぱらうこともあるだろうが、僕はそんなことなんかしやしません！　僕はウォートカなんかかつて口にしたこともない。つまり信念に反するからです。どうでしょう皆さん、あの男は、あの男は自分自身の手で、この百ルーブリ紙幣をソフィヤ・セミョーノヴナにやったんです――僕が見ていました、僕が証人です、僕は宣誓でもします！この男です、この男です！」レベジャートニコフは一人一人に向かって、こうくり返すのであった。

「ほんとに君は気でも違ったのか、どうです、この青二

才」とルージンは黄色い声でわめいた。「その当人が君の前に、ちゃんと目の前にいるんだ――その女が現在ここで、いま皆の前で、白状したじゃないか――十ルーブリよりほかに僕から何も受け取りゃしないって。してみれば、どうして僕がそれを渡せたというんだ？」

「僕が見たんだ、僕が見たんだ！」とレベジャートニコフはくり返し叫びつづけた。「こんなことは僕の主義に反するけれど、僕は今すぐにでも裁判所へ出て、どんな宣誓でも立てる。だって、あなたがそっと紙幣を押しこむのを、僕ちゃんと見たんですからね！　その時は僕ばかだもんだから、あなたが慈善を施すためにそっと押しこんだものと思ったんだが！　戸口であのひとと別れる時です、あのひとが振り返り、あなたが片っ方の手でその手を握った時、あなたはもう一方の手――左手で、あのひとのポケットへそっと紙幣を押し込んだのです。僕は見ました！　僕は見ました！」

ルージンは青くなった。

「何を君はでたらめばかり言うのだ！」と彼はずうずうしくどなりつけた。「君は……窓のそばに立っていたのに、どうして紙幣と見分けがついたんです？　それは君の目の迷いだろう――そのしょぼしょぼした目の。君はうわ言を言ってるんだ！」

「いいや、目の迷いじゃありません！　僕は離れて立ってたけれど、何もかもすっかり見たんです。もっとも窓のそばからでは、実際紙幣を見分けることはむずかしい――それはおっしゃるとおりです――けれども僕は特別な事情があって、それが百ルーブリ紙幣に違いないことを、確かに知ったんです。というのは、あなたがソフィヤ・セミョーノヴナに十ルーブリ紙幣を渡そうとなすった時――僕はちゃんと見ていたが――その時あなたがテーブルの上から、百ルーブリ紙幣を取ったからです（僕はその時そばに立っていたのでちゃんと見定めました。それに、その時僕の頭にある考えが浮かんだので、あなたの手に紙幣のあることを忘れなかったのです）。あなたはそれをたたんで、手に握りしめたまま、ずっと持っていたんです。それから、僕はほとんどそのことを忘れていたんだけど、あなたが立ち上がりながら、それを右から左の手へ持ちかえて、危うく落っことそうとした。僕はそこでまた思い出したんです。なぜって、僕の頭にはまた先と同じ考え――つまりあなたは僕に隠して、そっとあのひとに慈善をしてやるつもりだな、という考えが浮かんだからです。それがしかもどうでしょう。僕は特に気をつけていたところ、あなたが首尾よくあのひとのポケットへ押しこんだのを見届けました。僕は見ました、ちゃんと見ました。宣誓してもいいくらいです！」

レベジャートニコフはほとんど息を切らさないばかりだった。四方からいろいろな叫び声――何よりも一番に驚愕を現わす叫び声が起こった。しかし、威嚇的な調子を帯びた叫びも聞こえた。一同はルージンの方へつめ寄った。カチェリーナはレベジャートニコフに飛びかかった。

「アンドレイ・セミョーヌイチ！　わたしはあなたを誤

解していました！　どうぞあの娘に加勢してやってください！　あの娘の味方はあなたきりです！　あれはみなし児ですもの！　神様があなたを差し向けてくだすったのです！　アンドレイ・セミョーヌイチ、あなたは命の親です、親切な方です！」

こう言いながらカチェリーナは、ほとんど自分のしている事もわきまえず、いきなり彼の前に膝をついた。

「世迷い言だ！」気ちがいじみるほど猛り立ったルージンは、夢中にわめき立てた。「君は世迷い言ばかりこねまわしてるんだ……『忘れた、思い出した、思い出した、忘れた』――いったいなんのことだ！　してみると、僕がわざと紙幣を入れたというんだね。そりゃ全体なんのためだね？　どういう目的で？　いったい僕とこの女になんの共通点があるんだね……」

「なんのために？　つまりそれが僕にわからないんです。しかし、僕が正真正銘の事実を話してるのは、そりゃもう確かです！　つまりこれがために、僕はあの時すぐあなたに感謝して、あなたの手を握りながらも、この疑問が僕の頭に浮かんだのを、今でもちゃんと覚えているほどですもの、間違えたりなんかするわけがないじゃありませんか。ほんとうにあなたはなんという汚らわしい、罪の深い人だろう。その時僕が不思議に考えたのは、なんのためにあなたはあのひとのポケットへ、そっと金を入れたのだろう？　つまり、そのそっと入れたのはなぜだろう？　ということでした。それともただ、僕が常々慈善反対の信念を持っていて、根本的には悪をいやし得ない個人的慈善を否定しているのを、あなたがちゃんと知っておられるので、僕に自分の行為を隠したかったからにすぎないのか？　という風に考えて、結局これはあんな大金を恵むのが僕に対してきまりが悪かったのだ、とこう解釈しました。またそのほかに、もしかすると、あなたはあのひとに不意の贈物がしたかったのかもしれない。あのひとが自分のうちへ帰って、ポケットの中に百ルーブリという大金のあるのを見てびっくりする、それが面白かったのかもしれない（なぜといって、ある種の慈善家は自分の善行をそういう風にこねくるのを、非常に好むものですからね。僕は知っています）。それからなおこんな風にも考えられたのです。ほかでもない、あなたは試験してみたかったのではないか。つまりあのひとがそれを見つけて、礼を言いに来るかどうかってね！　またそれから、いわゆる『己が右手にすら知らしむべからず』という主義で、あなたが感謝を避けようとしていられる……とも思われる。一口に言えば、まあその時は何やかやいろんな考えが頭に浮かんできたので、僕はすべてをあとでよく考え直すことに決めました。しかし、自分が秘密を知ってることを、あなたの前に暴露するのは、なんといってもぶしつけな業だと思ったのです。が、そうは思いながら、すぐそのそばから、ソフィヤ・セミョーノヴナは気がつかないうちに、ひょっと金を落とすようなことがないとも限らない、という問題がまた頭に浮かんだのです。つまりこのために僕はここへ出向いて、あのひとを呼び出し、ポケットに百ルーブリ

はいっていることを知らせようと、こう決心したわけなんです。それに、途中まずカブイリャートニコフ夫人の部屋へ寄って、『積極的方式概論』を届けもし、また特にビデリットの論文を（ワグネルのも同様に）推薦する用もあったのです。それからここへ来てみると、もうこの騒ぎじゃありませんか！　さあ、どうです、あなたがあのひとのポケットへ百ルーブリ入れたのも見もしないで、こんな考えや想像が僕の頭にわくと思いますか！」

レベジャートニコフは、かくも論理的な帰納法を結論に応用した長広舌を終わると、ひどくがっかりしてしまって、その顔からは玉のような汗まで流れ出た。悲しいかな、彼はロシア語でさえろくすっぽ説明する能がなかったのである（もっとも、ほかのことばだって一つも知らなかったので）。彼はこの弁護士的大偉業を成就したあとで、なんとなく中身をすっかり吐き出したようなぐあいで、一時にげっそりやせたように思われた。にもかかわらず、彼の演説は非常な効果をもたらした。彼はやっきとなって、恐ろしい信念をいだきながら話したので、みんな彼のことばを信じたらしかった。ルージンは形勢かんばしからずと直感した。

「君の頭にどんなばかげた疑問が起ころうと、それが僕にとって何だというのです」と彼は叫んだ。「そんなことは証拠になりゃしない！　それはみんな君が夢にでも見たんだろう、それだけの話だ！　僕は断言するが、君は嘘をついてるんです！　君は僕に何か悪意をいだいてるものだから、嘘をついて人を中傷するんです。つまり、僕が君の自由思想的な無神論的な社会思想に共鳴しなかった、その腹いせなんですよ、そうですとも」

しかしこの言いぬけはルージンになんの利益ももたらさなかった。それどころか、かえって不満の声が聞こえた。

「ええ、きさまはそんなところへ話を持っていくんだな！」とレベジャートニコフは絶叫した。「だめだよ！　巡査を呼べ、僕は宣誓でもしてやるから！　ただ一つ合点がいかないのは、この男、なんのためにこんな卑劣な行為を思い切ってしたんだろう！　ああ、なんてみじめな陋劣（ろうれつ）な人間だろう！」

「なんのためにこの男が、思い切ってあんな行為をしたか、それは僕が説明しましょう。もし必要とあれば、僕も宣誓していいです！」ついにラスコーリニコフがきっぱりした調子で口を切り、一歩前へ進み出た。

彼は見たところ、落ち着いてしっかりしていた。ひと目見ただけで、彼がじっさい事の真相を知っており、事件もいよいよ大団円に達したことが明白になった。

「いま僕は何もかもすっかり明瞭（めいりょう）にすることができました」いきなりレベジャートニコフの方に向かいながら、ラスコーリニコフはことばを続けた。「もうこの事件の最初から、これには何か卑劣な奸計（かんけい）があるのじゃないかと、僕は疑問をいだいていたのです。僕が疑問をいだくようになったのは、僕一人だけしか知らないある特別な事情によるもので、それをこれからお話ししましょう――いっさいの秘密はその中に含まれているのですか

ら！　しかもアンドレイ・セミョーヌイチ、今あなたのいわれた貴重な証言で、何もかも根本的に明瞭になったのです。どうか皆さんぜひぜひ聞いてください。この先生は（と彼はルージンを指さした）最近一人の娘に、名ざして言えば僕の妹アヴドーチャ・ロマーノヴナ・ラスコーリニコヴァに結婚を申し込んだのです。ところが、ペテルブルグへ来ると、おととい初対面早々から僕と喧嘩（けんか）をして、僕はこいつを自分の部屋から追い出したのです。これには証人が二人あります。この男はなかなか腹の黒いやつでして……もっとも、一昨日は僕もまだ、この男がこの家の貸間に、アンドレイ・セミョーヌイチのとこにいることは、いっこう知らなかったのです。したがって、その喧嘩をした当日、つまり一昨日ですね、僕が故マルメラードフ氏の友人の資格で、その未亡人たるカチェリーナ・イヴァーノヴナに、葬式の費用として何がしかの金を贈った顛末（てんまつ）を、この男がちゃんと見ていようとはなおさら知るはずがなかったのです。ところが、この男はさっそくそのことを僕の母のところへ手紙に書き送って、僕がありたけの金をカチェリーナ・イヴァーノヴナでなく、ソフィヤ・セミョーノヴナにやってしまったなどと報告し、おまけにソフィヤ・セミョーノヴナの……その……性質について、極端に下劣なことばをろうした。つまり、僕とソフィヤ・セミョーノヴナの間に、何か特別な関係でもあるようにほのめかしたんです。これはみなお察しでもありましょうが、僕が肉親のくめんしてくれたなけなしの金を、よくない目的のために浪費したと吹き込んで、僕を母と妹から離間しようという魂胆だったのです。で、昨日の晩、僕はこの男の面前で母と妹に、金はカチェリーナ・イヴァーノヴナに葬式の費用として贈ったので、ソフィヤ・セミョーノヴナにやったのではない、ソフィヤ・セミョーノヴナとはつい一昨日まで知合いでもなかったし、顔も見たことがなかったという証明をして、事の真相を明瞭にしたのです。その時僕は、彼ピョートル・ペトローヴィッチ・ルージンなんか、ありたけの長所を集めても、彼がかくも悪しざまにいっているソフィヤ・セミョーノヴナの小指だけの価値もない、とこう言いそえたのです。それから、じゃ君は自分の妹をソフィヤ・セミョーノヴナと同席させる勇気があるか？　というこの男の質問に対して、僕は『それはもうちゃんと今日実行した』と答えました。母や妹が自分の差し金通りに僕と仲たがいしないのを見て、ことごとく業を煮やしてしまったこの男は、一口ごとに二人に向かって、許すべからざる無礼なことを言い出したので、とうとう取返しのつかない破裂となり、この男は家の外へ追い出されてしまいました。これはみな昨晩（ゆうべ）のでき事なんです。そこで、いま特に注意をお願いしたいのは、ほかでもありません。どうでしょう、もし今ソフィヤ・セミョーノヴナが泥棒であると証明できれば、彼は第一に僕の妹と母に対して、自分の疑念がほぼ正当だったことを証明できることになるでしょう。つまり、僕がソフィヤ・セミョーノヴナと妹を同列においたことに対して、この男が憤慨したのはもっとも千万な話で、僕

を攻撃したのは、僕の妹、つまり自分の花嫁の名誉を保護したのだ、とこういう事になりますからね。一口に言えば、この事件を通じて、彼はもう一度僕を家族のものと離間させて、その上もちろん、再び母や妹のご機嫌を取り結ぼうと期待していたのです。彼が僕に対して個人的復讐を企てたのだということは、今さら特に喋々する必要はありますまい。何しろ、ソフィヤ・セミョーノヴナの名誉と幸福が、僕にとってきわめて貴重なものだと考える根拠を、この男は持っているのですからね。これがこの男の目算の全部です！　僕はこの事件をこう解釈します！　これが原因の全部で、それ以外にはあり得ません！」

　こんな風に、あるいはほとんどこんな風に、ラスコーリニコフは自分の説明を終わった。もっとも彼のことばは、熱心に聞いている人々の叫び声に、しょっちゅうさえぎられはしたけれど、そうした邪魔がはいったにもかかわらず、彼は落ち着き払って、正確に明瞭に、きっぱりと鋭い語調で語り終わった。その鋭い声や、信念に満ちた語調や、きびしい顔つきなどは、一同に異常な効果をもたらしたのである。

「そうです、そうです、それはそうに違いありません！」とレベジャートニコフは有頂天になってあいづちを打った。「これはもうそうに決まっています。だってこの男は、ソフィヤ・セミョーノヴナが僕らの部屋へはいって来るが早いか、僕をつかまえて、あなたがここへ来てるかどうか？　カチェリーナ・イヴァーノヴナの客の中にあなたを見かけなかったか？　などと尋ねたんですものの。この男はそのために僕を窓の方へ呼んで、そこでこっそり聞いたんですからね。これで見るとこの男は、ぜひあなたにこの席にいてもらいたかったんですよ！　それはその通りです、すっかりそのとおりです！」

　ルージンは無言のまま、にやにやと侮蔑の微笑を浮かべていた。もっとも、その顔は真っ青だった。見うけたところ、彼はどうしてこの場をすべり抜けようかと、思案をめぐらしているらしかった。彼はできることなら、喜んで何もかもうっちゃらかして、この場を去ってしまったかもしれない。が、今となっては、それもほとんど不可能だった。それはつまり、自分に浴びせられた非難攻撃が本当のことで、正しく自分がソフィヤ・セミョーノヴナを讒訴したのを、自白することになるからであった。それに、たださえ一杯機嫌の連中が、大分がやがやと騒いでいたのである。中でも糧秣官吏は、よくも合点がゆかないくせに、誰よりも一番にわめき立て、ルージンにとってしごく面白からぬ処置を提言した。が、そこには素面のものも交じっていた。方々の部屋からも人がやって来て、そこに集まっていた。ポーランド人は三人とも恐ろしく憤慨して、のべつ『この悪党め』とどなっていたが、同時に、まだいろんな威嚇のことばをポーランド語でぶつぶつ言っていた。ソーニャもやはり緊張した様子で聞いていたが、さながら卒倒から気がつきかかった人のように、やはりまだ事情がよく飲み込めない様子であった。彼女はただラスコーリニコフから目を放

そうとしなかった。この人こそ自分の救い主だと感じたからである。カチェリーナは、苦しげに、喉をぜいぜい言わせながら息をついていたが、もうへとへとに疲れ切っている様子だった。アマリヤは誰よりも一番ばか面をして、口をぽかんとあけたまま、何が何やら皆目わからず立っていた。彼女は、ただルージンが苦しい羽目に落ちたのを、見てとったばかりである。ラスコーリニコフはまた何か言い出そうとしたが、もう口をきかしてもらえなかった。みんながののしったりおどかしたりしながら、ルージンの回りにひしひしと詰め寄ったからである。しかし、ルージンは臆する色もなかった。ソーニャを罪人にする企てが全然失敗に終わったのを見ると、彼はいきなり人を食ったずうずうしい態度に出た。

「ちょっと、皆さん、ちょっと。そう押さないで、通り道をあけてください！」と群衆を押し分けながら彼は言った。「そして、どうかそんなおどかしはやめてもらいましょう。わたしは断言しておきますよ。そんな事をしたって、どうなるものですか、何ができるものですか。そんなのでびくびくするような人間じゃありませんよ。それどころか、君方は暴力で刑事事件を隠蔽したかどで、法の前に答えなけりゃなりませんぞ。女泥棒の犯行は立派に暴露されてるんだから、わたしはどこまでも追及する。裁判官はそれほど盲目でもなければ……酔っぱらってもいやしないから、この二人の折紙つきの無神論者、扇動者、自由思想家の言うことなんか、取り上げやしませんよ。やつらは私怨でわたしに復讐しようとしてるんです。それはやつらが馬鹿だものだから、ちゃんと自分で白状してますよ……さあ、ちょっとごめんなさい！」

「もう僕の部屋にあなたのにおいもしないように、すぐどこへでも越して行ってください。それでわれわれの関係はいっさいおしまいです！　ああ、思えばいまいましい、僕は一生懸命に汗水たらしながら、この男を啓発してやろうと思って、いろいろ説明してやったものだが……まる二週間も……」

「いや、アンドレイ・セミョーヌイチ、僕はさっき君がしきりに引止めた時だって、もうかならず越して行くと、ちゃんと言っておいたじゃありませんか。今はただ君がばかだということだけつけ加えておきますよ。最後に、僕は君の頭とそのしょぼしょぼ眼を、療治されるように望みます。ちょっとごめんなさい、皆さん！」

彼は人垣を押し分けて行った。ところが糧秣官吏は、ただの罵倒だけでやすやすと放してやりたくなかったので、テーブルの上のコップをつかむが早いか、ルージン目がけて投げつけた。けれど、コップはみごとアマリヤに命中した。彼女はきゃっと悲鳴をあげた。糧秣官吏ははずみで体の中心を失い、どっとテーブルの下へ倒れた。ルージンは自分の部屋へ引上げた。そして三十分後には、彼の姿はもうこの家に見られなかった。生まれつき臆病なソーニャは以前から、自分という人間が誰よりも一ばん犠牲にされやすいことを知っていた。誰でもほとんど罰せられることなしに、自分を凌辱しうることを知っていた。けれど、やはりこの最後の瞬間までは、ありと

あらゆる人々に対する警戒心や、温良従順な態度によって、どうにか不幸を避けられそうな気がしていた。で、今度の幻滅は彼女にとってあまり苦しかった。もっとも彼女は何事によらず――この災難すらも、ほとんど不平がましいことさえ言わず、じっと辛抱することができたに相違ない。しかし、最初の瞬間は、あまりにもなさけないことに思われたので、今あかしが立って勝利を得られたにもかかわらず――最初の驚愕と最初の失神状態が過ぎて、いっさいをはっきり会得し、思い合わせてみると――身の頼りなさと侮辱のつらさが、耐え難いほど胸を締めつけるのであった。ついに彼女はヒステリイを起こした。彼女はたまらなくなって、部屋の外へ飛び出すと、自分の下宿へ走って帰った。それはルージンが出て行ったほとんどすぐあとだった。アマリヤも、一同の哄笑裡にコップを投げつけられた時から――やはり振舞い酒に乱れたこの場の空気にいたたまらなくなった、彼女は気ちがいめいた金切り声を立てながら、カチェリーナをいっさいの責任者のように思い込んで、いきなり彼女に武者ぶりついた。

「家をあけてくれ！　今すぐ！　さっさと！」

彼女はこう言いながら、カチェリーナの品物を手当たりしだいにひっつかみ、床の上へほうりつけにかかった。それでなくてさえさんざん痛めつけられて卒倒しないばかりになり、真っ青な顔をしてはあはあ息を切らしていたカチェリーナは、ぐったり寝台の上に倒れていたが、いきなりがばとはね起きて、アマリヤにおどりかかった。けれど、戦いはあまりに段が違いすぎた。アマリヤはまるで羽根でも吹き飛ばすように、彼女を突き飛ばした。「まあ、なんてことだ！　人にあられもない濡れ衣を着せただけで足りないで――このげす女はわたしまで！　ああなんてことだろう！　夫の葬式の日に、腹さんざ人のご馳走になっておきながら、みなし児かかえた寡婦を家から追ん出そうなんて！　いったいわたしはどこへ行ったらいいんだろう」と不幸な女は泣きじゃくりながら、はあはあ息をはずませて、わめき立てるのであった。「神さま！」とふいに彼女は目を輝かしながら叫んだ。「いったいこの世に正義というものはないのでございますか！　わたしたちみなし児を守らないで、あなたは誰をお守りになるのでございます！　ああそうだ、見てみよう？　きっとこの世には審きも真もあるのに違いない、わたしはそれを捜し出して見せる！　罰あたりのげす女め、今すぐだ、待ってるがいい！　ポーレチカ、この子たちと一緒に残っておくれ、わたしはすぐ帰って来るからね。よしんば家の外ででもいいから、待っておいで！　さあ、見てみよう、この世に真があるかどうか？」

そう言ってカチェリーナは、いつかなくなったマルメラードフがくどき話の中で説明した、例の緑色したドラデダーム織りの肩掛を頭からかぶり、まだ部屋の中にひしめいている間借り人たちの、だらしない酔っぱらった群れを押し分けながら、悲鳴と涙とともに往来へ駆け出した――いますぐ即座に、どうあろうとも、どこかで正義を見つけようという、あてどもない目的をいだきなが

ら……ポーレチカは恐怖のあまり、子供たちをつれて片隅の箱の上にちぢこまり、そこで二人をしっかと抱きしめて、全身をわなわなと震わせながら、母の帰りを待っていた。アマリヤは部屋の中を暴れ回って、泣いたりくどいたりしながら、手当りしだいのものを床へ投げつけ、狂い立てるのであった。間借り人の連中は、てんでに勝手なことをしゃべっていた――中には今のでき事を、自分の知恵相当に解釈して、結論をつける者もあった。中には喧嘩をして、ののしり合っている者もあり、かと思えば、歌をうたい出す者もあった……『もうおれも帰っていいころだ！』とラスコーリニコフは考えた。『さあ、ソフィヤ・セミョーノヴナ、一つ見てみようじゃありませんか、今度あなたが何を言いだすか！』

彼はソーニャの住まいへ足を向けた。

四

ラスコーリニコフは自分の胸の中に、あれほど恐怖と苦痛を蔵していたにもかかわらず、ルージンを向うに回して、ソーニャのために敏腕かつ勇敢な弁護士となった。彼は朝のうちあれだけ苦しみ抜いたために、いよいよ堪え難くなって来る気分を転換する意味で、あの機会が与えられたのをむしろ喜んだくらいである。しかしソーニャを助けようとする彼の意欲の中には、きわめて多量の個人的な真実感が含まれていたのはいうまでもない。のみならず、当面の問題として彼の頭にこびりつき、時には堪え難いほど激しく彼の胸を騒がしていたのは、目前に迫っているソーニャとの会見である。彼は誰がリザヴェータを殺したかを、説明しなければならなかった。彼はその恐ろしい苦痛を予感し、両手でそれを払いのけるようにしていた。で、カチェリーナのところから出がけに、『さあ、ソフィヤ・セミョーノヴナ、今度あなたは何を言いだすか一つ見てみよう』と叫んだ時の彼は、まだ明らかに、ルージンに対する先ほどの勝利で、外面的に興奮させられ、勇敢な挑戦的気分になっていたのである。しかるに、不思議なことが起こった。カペルナウモフの住まいまで来ると、彼はふいに力ぬけがして、心に恐怖を覚えた。彼は『誰がリザヴェータを殺したのかぜひ言わなけりゃならないだろうか？』という奇怪な疑問をいだきつつ、もの思わしげにドアの前に立ち止まった。

この疑問は、げにも奇怪なものであった。なぜなら、彼はそれと同時に、単に言わずにいられないのみならず、たとえ一時にもせよ、この瞬間を延ばすことさえ不可能なのを、はっきり感じたからである。しかし、彼はまたなぜに不可能なのか知らなかった。ただそう感じただけである。そして、この必然に対して自分が無力であるという悩ましい意識が、ほとんど彼を圧倒しつくすばかりであった。もうこの上考えて苦しみたくなかったので、彼は急いでドアをあけ、しきいの上からソーニャを見た。彼女はテーブルに肘突きして、両手で顔をおおいながらすわっていたが、ラスコーリニコフを見ると、あわてて立ち上がり、待ちかねていたように、彼の方へ向かって歩き出した。

「ほんとにあの時あなたがいらしてくださらなかったら、わたしはどうなっていたでしょう！」彼と部屋のまんなかで落ち合った時、彼女は早口に言った。

彼女は明らかに唯これだけの事が少しも早く言いたかったらしい。で、あとは黙って待っていた。

ラスコーリニコフはテーブルの傍へ寄り、今ソーニャが立ったばかりの椅子へ腰をおろした。彼女は昨日と寸分たがわず、彼から二歩前のところにたたずんだ。

「どうです、ソーニャ？」と彼は言ったが、ふと自分の声の震えるのに気がついた。「いっさいのことは皆、『社会的地位とそれに関連した習慣』とに根をおいているんですよ。あなたはさっきのことがわかりましたか？」

苦悩の色が彼女の顔に現われた。

「ただね、昨日のようなことを言わないでください！」と彼女はさえぎった。「どうぞもうあんなことは言い出さないで。でなくっても、いいかげんくるしいんですから……」

彼女はこんな非難めいたことを言って、もしか彼の気にさわりはしまいかと、はっとしたように、急いで笑顔を作って見せた。

「わたし無考えに、ぷいとあのまま出てしまったんですが、あちらじゃ今どうしてるでしょう？　わたしこれからも一度行って見ようと思ったんですけど、いまにも……あなたがいらっしゃりそうな気がしたものですから」

彼は、アマリヤが彼女一家に立ちのきを迫ったことから、カチェリーナが『真実を捜す』と言って、どこかへ駆け出して行ったてん末を、ソーニャに話して聞かせた。

「ああ、どうしましょう！」とソーニャは叫んだ。「さあ、早く行きましょう……」

こう言って、彼女は自分のマントをつかんだ。

「いつもいつも同じことばかり！」とラスコーリニコフはいらだたしげに言った。「あなたの頭の中には、あの人たちのことしかないんですね！　少しは僕と一緒にいてくださいよ」

「だって……カチェリーナ・イヴァーノヴナは？」

「カチェリーナ・イヴァーノヴナなら、家を駆け出してしまった以上、けっしてあなたをぬきにするわけには行きませんよ、今に自分であなたのところへ来るに決まっています」と彼は気むずかしげに言い足した。「その時

あなたが留守だったら、それこそあなたが悪いことになるじゃありませんか……」
ソーニャは決しかねるていで、悩ましげに椅子へ腰をおろした。ラスコーリニコフはじっと足もとをみつめたまま、何やら一心に考えこみながら、おし黙っていた。
「まあ、さっきはルージンがそんな気を起こさなかったからいいようなものの」ソーニャの方を見ないで、彼は口を切った。「もしあの男がそんな気を起こしたら、もしそんな事がやつの計画にはいっていたら、あなたは監獄へぶち込まれたかもしれませんよ。もし僕と、それからレベジャートニコフがいあわせなかったら！　え？」
「そうですわ」と彼女は弱々しい声で言った。「そうですわ！」彼女は心の落ち着かぬさまで、そわそわした調子でこうくり返した。
「だって実際、僕はいあわせなかったかもしれないんですからね！　レベジャートニコフにいたっては、あの男があすこへ来たのは全くの偶然ですよ」
ソーニャは黙っていた。
「ねえ、もし監獄へでもはいったら、その時はどうなったと思います？　僕が昨日言ったことを覚えていますか？」
彼女はやはり答えなかった。こちらはしばらく待っていた。
「僕はあなたが、『ああ、言わないでください、よしてください！』とわめくだろうと思いましたよ」とラスコーリニコフは笑い出したが、それはなんとなくわざとらしかった。「どうです、また沈黙ですか？」一分間ばかりして彼は尋ねた。「だって、何か話をしなくちゃいけないじゃありませんか？　僕はね、レベジャートニコフのいわゆる一つの『問題』を、あなたがどう解決するか、それを知りたいんですがね（彼は混乱してきたらしい様子だった）。いや、実際、僕はまじめなんです。ねえ、こういうことを考えてごらん、ソーニャ。あなたがルージンのたくらみを前からすっかり知っているとしましょう。それがためにカチェリーナ・イヴァーノヴナも、それから子供たちも、おまけにあなたまで一緒に（あなたは自分をなんとも思っちゃいないからね、それでおまけなんですよ）、破滅してしまわなくちゃならないと知ってたら、つまり正確に知ってたらどうです（ポーレチカも同様ですよ……あの子もやはり同じ道をたどって行くに決まってますからね）。ねえ、そこでこういうことになるんですよ――もし万一この場合すべてがあなたの決心一つにあるとしたら――つまり、この世の中で彼と彼らと、どちらが生きていくべきであるか、ルージンが生きて汚らわしいことをなすべきであるか、またはカチェリーナ・イヴァーノヴナが死ぬべきかとこういうことになるとしたら、あなたはどう判決します？　二人のうちどちらが死ぬべきだと思います？　僕はそれが聞きたいんです」
ソーニャは不安げに彼を見つめた。このあいまいな、何か遠まわしに忍びよるようなことばの中に、ある特殊なものが響いていることを感じたのである。

「わたしもう初めから、あなたが何かそんなことをおききになりそうな気がしていましたわ」ためすような目つきで相手を見ながら、彼女はそう言った。
「そうですか、かまいません。しかし、それにしても、どう判決します？」
「あなたはなんだって、そんなできもしないことをおききになりますの？」と嫌悪の表情を浮かべながらソーニャは言った。
「してみると、ルージンが生きていって、卑劣なことをする方がいいんですね！　あなたはそれさえ判決する勇気がないんですか？」
「だってわたし、神様の御心（みこころ）を知るわけにゆきませんもの……どうしてあなたはそんなに、きいてはならないことをおききになるんですの？　そんなつまらない質問をして、いったい何になさいますの？　そんなことがわたしの決断一つでどうにでもなるなんて、それはなぜですの？　誰は生きるべきで、誰は生きるべきでないなんて、いったい誰がわたしをそんな裁き手にしたのでしょう？」
「神の意志なんてものがはいってきたんじゃ、もうどうすることもできやしないさ」とラスコーリニコフは気むずかしげに言った。
「それよか、いっそ真っ直ぐに言ってください、あなたどうして欲しいんですの！」とソーニャは苦痛の表情で叫んだ。「あなたはまた何かへ話を持ってゆこうとなさるんですわ……いったいあなたは私を苦しめるために、ただそれだけのためにいらしったんですの！」
　彼女はこらえかねて、ふいにさめざめと泣き出した。彼は暗い憂愁をいだきながら、じっと彼女を見つめていた。五分ばかり過ぎた。
「いや、お前の言う通りだよ、ソーニャ」彼はとうとう低い声で言いだした。
　彼は突然別人のようになった。わざとらしいずうずうしさも、無力な挑戦的態度も、すべて消えてしまった。声まで急に弱々しくなった。
「きのう僕は自分で、許しを請いに来るんじゃないと言ったね。ところが今は、ほとんど許しを請うも同然なことばで話を始めてしまった……僕がルージンや神の意志のことを言ったのは、あれはつまり自分のためだったんだ……あれは僕が許しを請うたんだよ、ソーニャ」
　彼はにっこり笑おうとしたけれど、その青白い微笑の中には、何かしら力ない中途半端なものが浮かび出た。彼は頭（こうべ）をたれ、両手で顔をおおった。
　とふいに、ソーニャに対する刺すような怪しい憎悪の念が、思いがけなく彼の心を走り流れた。彼はこの感情にわれながら驚きおびえたように、とつぜん頭を上げて、彼女の顔をひたとみつめた。けれども彼は、自分の上にそそがれている不安げな、悩ましいほど心づかいにみちた彼女の視線に出会った。そこには愛があった。彼の憎悪は幻のごとく消え失せた。あれはそうではなかった。ある一つの感情をほかのものと取り違えたのだ。それはつまり、あの瞬間が来たことを意味したにすぎないのだ。

彼はふたたび両手で顔をおおい、頭(こうべ)を低くたれた。と、ふいにさっと青くなって椅子から立ち上がり、ソーニャをちらと見やったが、なんにも言わず、機械的に彼女の寝台にすわり直した。

この瞬間はラスコーリニコフの感覚の中で、彼がかの老婆の後ろに立ち、斧(おの)を輪さからはずしながら、もう『この上一分もゆうよできない』と感じた瞬間に、恐ろしいほど似通っているのであった。

「どうなすったんですの？」と、すっかりおびえ上がったソーニャはこう尋ねた。

彼は一言も口がきけなかった。こんなぐあいに声明しようとは、まるで少しも予想していなかったので、今いったい自分がどうなっているのか、われながらわけがわからなかった。彼女は静かに彼に近づき、寝台の上に並んで腰をおろし、その顔から目を離さないで、じっと待っていた。彼女の心臓は激しく鼓動して、今にも麻痺(まひ)しそうな気がした。もうたまらなくなってきた。彼は死人のように青ざめた顔を、女の方へふり向けた。その唇は何か言い出そうともがきながら、力なげにゆがむのであった。恐怖の念がソーニャの胸をさっと流れた。

「まあ、どうなさいましたの？」やや男から身を引きながら、彼女はくり返した。

「なんでもないよ、ソーニャ。びくびくしなくったっていいよ……くだらないことだ！　まったく、よく考えてみればくだらないことだ」うなされて前後を覚えない人のような風で、彼はつぶやくように言った。「なんだって僕はお前ばかり苦しめに来たんだろう？」女を見つめながら、彼はふいにこうつけ足した。「まったくなぜだろう？　僕は始終この問いを自分に発してるんだよ、ソーニャ……」

彼は事実十五分前には、この問いを自分に発していたかもしれないけれど、今は全身に絶え間なき戦慄(せんりつ)を感じながら、すっかり力が抜けた様子で、ほとんどわれを忘れて言ったのである。

「ああ、あなたはどんなにか苦しんでらっしゃるんでしょうねえ！」と、彼の顔に見入りながら、彼女は同情にあふるる調子でそう言った。

「何もかもばかばかしいことさ！……ところでね、ソーニャ（彼は急になぜか青白く、力なげに、ものの二秒ばかり、にやりと笑って見せた）――きのう僕がお前に何を話そうとしたか、覚えているだろう？」

ソーニャは不安な面持で待っていた。

「僕は帰りしなに、ことによったら、これが永久の別れになるかもしれない、しかしもし明日やって来たら、そうしたらお前に……誰がリザヴェータを殺したか、聞かしてやるといったろう」

彼女はふいに全身をわなわなと震わせ始めた。

「ねえ、だから僕はそれを話しに来たんだよ」

「じゃ、ほんとにあなたは昨日……」と彼女はやっとのことでささやいた。「どうしてそれをご存じですの？」ふとわれに返った様子で、彼女は早口にこう尋ねた。

ソーニャは苦しげに息をつき始めた。顔はいよいよ青

白くなってゆく。
「知ってるんだ」
　彼女はしばらく黙っていた。
「見つけでもなすったの、その男を？」彼女はおずおずと尋ねた。
「いや、見つけたんじゃない」
「じゃ、どうしてあなたがそれをご存じなんでしょう？」またしても一分ばかり無言の後、また今度も聞きとれないほどの声で彼女は問い返した。
　彼は女の方へくるりとふり向いて、じいっと穴のあくほどその顔をみつめた。
「あててごらん」さっきと同じひん曲がったような、弱々しい微笑を浮かべて、彼はこう言った。
　と、彼女の全身をけいれんが走り過ぎた――というような風情であった。
「まあ、あなたは……わたしを……なんだってあなたはわたしをそんなに……びっくりさせようとなさるんですの？」幼い子供のような微笑を浮かべながら、彼女はつぶやいた。
「つまり、僕はその男と仲のいい友だちなんだよ……知ってる以上にね」とラスコーリニコフはもはや目を放すことができないように、彼女をどこまでも見つづけながら、ことばを続けた。「その男はあのリザヴェータを……殺そうとは思わなかったんだ……その男はあれを……ほんのはずみで殺したのだ……その男は婆(ばば)あだけを殺そうと思ったのだ……婆あが一人きりの時に……そして、出かけて行ったのだ……ところが、そこへリザヴェータがはいってきた……で、あの女まで殺してしまったのだ……」
　また恐ろしい一分間が過ぎた。二人はいつまでもたがいに顔をみつめあっていた。
「これでもあてることができない？」ふいに鐘楼からでも飛びおりるような感じで、彼はそう尋ねた。
「い、いいえ」とソーニャは聞こえるか聞こえないくらいの声でささやいた。
「ようく見てごらん」
　彼がこういうやいなや、またもや先ほど覚えのある感覚が、ふいに彼の心を凍らせた。彼はソーニャを見た。と、せつなその顔に、リザヴェータの顔を見たような気がした。あの斧を持って近づいて行った時、あの時のリザヴェータの顔の表情を、彼はまざまざと思い浮かべた。小さな子供が急に何かに驚いた時、自分を驚かしたものをじっと不安そうに見つめて、ぐっと後ろへ身を引きながら、小さな手を前へ差し出して、今にも泣き出しそうにする――ちょうどそういったような子供らしい驚愕(きょうがく)の色を顔に現わしながら、リザヴェータは片手を前へかざして、彼を避(よ)けるように壁ぎわへあとずさりした。ほとんどそれと同じことが、今のソーニャにくり返されたのである。同じように力なげな風で、同じような驚愕の表情を浮かべながら、彼女はしばらく彼をじっと見ていたが、ふいに左手を前へ突き出し、きわめて軽く指で彼の胸を押すようにして、だんだん彼から身を遠のけなが

ら、じりじりと寝台から立ち上がった。彼の上に注がれた視線は、いよいよ動かなくなった。彼女の恐怖は突如、彼にも伝染した。全く同じ驚愕が彼の顔にも現われた。全く同じ様子で彼も女の顔を見入った。そして、ほとんど同じような子供らしい微笑さえ、その顔に浮かんでいるのであった。

「わかったね？」ついに彼はこうささやいた。

「ああ！」と彼女の胸から恐ろしい悲鳴がほとばしり出た。

彼女は頭を枕に埋めるようにしながら、ぐったり力なげに寝台の上へ倒れた。けれど、すぐにさっと身を起こして、つかつかと彼の傍へ寄ると、その両手をつかみ、しめ木にでもかけるように、その細い指でひしとばかり握りしめながら、またもや釘づけにされたように、身動きもせず、彼の顔をみつめにかかった。この最後の絶望的なまなざしで、彼女はせめて何か最後の希望らしいものを見つけ出し、それをとらえようと試みたのである。が、希望はなかった。疑惑は毫も残らなかった。すべてはそのとおりであった！　それからずっと後になって、この事を思い出した時でさえ、彼女はいつもなんともいえない不思議の感がするのであった――あの時どうしていきなり、もう疑惑はいっさいないと、見きわめてしまったのだろう？　実際、こうした風のことを何か予感していたとは、どうしたって言えないではないか？　それだのに、いま彼があれだけの事を言うが早いか、彼女は急に実際それを予感していたような気がしたのである。

「もういいよ、ソーニャ、たくさんだ！　僕を苦しめないでおくれ！」と彼は悩ましげに頼んだ。

彼はこんな風に彼女に打ち明けようとは、まるで夢にも思わなかった。ところが、こんな事になってしまったのである。

彼女はわれを忘れたように飛び上がって、両手をもみしだきながら、部屋のまんなかまで行ったが、すばやくくびすを転じて彼の傍へ引っ返し、ほとんど肩と肩がすれ合うほど近々と並んで腰をかけた。ふいに、彼女は刺し通されでもしたように、ぴくっと身震いして、ひと声叫びを上げると、自分でもなんのためともしらず、いきなり彼の前に膝をついた。

「なんだってあなたは、なんだってあなたはご自分に対して、そんなことをなすったんです！」と絶望したように彼女は叫んだ。

それから急におどり上がりざま、彼の首へ飛びついて、両手で堅く堅く抱きしめた。

ラスコーリニコフは思わず一歩後ろへよろけて、わびしげな笑みを含みながら、彼女を見やった。

「お前はなんて妙な女だろう、ソーニャ――僕がこんなことを言ったのに、抱いて接吻するなんて。お前、自分でも夢中なんだろう」

「いいえ、いま世界中であなたより不幸な人は、一人もありませんわ！」彼の注意など耳にも入れず、彼女は興奮の極に達したようにこう叫んだ。とふいにヒステリイでも起こったように、しゃくり上げて泣き出した。

もういつからか経験したことのない感情が、彼の胸へ波のごとく澎湃と押しよせて、みるみる彼の心を柔らげた。彼はもうそれに逆らおうとしなかった。涙の玉が二つ彼の両眼からこぼれ出て、まつ毛にかかった。

「じゃ、お前は僕を見捨てないんだね、ソーニャ？」ほとんど希望の念さえいだきながら、彼は女の顔を見つめてこう尋ねた。

「ええ、ええ。いつまでも、どこまでも！」とソーニャは言った。「わたしはあなたについて行く、どこへでもついて行く！　おお、神さま！……ああ、わたしは不幸な女です！　なぜ、なぜわたしはもっと早く、あなたを知らなかったのでしょう！　なぜあなたはもっと早く来てくださらなかったの？　おお、なさけない！」

「だからこのとおりやってきた」

「今！　おお、今さらどうすることができましょう？……一緒に、一緒に！」と彼女は前後を忘れたように、またもや彼を抱きしめながらくり返した。「わたし懲役へだってあなたと一緒に行く！」

彼は急に全身ぴりりとけいれんさせた。その唇にはさっきのにくにくしげな、ほとんど傲岸な微笑がしぼり出された。

「僕はね、ソーニャ、まだ懲役に行く気はないかもしれないよ」と彼は言った。

ソーニャはすばやく彼をながめた。

不幸な男に対する感激と苦痛に満ちた同情の発作がすむと、またしても殺人という恐ろしい観念が彼女の胸を打った。急に変わった彼のことばの調子に、彼女はふと殺人者の声を聞いた。彼女はぎょっとして彼を見やった。どういうわけで、どうして、なんのためにこんなことが行なわれたのか、彼女はまだなんにもわかっていなかったのだ。これらの疑問が一時にぱっと、彼女の意識に燃え上がった。と、彼女はまたもや本当にならなかった。『この人が、この人が人殺し！　いったいそんなことがあってよいものだろうか？』

「いったいこれはどうしたことだろう！　わたしはどこに立っているのだろう！」彼女はまだ我に返れない様子で、深い疑惑に悩まされながらそう言った。「どうしてあなたは、あなたはそんな……そんなことが思い切ってできたのでしょう？　いったいこれはどうしたというんでしょう！」

「ふん、なに、物を盗るためさ！　もうよしてくれ、ソーニャ！」なんとなく疲れたような、むしろいらだたしげな調子で、彼は答えた。

ソーニャは脳天を打ちのめされたように突っ立っていたが、ふいに声を上げて叫んだ。

「あなたは食べるものがなかったんでしょう！　あなたは……お母さんを助けようと思って？　ね、そうでしょう？」

「いや、ソーニャ、違う」と彼は顔をそむけてうなだれたままつぶやいた。「僕はそんなにかつえちゃいなかった……僕はじっさい母を助けてやろうと思った。しかし……それだって完全に当たっているとも言えない……も

う僕を苦しめないでくれ、ソーニャ！」
　ソーニャは両手をうち鳴らした。
「ではいったい、いったいこれは何もかも本当なんですの！　ああ、これがどうして本当なもんですか！　誰がこんなことを本当にできましょう？……それにまたどうして、どうしてあなたはご自分から、なけなしの金を人に恵んでやりながら、物を盗るために殺したなんて！　ああ！……」と彼女はふいに叫んだ。「あのカチェリーナ・イヴァーノヴナにおやりになったお金も……あのお金も……ああ、いったいあのお金もやはり……」
「違うよ、ソーニャ」と彼は急いでさえぎった。「あの金はそうじゃない、安心しておくれ！　あの金は母がある商人の手を通して送ってくれたのだ。僕が病気で寝ているところへ届いたのだ。お前たちにあげた当日なのだ……ラズーミヒンが見て知っている……あの男が僕の代わりに受け取ったくらいなんだから……あの金は僕のものだ、僕自身のものだ、ほんとうの僕の金なんだ」
　ソーニャはいぶかしげに彼のことばを聞きながら、一生懸命に何やら思い合わそうと苦心していた。
「ところで、その金だが……僕はそこに金があったかどうか、それさえ知らないんだ」と彼は物思わしげに低い声で言い足した。「僕はあの時、婆さんが首にかけていた財布をはずしたんだ。ぎっちりいっぱいにつまったもみ皮の財布だ……だが、僕はその中を見なかった。きっと見る暇がなかったんだろう……ところで品物は、みんな飾りボタンだのくさりだのというものだが――僕はそんなものを全部財布と一緒に、翌朝Ｖ通りのある空地の石の下へかくしてしまった……今でもやはりそこにあるだろうよ……」
　ソーニャは一生懸命に聞いていた。
「まあ、それじゃなんだって……どうしてあなたは……物を盗るためだなんておっしゃりながら、ご自分じゃなんにもお取りにならなかったの？」と、わらしべ一本にもすがりつく心持で、彼女は早口に尋ねた。
「知らない……僕はまだ腹が決まっていなかったんだ……その金を取るか、取らないか」と彼はまたもや物思わしげにそう言ったが、ふとわれに返り、ちらと短かい薄笑いを浮かべた。「ちえっ、僕はなんてばかなことを言ったもんだろう、え？」
　ふとソーニャの頭には、『気違いではないだろうか？』という考えがひらめいた。けれど、彼女は即座にそれを否定し、『いや、これは何か別なことだ』彼女には何一つ、まったくわからなかった！
「ねえ、ソーニャ」とふいに彼はある感激に打たれて言い出した。「ね、僕はお前に何を言おうとしてるかわかるかい。もし僕が飢えてるために人殺しをしたのなら」彼は一語一語に力をこめて、謎でもかけるように、とはいえ真剣に彼女を見つめながら、こうことばを続けた。「それならいま僕は……さぞ幸福だったろう！　お前それを承知しといておくれ！　それに、お前にとってなんだろう、それがお前にとってなんだろう」と、すぐ次の瞬間、一種の絶望さえ声に響かせながら、彼は叫ぶので

あった。「ねえ、僕が今わるいことをしたと懺悔(ざんげ)したからって、それがお前にとってなんだろう？　ああ、ソーニャ、僕はそんなことのために、今お前んとこへ来たんだろうか！」

ソーニャはまた何か言おうとしたが、やはり沈黙を守っていた。

「きのう僕がお前に、一緒に行ってくれと頼んだのは、僕に残ってるのはお前よりほかに何もないからだよ」

「どこへ行くんですって？」とソーニャは問い返した。

「泥棒するためでも、人を殺すためでもないから、心配しなくていいよ。そんなことじゃない」と彼は皮肉ににやりと笑った。「僕ら二人は、まるで違った人間なんだからね……ところで、ソーニャ、僕は今、ついたった今、昨日お前をどこへつれて行こうと言ったのか、はじめてわかったよ！　昨日ああいった時には、僕自身もどこかわからなかったんだ。僕が頼んだのも、ここへやって来たのも、目的はたった一つだ。お前ぼくを見捨てないでくれ。見捨てないでくれるね、ソーニャ？」

彼女は男の手をかたく握りしめた。

『ああなぜ、なぜおれはこの女に言ったのだろう、なぜこの女に打ち明けたのだろう！』限りない苦悩をいだいて彼女を見ながら、彼はしばらくしてから絶望したように叫んだ。「現にお前は僕の説明を待っている。ね、ソーニャ、お前はじっとすわって待っている、僕にはそれがちゃんとわかる。だが、僕お前に何を言えばいいのだ？　お前はこの問題じゃなんにもわかりゃしない、たださんざん苦しみ抜くばかりだ……俺のために！　ね、ほらお前は泣きながら、また僕を抱きしめる――え、いったいなんだってお前は僕を抱きしめるのだろう？　まさか僕が自分で持ち切れなくなって、『お前も苦しむがいい、おれが楽になるから！』といったようなぐあいに、自分の苦しみを他人の肩へ背負わせにやって来た、そのお礼でもなかろうね。いったいお前はこんな卑劣な人間を愛することができる？」

「だって、あなたもやはり苦しんでらっしゃるのじゃありませんか？」とソーニャは叫んだ。

またもや彼の胸には、さっきと同じ愛情が波のように押し寄せ、一瞬かれの心を柔らげた。

「ソーニャ、僕の心は毒を持ってるんだよ。お前それに気をつけておくれ。いろんなことがこれで説明できるんだから。僕は毒のある人間だから、それでやって来たんだよ。中には、やって来ないような連中もある。だが、僕は臆病(おくびょう)者で……卑劣漢だ！　だが……どうでもかまわない！　こんなことはみな見当ちがいだ……いま話さなくちゃいけないんだが、僕にはどうもうまく切り出せない……」

彼はことばをとめて、考え込んだ。

「ええっ、僕ら二人は別々な人間なんだ！」と彼は再び叫んだ。「まるで一つにならないんだ。なんだって、なんだってここへやって来たんだろう！　このことは実にわれながら許し難い！」

「いいえ、いいえ、来てくだすったのはいいことです

わ！」とソーニャは叫んだ。「そりゃわたしが知ってた方がよござんすわ！　ずっとよござんすわ！」
　彼は苦痛の表情で彼女を見つめた。
「いや、そりゃ本当だ！」十分考え抜いたという様子で彼は言った。「まったくそのとおりなんじゃないか！　つまりこうなんだよ。僕はナポレオンになりたかった、そのために人を殺したんだ……え、それでわかるかい？」
「い、いいえ」とソーニャは無邪気に臆病らしくささやいた。「だけど……言って、言ってちょうだい。わたしわかるわ、腹ん中でわかるわ！」と彼女は一心に頼んだ。
「わかるって？　いや、よろしい、一つ見てみよう！」
　彼は口をつぐんで、長いこと想を練っていた。
「実はこういうわけなんだ。ある時ね、僕は自分にこんな問題を出してみた。たとえば、僕の位置にナポレオンがいたとしよう。そして、その立身の道を開くのに、ツーロンも、エジプトも、モン・ブラン越えもなく、そういう美しい偉大（モニュメンタル）なものの代わりに、ただもう滑稽（こっけい）な十四等官の後家婆さんしかいない。しかもおまけに、そいつの長持から金を引き出すために（立身の道を開くためだよ、わかってるね？）そいつを殺さなけりゃならんとしたら――それ以外に方法がないとしたら、彼はそれを決行しただろうか？　それがあまりに非モニュメンタルで、そして……そして罪深い事だからというので、ちゅうちょしやしないだろうか？　ねえ、そこで、いいかい、僕はこの『問題』にうんと長い間悩み抜いた。でやっと（ふいと何かの拍子に）、ナポレオンならこんなことでちゅうちょするどころか、それが非モニュメンタルだなんてことは、夢にも考えなかったろう……いや、そこに何をちゅうちょすることがあるのか、それさえまるでわからなかったに違いない、とこう考えついた時には、僕はむしょうに恥ずかしくなったくらいだ。もしほかに道がないとすれば、彼はむろんいっさい何も考え込んだりなどせず、きゅっという暇もないうちに絞め殺してしまったに相違ない！　そこで僕も……考え込むのをよして……絞め殺したのだ……権威者の例にならってさ。これは実際このとおりだったのだ！　お前、おかしいかい！　そうだ、ソーニャ、ここで何よりおかしいのは、これがまったくそのとおりだってことなんだよ……」
　ソーニャはおかしいどころではなかった。
「あなた、それよかありのままを話してくださいな……たとえ話なんか抜きにして」彼女はいっそうおどおどして、やっと聞こえるくらいの声で頼んだ。
　彼はその方へふり向いて、沈んだ目つきでその顔をながめ、その両手をとった。
「そうだ、今度もまたお前の言う通りだ、ソーニャ。これはみんなばかげたことだ。ほとんど唯（ただ）のおしゃべりにすぎない！　実はね、お前も知ってるだろうが、僕のおふくろはほとんど無一物なんだ。妹はほんの偶然で教育を受けていたので、よその家庭教師などして回らなきゃならない仕合せなのだ。で、二人の望みはすっかり僕一人にかかっていたわけだ。僕は勉強していたのだが、大学の学資を続けられなくなって、退学しなくちゃならな

くなったんだよ。よしまたあのまま続けていけたにしろ、十年か十二年たつうちに（それも事情がうまく転回してくれれば）、どうやらこうやらどこかの教師か官吏になって、年千ルーブリくらいの俸給にはありつけるようになるだろう……（彼は暗記したものでも復習するような調子で話した）。ところがその時分には、おふくろは苦労と悲しみでやせ細ってしまうだろう。で、僕はけっきょくおふくろを安心させることができないわけだ。ところで妹……いや、妹にはもっと悪いことが起こるかもしれない！……してみると、僕はなんだってものずきに、一生涯すべてのもののかたわらを素通りして、いっさいのものから顔をそむけ、母を忘れ、妹の恥辱を忍ばなけりゃならんのだ？　いったいなんのためだ？　彼らを葬って、その代わりに新しいもの――妻や子を儲けた後、またそれをも同じように無一文で、一片のパンもない境遇に残してゆくためなのか？　で……で、つまり僕は決心したのだ。婆あの金を没収して、最初なん年間かの学資に当て、母を困らせないで、大学にいる間の勉強を安全にした上、大学を出てからの第一歩にも使おう――しかも、そいつをすべて大きく根本的にやって、ぜんぜん新しい形で社会へ打って出てさ、新しい独立不羈の道に立つ！……まあ……まあ、これでみんなだ……そりゃ、もちろん僕が婆あを殺したのは……それは悪い事をしたに違いない……だが、もうたくさんだ！」

なんとなく力ない語調で、やっと話の終わりまでこぎつけると、彼はがっくり首をたれてしまった。

「ああ、それは違います、それは違います」とソーニャは悩ましげに叫んだ。「いったいそんなことがあっていいものですか……いいえ、それは違います、それは違います！」

「お前は自分でそんな事はないと思うんだね！……でも、僕は真剣で話したんだよ、真実を！」

「まあ、それがなんの真実なものですか！　おお、神さま！」

「だって、僕はただしらみを殺しただけなんだよ、ソーニャ、なんの益もない、汚らわしい、有害なしらみを」

「まあ、しらみですって！」

「そりゃ僕だって、しらみでないことは知ってるさ」と、妙な目つきで彼女を見ながら、彼は答えた。「だがもっとも、僕はでたらめを言ってるんだよ、ソーニャ」と彼は言い足した。「僕はもうずっと前からでたらめばかり言ってるんだよ……あれはみな見当ちがいだ。実際お前の言うとおりさ。そこには全然、全然、全然べつな原因があるんだ！……僕はもう長いこと、誰とも話をしなかったもんだからね、ソーニャ……ああ、僕は今やたらに頭が痛い」

彼の目は熱病やみのような火に燃えていた。彼はほとんど熱に浮かされないばかりであった。不安げな微笑がその唇の上をさまよっていた。興奮した気持の陰から、もう恐ろしい無力が顔をのぞけるのであった。彼がどんなに苦しんでいるか、ソーニャにはよくわかっていた。彼女もやはりめまいがしかけていた。それに、彼の話し

振りもなんとなく奇妙だった。なんだかわかるような気もするけれど、しかし……『しかし、どうなのだろう！　いったいどうなのだろう！　おお、神さま！』彼女は絶望のあまり両手をもみしだいた。

「いや、ソーニャ、あれは見当ちがいだ！」突然新しい思考の屈折にショックを受けて、興奮を感じたように、彼は急に頭を上げて、また言い出した。「あれは見当ちがいだ！　それよりいっそ……こんな風に想像してみてくれ。（そうだ！　実際この方がいい！）僕が自尊心の強い羨ましがりやで、意地悪で、卑劣な執念深い人間で……その上気ちがいの傾向があるとしてもいい――こういう男だと想像してみておくれ。（もういっさいがっさい、一時にひっくるめてしまえ！　発狂ということは前にも人が言っていたよ。僕気がついていた！）いま僕はお前に、大学の学資が続けられなかったと言ったろう。ところがね、ことによったら、続けられたかもしれないんだよ。大学に納めるだけのものは、母が送ってくれたろうし、靴だとか、服だとか、パンだとかを買う金は、僕自分でかせげたろうと思う。確かにかせげたよ！　出稽古（でげいこ）の口がちょいちょいあって、一回五十カペイカずつもらえたんだからね。ラズーミヒンだって働いている！　ところが僕は意地になって、働こうとしなかったんだ。そうだ、意地になったんだ。（これはうまいことばだ！）僕はそのとき蜘蛛（くも）みたいに、自分の巣の隅っこへ引っ込んでしまった。お前は僕の部屋へ来たから、見て知ってるだろう……ねえ、ソーニャ、わかるだろう、低い天井や狭苦しい部屋は、魂も頭もおしつけてしまうものだ！　おお、僕はあの犬小屋を、どんなに憎んだかしれやしない！　が、それでもやはりそこから出ようとしなかった！　わざと出ようとしなかった、幾日も幾日も外へ出もしなければ、働こうともしなかった。ものを食う気にさえならなく、始終ねてばかりいた。ナスターシャが持って来れば食うし、持って来なければそのまま一日過ごしてしまった。わざと意地で頼まなかったのだ！　夜は灯（あかり）もない暗闇の中にねたまま、ろうそく代をかせごうともしないんだ！　勉強しなくちゃならないのに、本は売り飛ばしてしまい、テーブルの上のノートや手帳などには、今でも一分くらいの厚みに埃（ほこり）が積んでいる。僕はそれよりねてて考えるのが好きだった。そして、のべつ考えていた……そしてね、始終いろんな変てこな夢ばかり見ていたのさ！　どんな夢かって、そんなことは言ったって仕様がない！　ところが、そのころからそろそろ頭に浮かびかかったのだ、その……いや、これもそうじゃない！　僕はまた見当ちがいなことを言い出した！　実はね、僕そのころしじゅう自分で自分に尋ねていたんだ――なぜ自分はこんなにばかなんだろう？　もし人がみんな馬鹿で、自分がその事を確かに知っているなら、なぜ自分だけでももう少し賢くなろうとしないんだ？　ところが、そのあとで僕は悟ったんだよ、ソーニャ――誰もかれもが賢くなるのを待っていたら、それこそあまり長すぎるだろうってね……それからまた僕は悟ったんだ――そんな時はこんりんざい来やしな

い、人間はどうにも変わるもんじゃないし、誰だって人間を作りかえられるものでもない、そんな事に手間をつぶす値打ちはない！　そうだ、それはそのとおりだ！　これが彼らの法則なのだ……法則なんだよ、ソーニャ！

それは正にそのとおりだよ！……そこで、こんど僕は知ったんだ――頭脳と精神のしっかりした強い人間は、彼らの上に立つ主権者なのだ！　多くをあえてなしうる人間が、群衆に対して権利を持つんだ！　より多くのものを無視しうる人間は、群衆に対して立法者となるのだ！　誰よりもっとも多く敢然と実行しうる人間は、それこそもっとも多く権利をもつことになるんだ！　これは今までもそうだったし、これから先もずっとそうだろう！　ただ盲目にはそれが見分けられないんだ！」

ラスコーリニコフはそう言いながら、ソーニャの顔は見てはいたけれど、もう彼女にわかるかどうかということを、少しも気にかけなかった。激しい熱情がすっかり彼をとらえてしまったのである。彼は一種の暗い歓喜に包まれていた。（実際、彼はあまり長く誰とも話をしなかったのである！）ソーニャは、この陰鬱な教典が彼の信仰となり、法律となっているのを悟った。

「僕はその時悟ったんだよ、ソーニャ」と彼は感激にみちた調子で語をついだ。「権力というものは、ただそれを拾い上げるために、身を屈することをあえてする人にのみ与えられたのだ。そこにはただ一つ、たった一つしかない――あえてしさえすればいいのだ！　その時僕の頭には生まれて初めて、一つの考えが浮かんだ。それは僕より前に誰一人、一度も考えた事のないものだ！　誰一人！　ほかでもない、世間の人間はこれまで誰一人として、この馬鹿げたものの傍を通りながら、ちょっと尻尾をつかんで振り飛ばすことさえ、あえてするものがなかったんだ、また今だって一人もいやしない。これがとつぜん僕の目に、太陽のごとく明瞭になったのだ！　で、僕は……僕は……それをあえてしたくなった、そして殺したのだ……僕はただあえてしたくなっただけなんだ、ソーニャ、これが原因の全部なんだよ！」

「ああ、お黙んなさい、お黙んなさい！」とソーニャは両手を打鳴らして叫んだ。「あなたは神様から離れたのです。それで神さまがあなたを懲らしめて、悪魔にお渡しになったのです！……」

「ああ、思い出したよ、ソーニャ、それは僕が暗闇の中でねていた時、のべつ頭に浮かんだことなんだよ。じゃ、あれは悪魔が僕を誘惑したのだね？　え？」

「お黙んなさい！　ひやかすのはおよしなさい、あなたは涜神者です、あなたはなんにも、なんにもわからないんです！　ああ、どうしよう！　この人はなんにも、なんにもわからないんだわ！」

「お黙り、ソーニャ。僕はちっともひやかしてなんかいやしない。僕はちゃんと自分で知っている――僕は悪魔に誘惑されたんだ。お黙り、ソーニャ、お黙り！」と彼は陰鬱な調子でしつようにくり返した。「僕は何もかも知っている。そんなことはみんなもうあの時、暗闇の中にねているとき、さんざん考え抜いて、幾度も自分で自

分にささやいたことなんだ……そんなことはみんな僕がごくごく細かいところまで、自分自身で議論し抜いたことなんだ。みんな！　知ってるよ、みんな！　僕はもうその時から、こんなおしゃべりにあきあきしちゃったんだ。すっかりあき果てたんだよ！　僕は何もかも忘れて、新しく始めたかったんだよ、ソーニャ。おしゃべりがやめたかったんだよ！　まさかお前は、僕が無鉄砲にばかみたいなことをした、などと思いはしないだろうね？　僕は知者として行動したんだよ。ところが、それがつまり僕を破滅さしたんだ！　お前まさかこんな事を考えはしないだろうね――僕が自分で自分に向かって、おれは権力を持っているかどうか？　などと自問したり反省したりする以上、つまりそれを持たないわけだという事が、僕自身にわかっていなかったのだなんて、まさかお前そんなことを考えやしないだろうね。それから『人間はしらみかどうか？』などという問いを自ら発する以上、人間は僕にとってしらみじゃない、ただこんな考えを夢にも頭に浮かべない人にとってのみ、なんら疑問なしに進みうる人にとってのみ、初めて人間はしらみであることを、僕が知らないと思っているのかい？……ああ僕は、ナポレオンならあんなことをやったかどうかという問題で、あんなに長い間悩み通したんだもの、自分がナポレオンではないことを明確に感じたわけなんだ……僕はそういった空虚な反省の苦しみを、とうとう持ちこたえたんだよ、ソーニャ。そして、そんなものをすっかり肩から振り落としたいと思った。僕はね、ソーニャ、理くつぬきで殺したくなったのだ。自分のために、ただ自分のためだけに殺したくなったのだ！　僕この事については、自分にさえ嘘を吐きたくなかったんだ！　僕は母を助けるために殺したのじゃない――ばかな！　また金と権力を得て、人類の恩人になるために殺したわけでもない。ばかばかしい！　僕はただ殺したのだ、自分のために殺したのだ。自分だけのために殺したのだ。それから先は、誰かの恩人になろうと、一生涯蜘蛛のようにあらゆる人間を網に引っかけて生き血を吸うようになろうと、その瞬間僕にとっては同じ事でなければならなかった！……僕が殺人を犯した時に、必要だったのは金じゃない。金よりもっと他のものが欲しかったのだ……それは今僕にみんなわかっている……ね、僕の言うことを飲み込んでおくれ。僕はたとえ同じ道をたどって行くとしても、もう今後はけっして殺人などくり返しゃしない。僕は別のことが知りたかったんだ。別のことが僕の背中を貫いたんだ。僕はその時知りたかったんだ、少しも早く――自分も皆と同じようなしらみか、それとも人間か、それを知らなければならなかったんだ。俺は踏み越すことができるかどうか？　身を屈して拾い上げることを、あえてなしうるかどうか？　俺は震えおののく一介の虫けらか、それとも権利を持つものか……」

「人を殺す？　人を殺す権利を持ってるんですって？」とソーニャは両手をうち合した。

「ええっ、ソーニャ！」と彼はいらだたしげに叫び、何か言い返そうとしたが、急にさげすむように口をつぐん

だ。「話の腰を折らないでくれ、ソーニャ！　僕はただ一つのことをお前に証明しようと思ったんだ。ほかでもない、あの時は悪魔が僕を引きずって行ったのだ。そして、悪魔のやつ、あとになってから、『お前はあんなまねをする権利を持っていなかったんだ、なぜって、お前もみんなと同じしらみにすぎないのだから』と僕に説明しやがったんだ！　悪魔が僕を愚弄したんだ。だからこそ、僕は今、お前のとこへやって来たのだ！　さ、お客様の取り持ちをしておくれ！　もし僕がしらみでなかったら、どうしてお前のとこへやって来るものか！　実はね、あの時僕が婆あのとこへ行ったのは、ただ試験するために行ってみただけなんだ……それを承知しといてもらおう！」

「そして殺したんでしょう！　殺したんでしょう！」

「だが、いったいどんな風に殺したと思う？　殺人てものはあんな風にするもんだろうか？　僕が出かけて行ったように、あんな風に人を殺しに行くものだろうか……僕がどんな風に出かけて行ったか、それはいつか話して聞かせよう。いったい僕は婆あを殺したんだろうか？　いや、僕は自分を殺したんだ、婆あを殺したんじゃない！　僕はいきなりひと思いに、永久に自分を殺してしまったんだ！……あの婆あを殺したのは悪魔だ、僕じゃない……もうたくさんだ、ソーニャ、たくさんだ！　僕をうっちゃっといてくれ」ふいに、けいれんするような悩みに身をもだえながら、彼はこう叫んだ。「僕をうっちゃっといてくれ！」

彼は膝の上に両肘ついて、釘抜きで締めつけるように、両の手で頭を抱きしめた。

「ああ、なんという苦しみだろう！」悩ましい悲鳴がソーニャの胸からほとばしり出た。

「さあ、これから僕はどうしたらいいんだろう、言ってくれ！」急に頭を振り上げ、絶望のあまり醜くゆがんだ顔を向けて彼女を見ながら、彼はこう尋ねた。

「どうしたらいいって！」と彼女は叫ぶなり、いきなり席をおどり上がった。と、今まで涙でいっぱいになっていた彼女の目が、急にらんらんと輝き始めた。「お立ちなさい！　（と彼の肩をつかんだ。彼はほとんど驚愕に打たれて彼女を見ながら、体を持ち上げた。）すぐ、今すぐ行って、四つ辻にお立ちなさい。そして身をかがめて、まずあなたがけがした大地に接吻なさい。それから、世界じゅう四方八方へ頭を下げて、はっきり聞こえるように大きな声で、『わたしは人を殺しました！』とおっしゃい！　そうすれば神さまがまたあなたに命を授けてくださいます。行きますか？　行きますか？」彼女は発作にでも襲われたように、全身をわなわなとおののかせ、男の両手をつかんでひしと握りしめ、火のような目で彼をみつめながら、こう問いかけた。

彼は驚愕に打たれた、というよりむしろ、彼女の意外な感激にあっけに取られたほどである。

「お前は懲役のことでもいってるのかね、ソーニャ？　自首しろとでもいうの？」と彼は陰鬱な調子で尋ねた。

「苦しみを身に受けて、それで自分をあがなうんです、

それが必要なんです」
「いや！　僕はあんな連中んとこへ行きゃしないよ、ソーニャ」
「じゃ、どうして、どうして生きていくつもりなんですの？」とソーニャは絶叫した。「そんな事がいまできると思って？　ねえ、お母さんにどんな話をなさるおつもり？　（ああ、あの人たちは、あの人たちは、この先どうなるんだろう！）まあ、わたしは何を言ってるんだろう！　あなたはもうお母さんも、妹さんも捨てておしまいになったんですわね。もうちゃんと捨ててしまったんです、捨ててしまったんです。おお、なんてことだろう！」と彼女は叫んだ。「だって、この人はもう何もかも自分で承知してるんだもの！　でもどうして、どうして人を離れて生きていけます！　あんたはこの先どうなるんでしょう！」
「赤ん坊じみたことを言うのはおよし、ソーニャ」と彼は低い声で言った。「いったい僕はやつらになんの罪があるんだい？　なんのために自首に行くんだ？　やつらに何を言おうってんだ？　そんな事はみんなただの幻でしかないよ……やつら自身からして、幾百万の人を滅ぼして、しかも善行のつもりでいるんじゃないか。やつらはごまかし者の卑劣漢だよ、ソーニャ！……僕は行かない。それに、いったい何を言うんだい？　人は殺したが、金をとる勇気がなく、石の下へ隠しました、とでも言うのかね？」と彼は皮肉な薄笑いを浮かべながらつけ足した。「そんなことをしたら、やつらの方が僕を笑って、こう言うだろう。『ばか、なんだって取らなかったんだ？　卑怯者のばかやろう！』やつらはなんにも、なんにもわかりゃしないよ、ソーニャ、わかるだけの資格がないんだよ。なんのために僕が行かなきゃならないんだ！　僕は行きゃしない。赤ん坊じみたことはおよし、ソーニャ……」
「あなたお苦しみになってよ、お苦しみになってよ」死物狂いな哀願の表情で、彼の方へ両手を差し伸べながら、彼女はくり返した。
「僕は事によったら、まだ自分で自分を中傷していたかもしれないな」と彼は物思わしげに、陰鬱な調子でいった。「もしかしたら、僕はまだ人間で、しらみじゃないかもしれない。あまり急いで自分を責めすぎたかもしれない……僕はも少し闘ってやる」
　不敵な微笑が彼の唇にしぼり出された。
「まあ、そんな苦しみをもって暮らすんですの！　しかも一生涯、まる一生涯！……」
「そのうちに慣れるよ……」と彼は気むずかしい、もの思わしげな調子で言った。「実はね、話があるんだ」と彼は一分ばかりして、また言い出した。「泣くのはもうたくさんだ、用事にかからなきゃ。今日ここへ来たのは、僕が今お尋ねものになって、つかまえられかかっているってことを、お前に知らせるためなのだ……」
「ああ！」とソーニャはおびえたように叫んだ。
「え、なんだってそんな声を出すんだい！　お前は自分の方から、僕が懲役に行くのを望んでるくせに、今度は

そんなにびっくりするなんて？　だがね、お聞き、僕はあんなやつらに屈しやしないから。僕はもっと闘ってやるんだ。そうすりゃ、やつらはどうすることもできやしない。やつらには本当の証拠がないんだ。僕は昨日とても危ない羽目に落ちて、もうだめかと思ったくらいだが、今日はまた事情が一変したんだ。やつらの持っている証拠は、皆どうにでもとれるようなものばかりだ。つまりやつらの起訴材料を、僕は自分に有利なようにふり向けることができるんだ、わかったかい？　ほんとうにふり向けてみせるとも。僕はもう要領を覚えちゃった……しかし、監獄へは必ずぶち込まれるだろう。もしある事件が起こらなかったら、今日はぶち込まれていたかもしれないんだ。いや、まだ今日これからぶち込まれるかもわからないんだ……だけど、そんなことはなんでもないよ、ソーニャ。しばらくいたら、また出してくれるよ……だってやつらは一つだって本当の証拠を持っていないんだから、またこれから先も出て来やしないんだから。そりゃきっと受け合うよ。ところで、今やつらの持ってるような証拠では、人間一人台なしにするわけにゆかないんだ。いや、もうたくさんだ……僕はただお前に知っていてもらおうと思って……妹や母にはなんとかして、二人が信じないように、びっくりしないようにするつもりだ。もっとも、こんど妹の身の上は保証されたらしいから……したがって母も同様だ……さあ、これでおしまい。しかしそれにしても、用心しておくれ、もし僕がぶち込まれたら、お前監獄へ面会に来てくれる？」

「ええ、行きますとも！　行きますとも！」

彼らはさながら嵐の後に、ただ二人荒涼たる岸へ打上げられた人のように、わびしげに悄然と並んで腰かけていた。彼はソーニャをじっとみつめていた。そして、彼女の愛がいかばかり豊かに、自分の上に注がれているかを感じた。と、不思議にも彼は突然、それほどまでに愛されているということが、苦しくも切なく感じられた。そうだ、それは奇妙な恐ろしい感触だった！　ソーニャのところへ来る道々、彼は自分の希望と救いが、あげてことごとく彼女にあるような感じがしていた。彼は自分の苦しみを一部だけでも、軽くしてもらうつもりでいたが、今や忽然、彼女の心がことごとく自分に向けられたのを知ると、彼は急に前よりも限りなく不幸になったのを感じ、意識したのである。

「ソーニャ」と彼は言った。「僕が収監されても、いっそ来てくれない方がいいな」

ソーニャは答えなかった。彼女は泣いていた。幾分か過ぎた。

「あなた十字架を持ってらっしゃる？」ふと思い出したように、思いがけなく彼女はだしぬけに問いかけた。

彼は初め問いの意味がわからなかった。

「ないでしょう、ね、ないでしょう？――さあ、これを持ってらっしゃい、糸杉で作ったものよ。わたしにはまだ真鍮のが残ってますの、リザヴェータのくれたのが。わたしリザヴェータと十字架のとりかえっこをしたんですの。あのひとがわたしに十字架をくれて、わたし

があのひとに肌守りのお像を上げたんですの。わたしこれからリザヴェータのを掛けるから、これあんたに上げるわ。さあとってちょうだい……わたしのですもの！
わたしのですもの！」と彼女は哀願するように言った。
「だって一緒に苦しみに行くんですもの、一緒に十字架を負いましょうよ！……」
「およこし！」とラスコーリニコフは言った。彼女を落胆させたくなかったのである。けれどすぐにまた、十字架を取ろうと差し伸べた手を引っ込めた。
「今はいけない、ソーニャ。あとにした方がいい」彼女を安心させるために、彼はそう言い足した。
「そうだわ、そうだわ、その方がいいわ、その方がいいわ」と彼女は夢中になって受けた。「苦しみに行く時にね、その時かけてらっしゃい。その時わたしのところへ寄ってね、わたしが掛けて上げますから。一緒にお祈りをして行きましょう」
　この瞬間、誰かが三度ドアをノックした。
「ソフィヤ・セミョーノヴナ、はいってもいいですか？」と、誰やらたしかに聞き覚えのある、ていねいな声が聞こえた。
　ソーニャはおびえたように戸口へ駆け寄った。白っぽい毛をしたレベジャートニコフ氏の顔が、ぬっと部屋の中をのぞきこんだ。

五

　レベジャートニコフは心配らしい様子をしていた。
「わたしはあなたを訪ねて来たのです、ソフィヤ・セミョーノヴナ。どうも失礼しました……僕はきっとあなたがおられるだろうと思いましたよ」と言って、彼は急にラスコーリニコフに話しかけた。「いや、なに、別になんにも考えやしなかったんですよ……そんな風なことは……しかし、僕はつまりこう考えたんです……実はお宅でカチェリーナ・イヴァーノヴナが発狂したんですよ」
彼はラスコーリニコフの方はうっちゃって、突然ソーニャに向かってぶっきらぼうに言った。
　ソーニャはあっと叫んだ。
「といって、つまり、少なくとも、そう思われるんです。もっとも……僕らはどうも、どうしていいかわからないもんで、つまりこういうわけなんですよ！　さっきあのひとが帰って来た――というより、どこからか追い出されて来たらしい。おまけに、少しなぐられたらしいんです……少なくとも、そう思われるんですよ……あのひとは長官のセミョーン・ザハールイチのところへかけつけたんですが、主人は留守だった。長官はやはりどこかの将軍のところへ、食事に招かれたんで……ところがどうでしょう、あのひとはその食事をしているところへ飛んで行った……そのもう一人の将軍のとこへね。そして、どうでしょう――とうとう強情を張り通して、長官のセ

ミョーン・ザハールイチを呼び出したもんです。おまけに、まだ確か食事ちゅうのところをね。それからどうなったか、すぐに想像がおつきになるでしょう。もちろん、あのひとは追っ払われたんだが、当人の話でみると、あのひとは長官をさんざん罵倒(ばとう)して、おまけに何やらぶつけたんだそうです。まあそれは大いに想像しうることですがね……どうしてあのひとが取り押えられなかったのか――それが不思議なくらいですよ！　今あのひとはみんなに話してるんです、アマリヤ・イヴァーノヴナにもね。しかし、どうもわかりにくい。わめいたり、もがいたりしてるんで……ああそうだ、あのひとはこんなことをわめきながら言ってたっけ――今じゃもうみんなに捨てられたから、自分はこれから子供をつれて、手回し風琴を持って街へ出て、子供たちに歌わせたり踊らせたりする、そして自分も同じようにして金を集めながら、毎日将軍の窓の下へ行ってやるんだ……『そして、官吏の父を持った由緒ただしい子が、往来を乞食(こじき)みたいにして歩くところをあいつに見せてやるんだ！』なんか言って、子供たちを打つもんだから、子供たちはわいわい泣き出す始末です。レーニャに『田舎家』の歌を教えて、男の子には踊りを教える、ポーレチカも同様なんです。それから、着物という着物を引き裂いて、それでもって役者のような帽子を子供たちに作ったり、自分は楽器がわりにたたくんだといって、金だらいを持ち出そうとしたり……人のいうことなんか、てんで耳に入れることじゃない……まあ考えてもごらんなさい、なんということでしょう？　もうお話にならんじゃありませんか！」

レベジャートニコフは、もっとしゃべり続けそうだったが、ようやく息をつぎながらその話を聞いていたソーニャは、いきなり小外套(マンチリヤ)と帽子を引っつかみ、走り走りそれを身につけながら、部屋の外へ駆け出してしまった。ラスコーリニコフはそのあとから飛び出した。レベジャートニコフもそれに続いた。

「確かに気が狂ったんですよ！」彼は連れ立って通りへ出ながら、ラスコーリニコフにこう言った。「僕はただソフィヤ・セミョーノヴナを驚かしたくないばかりに、『らしい』と言ったんですがもう疑う余地はありません。肺病患者にはこうした小結節が、脳へ出て来るそうですからね。残念ながら僕は医学の方のことを知らないんで。もっとも、僕はあのひとをなだめる試みはやってみたんですが、何一つ耳をかそうともしないんですよ」

「あなたは結節のことをあのひとに言ったんですか」

「いや、はっきり結節といったわけでもないんですよ。それに、あのひとはなんにもわかりゃしないんですからね！　しかし僕が言いたいのはこうなんです。人ってものは、本質的に何も泣くわけがないのだと、論理的に説伏してやると、泣くのをやめるものですよ。これは明瞭(めいりょう)なことです。あなたのご意見はどうです、やめない方ですか？」

「それじゃ、生きていくのがあまり楽になりすぎますよ」とラスコーリニコフは答えた。

「待ってください、待ってください。もちろん、カチェ

リーナ・イヴァーノヴナにはかなり了解が困難でしょう。しかし、あなたはご承知ないかもしれませんが、パリではもう単なる論理的説伏の方法で、狂人を治療しうるという学説が現われて、まじめな実験が行なわれているんですよ。最近なくなったえらい学者の某教授が、その方法で治療しうると想像したのでね。その人の説によると、狂人には特別なオルガニズムの障害があるわけじゃない、精神錯乱はいわば論理的誤謬、判断上の錯誤、事物に対する不正確な見解にすぎないという、これが根本なんです。その教授は徐々に病人に論駁して、どうでしょう、ついに好結果を得たという話です！　もっともこの際、教授は霊魂をも利用したので、この治療の結果はもちろん疑問の余地を有しています……少なくも、そう思われますよ……」

ラスコーリニコフはもう前から聞いてはいなかった。自分の家の前まで来ると、彼はレベジャートニコフに一つうなずいて、門内へはいってしまった。レベジャートニコフはわれに返って、あたりを見回すと、先の方へ駆け出した。

ラスコーリニコフは自分の小部屋へはいり、そのまんなかに立ち止まった。『なんのために俺はここへ帰って来たのだろう？』彼は例の黄ばんだ傷だらけの壁紙や、埃や、例の長椅子などを見回した……内庭の方からは何かの鋭い物音が、絶間なく聞こえていた。どこかで何か釘でも打っているような風である……彼は窓ぎわへ行って爪立ちしながら、異常な注意集中の表情で、内庭の中を目で捜してみた。けれど、内庭はがらんとして、たいている人の姿は見えなかった。左手の離れには、そこここにあけ放した窓が見え、窓じきりの上には、貧弱な銭あおいの植わった鉢がおいてあった。窓の外には洗濯物が干してある……こんなものは皆そらで知っていた。彼はくるりと向き直って、長椅子に腰をおろした。

彼はこれまでかつてあとにも先にも、かばかりの恐ろしい孤独を感じたことがなかった！

そうだ、彼はソーニャを前よりさらに不幸にした今となって、ほんとうに彼女を憎むようになったかもしれない、こういうことを彼はもう一度感じた。

『俺はなんのために彼女の涙をねだりに行ったのだろう？　なんのために彼女の生命をむしばむのが、ああまで俺に必要だったんだろう？　おお、なんという卑劣なことだ！』

「俺は一人きりになるんだ！」彼はふいにきっぱりとこう言った。「あの女も監獄へ面会になんか来やしまい！」

五分ばかりすると、彼は頭を上げて、妙ににやりと笑った。それは奇怪な想念であった。

『ことによったら、ほんとうに懲役の方がいいかもしれない』という考えがふいに浮かんだのである。

彼は、頭に群がってくる漠とした想念と相対して、どれだけの間自分の部屋にじっとしていたか、覚えがなかった。ふいにドアがあいて、ドゥーニャがはいって来た。彼女は初め立ち止まって、ちょうど先ほど彼がソーニャを見たように、しきいの上から彼をみつめていたが、や

がて部屋の中へはいり、昨日自分の席となっていた椅子に、彼と向き合って腰をおろした。彼は無言のまま、なんの想念もないように、ぼんやり彼女をながめた。

「怒らないでちょうだい、兄さん、わたしちょっと寄っただけなの」とドゥーニャは言った。

彼女の顔の表情は物思わしげではあったけれど、きびしいところはなかった。そのまなざしは澄んで、落ち着いていた。彼はこの女もやはり愛をもって、自分のところへ来たのだなと悟った。

「兄さん、わたしはもう何もかも、何もかも知ってるのよ。ドミートリイ・プロコーフィッチがすっかり説明して、話してくだすったの。兄さんはばかばかしい、汚らわしい嫌疑を受けて、苦しめられてるんですってね……でも、ドミートリイ・プロコーフィッチは、何も心配な事はないのに、ただ兄さんがやたらに気にして、恐怖観念に襲われてるんだって、そうおっしゃったわ。だけど、わたしそうは思いません。兄さんがどんなに憤慨して、体じゅうの血を沸き返らせてらっしゃるか、よくわかります。この口惜しさが永久に痕を残しやしないかと、それをわたしは心配するんですの。兄さんがわたしたちを捨ててしまいになったことでも、わたしは非難めいた事を言いません、そんな生意気なことできませんわ。先わたしが兄さんを責めたのは、許してちょうだいね。わたし自分でもそう感じますわ――もし自分にそういった大きな悲しみがあったら、わたしもやはりいっさいの人から身を隠したでしょうよ。お母さんにはこの事は一口も話しません。けれども、兄さんの噂は始終するようにします。兄さんのおことづけというていさいで、もうやがていらっしゃるだろうと、そう言っておきますわ。お母さんのことは気に病まないでちょうだい。わたしがうまく安心させてあげます。だけど、兄さんもあまりお母さんを苦しめないでね。――せめて一度でいいから来てちょうだい。あれがお母さんだってことを思い出してちょうだい！　今わたしが来たのはね（とドゥーニャはたつ用意を始めた）、ただこれだけのことが言いたかったからですの。もしひょっとわたしが何かの役に立つことがあったら、でなければ……わたしの命でも、なんでも……入用なことがあったら……そしたらわたしを呼んでくださいね、いつでも来ますから。じゃ、さようなら！」

彼女はくるりとくびすを返して、ドアの方へ行きかけた。

「ドゥーニャ！」とラスコーリニコフは呼びとめて立ちあがり、そのかたわらへ近づいた。「あのラズーミヒンは、ドミートリイ・プロコーフィッチは、実にいい男だよ」

ドゥーニャはぽっと微かに赤くなった。

「それで！」ちょっと待ってから、彼女はこう尋ねた。

「あの男は事務家で、勤勉で、正直な、そして強く愛することのできる男だ……じゃ、さようなら、ドゥーニャ」

ドゥーニャはすっかり真っ赤になったが、やがて急に不安げな面持ちになった。

「兄さん、まあそれはなんの事ですの。いったいわたしたちはほんとに、永久に別れでもするんですの、だってわたしに……そんな遺言みたいなことを言ったりして？」
「どっちにしても同じことだ……さようなら……」
彼はくるりと背を向けると、彼女から離れて窓の方へ行った。彼女はしばらく立ったまま、心配そうに兄を見ていたが、やがて不安に胸を騒がせながら出て行った。
いや、彼は妹に冷淡だったのではない。一瞬間（いよいよ最後の瞬間）、彼は妹をひしと抱きしめて暇（いとま）を告げ、何もかも言ってしまおうとさえ思った。しかし、彼は妹に手を与えることすら、思い切ってできなかったのである。
『今おれが抱きしめたということを、あとになってあれが思い出したら、おぞけをふるうかもしれない。そして、おれが妹の接吻を盗んだというだろう！』
『ところで、あれは持ちこたえられるだろうか、どうだろう？』と彼は五、六分してから、こう心の中で言い足した。『いや、持ちこたえられまい。あんな連中には持ち切れるものじゃない！　あんな連中はけっして持ち切れたためしがない』
彼はソーニャのことを考えたのである。
窓からは冷気が流れて来た。外はもはや前ほど赤々と日がさしていなかった。彼はいきなり帽子をとって、外へ出た。
彼はもちろん、自分の病的な状態をいたわることができなかったし、またいたわろうともしなかった。けれど、この絶間なき不安な内部の恐怖は、何かの結果を残さずに終わろうはずがなかった。彼がまた本当の大熱にかかって、床についてしまわないのは、つまりほかならぬこの絶間なき内部の不安が、彼の足を支え、意識を保っていたがためかもしれない。が、それはなんとなく人工的、一時的のものにすぎなかった。
彼は当てもなくさまよい歩いた。太陽は沈みかかっていた。近ごろ彼はある特殊な憂愁を覚えるようになっていた。そこには何もかくべつ刺すようなものも、焼けつくようなところもなかったが、そこからは何かしら絶間のない、永遠の感じが漂って来て、かの冷たいいっさいを死化さすような、救いなき憂愁の長い年月が予感された。『方尺の空間』における無意味な永遠性が予感された。たいていたそがれ時になると、この感触はひとしお激しく彼をさいなみ始めるのであった。
「何かしら日没などに左右されるような、この愚劣きわまる、純然たる肉体的衰弱をかかえてるんだから、よっぽど気をつけなけりゃ、どんな馬鹿をしでかすかしれやしない！　ソーニャのところはおろか、ドゥーニャのところへだっても懺悔（ざんげ）に行きかねないぞ！」と彼はにくにくしげにつぶやいた。
彼を呼ぶものがあった。振り返ってみると、レベジャートニコフが飛んで来ている。
「どうでしょう、僕はあなたのところへ行ったんですよ。あなたを捜してるんです。どうでしょう、あのひとは自

分の計画を実行して、子供を連れて出ちゃったんですよ！　僕はソフィヤ・セミョーノヴナと一緒に、やっとのことで捜し出したんです。見ると、自分はフライパンをたたいて、子供たちを踊らせてるんですが、子供たちはしくしく泣いてるという始末でね。四つ辻や小店の前に立ってやってるんで、弥次馬連がそのあとを追っかけ回しているんですよ。さあ行きましょう」

「で、ソーニャは？……」とラスコーリニコフはレベジャートニコフの後ろから急ぎながら、心配そうに尋ねた。

「ただもう夢中です。いや、ソフィヤ・セミョーノヴナじゃない、カチェリーナ・イヴァーノヴナの方です。もっとも、ソフィヤ・セミョーノヴナも夢中ですがね。が、カチェリーナ・イヴァーノヴナの方は、まるっきり夢中なんです。ぼく断言しますが、全く気が狂っちゃったんですな。警察へ連れて行かれるに決まっているが、もしそうなったらどんなショックを受けるか、およそ想像がおつきでしょう……あの人たちは今××橋の傍の濠端にいます。ソフィヤ・セミョーノヴナの住まいからあまり遠くないとこ、ついそこです」

橋からごく近い濠端で、ソーニャの住んでいる家から二軒とへだてぬところに、ちょっと人だかりがしていた。ことに男の子や女の子が駆け集まっていた。カチェリーナのしゃがれたかきむしるような声が、早くも橋のあたりから聞こえていた。それは実際、弥次馬連の興味をひくに足る奇怪な観物だった。いつもの古ぼけた着物をきて、ドラデダーム織の肩掛をかぶり、見苦しい塊りになって脇の方へずっている壊れた帽子を頭にのせたカチェリーナは、全く正真正銘の逆上状態になっていた。彼女は疲れて息をきらせていた。その弱り果てた肺病やみらしい顔は、ふだんよりひとしお苦しそうに見えた（それに、肺病患者というものは、家の中にいる時よりも外光の中で見る方が、ずっと病人くさく、醜く見えるものである）。けれど、彼女の興奮状態はなかなか静まらなかった。彼女は一刻一刻とますますいらだたしげになっていった。彼女は子供たちに飛びつくようにして、どなりつけたり、さとしたり、人の大勢いる前で踊り方や歌い方を教えたり、なんのためにこんな事をするのか言い聞かせたりしたが、子供たちの飲み込みが悪いのに業を煮やして、彼らをたたくのであった。それから、何かしさしにして、群衆の方へ飛んで行き、ちょっとでも小ぎれいな服装をした人が、立ち止まって見物しているのを見つけると、すぐにその男をつかまえて、『素性の正しい、貴族といってもいいくらいな家』の子供らが、なんという身の上になったものかと、口説き始める。もし群衆の中に笑い声や、からかうようなことばを聞きつけると、いきなりその無作法ものに食ってかかり、罵り合いを始めた。ある者はじっさい笑ったし、ある者は小首を振っていた。とにかくおびえて小さくなっている子供たちを連れた狂女を見るのは、誰にしても面白かったのである。レベジャートニコフの話したフライパンはなかった。少なくともラスコーリニコフは見かけなかった。けれどフライパンをたたく代わりに、カチェリーナはポーレチ

カに歌をうたわせ、レーニャとコーリャを踊らせる時には、そのかさかさした手を打ち合わせて拍子をとっていた。同時に彼女は自分でも一緒に歌おうとしたが、そのつどこみ上げる咳に妨げられ、第二句あたりでとぎれてしまった。そのためにまた業を煮やして、情ない咳をのろいながら、涙さえ流した。わけても何より彼女を逆上させたのは、コーリャとレーニャの泣声と、おどおどした様子だった。実際レベジャートニコフの話した通り、子供たちに大道芸人風のいでたちをさせようという試みもあったのである。男の子はトルコ人のつもりで、何やら白に赤のまじったターバンを巻いていたが、レーニャには衣裳がなかったので、ただ頭に亡夫の紅い毛糸の帽子（あるいはナイトキャップといった方がいいかもしれない）をかぶせて、それに、カチェリーナの祖母の持物で、今まで家宝として箱の中へしまってあった、白いだちょうの羽の切れっぱしがさしてあった。ポーレチカはふだん着のままである。彼女は途方に暮れて、おろおろと母を見まもりながら、しばしの間も傍を離れなかった。彼女は涙をかくすようにしていたが、母の発狂を察して、不安げにあたりを見回していた。往来と群衆は恐ろしく彼女を脅かしたのである。ソーニャは絶えず、家へ帰るようにと、泣き泣き頼みながら、カチェリーナのそばを離れずについて歩いていた。けれど、カチェリーナはいっかなきこうとしなかった。

「およし、ソーニャ、およし！」彼女は急ぎ込んで息を切らし、ごほんごほん咳き入りながら、早口にこう叫んだ。「お前は自分でも何を頼んでるんだか、わかっていないんだろう、まるで子供だね！　わたしはもうさっきお前にそう言ったじゃないか――あの酔っ払いのドイツ女のところへは、二度と帰りゃしないって。わたしは世間の人に、ペテルブルグじゅうの人に見せてやるんだよ。忠実に正直に一生お上の勤めをして、職務中に倒れたといってもいいくらいの父親を持った、素性の正しい子供たちが、物ごいをして歩くところを見せてやるんだよ（カチェリーナは、早くもこうした幻を作り上げて、それを妄信してしまったのである）。あのやくざな将軍めに見せてやる、見せてやるとも。それに、お前もばかだねえ、ソーニャ。この先わたしたちはどうして食べていくんだえ。わたしたちはもうずいぶんお前をいじめたんだから、この上あんなことはしたくない！　あら、ロジオン・ロマーヌイチ、あなたですか！」とラスコーリニコフを見つけて、その方へ駆け寄りながら、彼女は叫んだ。

「どうぞね、あなたお願いですから、このおばかさんに言い聞かしてやってくださいな――これよりりこうなやり方はないってことを！　手風琴回しだって稼ぎがあるんですもの、わたしたちなんかすぐに見分けてもらえます。乞食にまで成り下がっていても、もとは素性のいい気の毒な家族だということを、知ってくれるに決まってます。あの将軍めなんかは、今に免職になるから、見てらっしゃい！　わたしたちは毎日あいつの窓の下へ行ってやります。そのうちに皇帝さまがお通りになったら、わたしはその御前に膝をついて、子供たちを前の方へ突

き出してお目にかけながら、『父よ、お守りください！』と申し上げる。皇帝さまはみなし児の父で、お情深くいらっしゃるから、見ててごらんなさい、きっと守ってくださいます。あの将軍めなんか……レーニャ！　Tenez vous droite!（体をしゃんとして）コーリャ、お前はすぐもう一度おどるんだよ。何をめそめそしてるの？　まためそめそ始めた！　え、いったいお前はなにが怖いんだえ、おばかさんだね！　ああ、なさけない、ほんとうにこの子らをどうしたらいいでしょう、ロジオン・ロマーヌイチ？　あなたはご存じないでしょうけれど、ほんとうにわからずやで困ってしまいますよ！　ああ、こんな者をどうしたらいいんだろう！……」

彼女は自分でもほとんど泣かないばかりに（しかしそれでも、のべつやみ間なく早口にしゃべりたてるじゃまにはならなかった）、しくしく泣いている子供たちを彼に指さして見せた。ラスコーリニコフは帰宅をすすめようと試みながら、彼女の自尊心に働きかけるつもりで、手風琴回しと同じように町をうろつき歩くのは、立派な女学校長たるべき彼女としてはしたないことだ、とまで言ってみた。

「女学校、は、は、は！　そんなおとぎ話は、いくら美しくたってだめですよ！」とカチェリーナは叫んだが、笑ったかと思うと、すぐさま激しく咳き入るのであった。「いいえ、ロジオン・ロマーヌイチ、夢はもう消えてしまいました！　わたしたちはみんなに捨てられたのです！……あの将軍め……ロジオン・ロマーヌイチ、実はねえ、わたしあいつにインキ壺をほうりつけてやったんですよ――ちょうど小使部屋のテーブルの上にあったんですの、皆が署名して行く紙（わたしも署名しましたわ）の傍にあったんですの、それをほうりつけて、さっさと逃げ出してやりましたよ。ああ、なんてさもしいやつらだろう、なんてさもしいやつらだろう！　でも、勝手にしやがれだ。わたしは今から自分でこれたちを養っていきます、誰にも頭なんか下げやしない！　もうあの子に苦労をかけるのはたくさんです！　（彼女はソーニャをさしてみせた）。ポーレチカ、いくら集まったの、お見せ！　え？　皆でたった二カペイカ？　なんてきたない連中だろう！　舌を吐き出しながら、人のあとを追っかけて歩くだけで、なんにもくれやしない！　ふん、何をこのでくの坊は笑ってやがるんだ？　（と彼女は群衆の中の一人を指さした）。これというのも、みんなこのコーリャがわからずやだからです、世話ばかり焼かすからです！　お前はなんだい、ポーレチカ？　さあ、わたしにフランス語でお話し、〔Parlez moi franc,ais〕（私にフランス語でお話し）だって、わたしが教えてやったじゃないか、お前は幾つか文句を知ってるじゃないか！……でなけりゃ、お前たちが上品な家庭の子供で、教育があって、そんじょそこらの手風琴回しとは違うんだってことが、わかりっこないじゃないか。わたしたちは街なかで『ペトルーシカ』（指人形の芝居）をやってみせるのじゃなくて、上品なロマンスを歌うんですよ……ああそうだ！　ところでわたしたちは何を歌ったらいいんだろ

う？　あなたがじゃまばかりお入れになるもんだから、わたしたちは……ねえ、ロジオン・ロマーヌイチ、わたしたちがここに立ち止まったのは、何かいい歌をより出すためなんですよ――つまり、コーリャにも踊れそうなものをね……だってね、お察しでしょうけれど、わたしたちは用意なしにこんな事をやってるんですものね。だから、すっかり練習をして申し合わせをした上、ネーフスキイ通りへ行くつもりですの。あすこへ行けば、上流社会の人がずっとたくさんいますから、わたしたちをすぐ見分けてくれます。レーニャは『田舎家』を知っています……今たれもかれも『田舎家』『田舎家』で、猫もしゃくしも歌いますが、わたしたちはもっとずうっと高尚なものを歌わなくちゃなりません……さあ、お前は何を考え出したえ、ポーリャ、せめてお前でもお母さんを助けてくれたらねえ！　わたしは覚えというものがなくなってしまったんだもの。さもなけりゃ、いろんなものを思い出すんだけど！　だって『軽騎兵は剣(つるぎ)に凭(よ)りつ』なんか、歌うわけにゃいかないからねえ！　ああそうだ、フランス語で『Cinq sous(サンスウ)』をうたおうよ！　ほら、お前たちにもわたしが教えてあげたじゃないか、教えてあげたじゃないか。それに第一、フランス語だから、お前たちが上流の子供だってことがすぐわかって、その方がずっといじらしく聞こえるよ……それから『Malborough s'en-va-t-en……guerre』（マルボルーの大将は戦争をしに行かしゃった）でもいいねえ！　これは本当の子供の歌で、貴族の家じゃどこでも子供を寝かす時に歌うものなんだから」

Malborough s'en-va-t-en guerre
Ne-sait quand reviendra ……
マルボルーの大将は戦争をしに行かしゃった
いつ帰りゃんすことじゃやら

と彼女はうたいかけたが、

「いや、これよかやっぱり『Cinq sous(サンスウ)』の方がいい！　さあ、コーリャ、両手を腰に当てて、早くさ、レーニャお前も向こっ側へ回ってお行き。わたしとポーレチカが歌をつけて、拍子をとってあげるから！

Cinq sous, cinq sous
〔Pour monter notre me'nage〕……
たったの五銭、たったの五銭
それが暮しの命綱

ごほん、ごほん、ごほん！　（彼女は身もだえしながら咳き入った）。着物を直しておやり、ポーレチカ、肩が下がったじゃないか」と彼女はようやく咳の切れ目に注意した。「こうなったら、お前たちはいっそう所作(しょさ)ふるまいに気をつけて、上品にしなくちゃいけませんよ。みんなが由緒ある家の子だと気がつくようにね。わたしはあの時そう言ったんだけど――チョッキを少し長めにして、その上二幅に裁つようにって。それを、ソーニャ、

お前があのとき、『短かく、短かく』って口を出すもんだから、子供がこんなみっともないかっこうになってしまったじゃないか……ちょっ、またお前たちは誰もかれも泣いてるね！　なんのためなの、馬鹿だねえ！　さあ、コーリャ早くお始め、さ、早く、早くったら――ええ、ほんとになんてやりきれない子供だろう！……

Cinq sous, cinq sous

また兵隊が来たよ！　いったいお前さん何用だい？」

なるほど、一人の巡査が群衆を押し分けてきた。が、それと同時に、官吏の略服に外套（がいとう）をまとい、首に勲章をつけた（それがカチェリーナには愉快でたまらないらしいし、巡査の心持にも影響を与えたのである）、五十格好の立派な紳士が近づいて、無言のままカチェリーナに緑色の三ルーブリ紙幣を与えた。彼の顔には心から同情が現われていた。カチェリーナはそれを受けて、うやうやしく、というより儀式ばった会釈をした。

「あなた、どうも有難うございます」と彼女は高飛車に言い出した。「わたしたちがこんなことをするようになったわけと申すのは……お金を預っておくれ、ポーレチカ。ね、ごらん、この通り不幸に沈んでいる哀れな貴婦人をさっそく助けてくださる、高潔な腹の大きい方があるもんだよ。あなた、これが由緒ただしい、貴族といってもいいくらいの家に親戚（しんせき）知己をもった、みなし児だってことはおわかりでございましょうね。それをあの将軍めは食堂にすわり込んで、山鳥なんか食べていましてね……わたしがじゃましたといって、地だんだ踏むじゃありませんか……わたしはそう申したんでございますよ。『閣下、なくなったセミョーン・ザハールイチを、よくご存じなのでいらっしゃいますから、どうぞみなし児たちをお守りください。卑劣も卑劣も、またとないほど卑劣なやつが、たくの生みの娘の顔に泥を塗ったのでございますから……しかもあの人の死んだ日に……』ああ、またあの兵隊が！　どうぞ助けてください！」と彼女は官吏に向かって叫んだ。「なんだってあの兵隊はひとにつきまとうんだろう？　もう町人街（メシチャンスカヤ）でも一人やって来たものですから、ここへ逃げて来たんですのに……さあ、お前なんの用があるんだい、ばか！」

「往来でこんなことは禁じられておるんです、ぶていさいなことをしちゃいけません」

「お前こそ無作法ものじゃないか！　わたしは手風琴回しと同じわけだよ、お前の知ったことじゃありゃしない！」

「手風琴回しなら鑑札がいります。ところが、あなたは自分勝手にそんなことをして、人だかりなんかさしているんですからな。お住まいはどちらです？」

「なに鑑札だって？」とカチェリーナはわめき立てた。「わたしは今日主人の葬式をしたばかりなんだよ。なんの鑑札どころかね！」

「奥さん、奥さん、まあ気をお落ち着けなさい」と官吏は口を入れた。「さあ行きましょう、わたしがあなた方

を送ってあげます……こんなに人だかりのしている所ではぶていさいですから……あなたは体も本当でないし……」
「どういたしまして、どういたしまして、あなたはなんにもご存じないのです！」とカチェリーナは叫んだ。「わたしたちはネーフスキイ通りへ行くんですもの――ソーニャ、ソーニャ！　まあ、いったいあの子はどこへ行ったんだろう？　やっぱり泣いてるんだ！　お前たちはみなそろいもそろってどうしたというんだね！……コーリャ、レーニャ、お前たちはどこへ行くの？」と彼女はぎょっとしたように叫んだ。「まあ、なんてばかな子供たちだろう！　コーリャ、レーニャ、いったいあの子たちはどこへ行くんだろう！」
　それはこうだった。往来の人だかりと、気の狂った母親の突飛なしぐさにすっかりおびえ上がっていたコーリャとレーニャは、巡査が彼らをつかまえて、どこかへ連れて行こうとするのを見ると、いきなり言い合わせたように、手に手を取って駆け出したのである。哀れなカチェリーナはけたたましい悲鳴を上げ、そのあとを追っかけて行った。息を切らせながら泣き泣き走って行く彼女の姿は、見苦しくもあれば痛ましくもあった。ソーニャとポーレチカも、続いて駆け出した。
「つれて帰っておくれ、あの子たちをつれて帰っておくれ、ソーニャ！　ああ、なんてばかな、恩知らずな子供たちだろう！　ポーリャ！　二人をつかまえておくれ……お前たちのためを思えばこそわたしは……」
　彼女は一生懸命に走る勢いでつまずいたと思うと、どうとばかりその場へ倒れた。
「まあ、怪我(けが)をして血だらけ！　ああ、どうしよう！」とソーニャは一声叫んで、彼女の上に身をかがめた。
　人々ははせ集まって、そのまわりにひしめき合った。ラスコーリニコフとレベジャートニコフは、まっさきに駆けよった。官吏も同じく急いで来た。巡査もそのあとからついて来たが、事が面倒になりそうだなと直覚して、片手を振りながら、『やれやれ！』とつぶやいた。
「どいた！　どいた！」と彼は四方から詰め寄る群衆を追いのけようとした。
「死にかかってるぞ！」と誰かがわめいた。
「気が狂ったんだよ！」ともう一人が言う。
「ああ、とんでもない！」と一人の女が十字を切りながら言った。「その娘っ子と餓鬼(がき)はつかまったのかしら？　ああ、あすこに連れられて来る、姉っ子がつかまえたんだよ……きかんぼうだねえ！」
　けれど、カチェリーナをよく調べてみたとき、彼女はソーニャの考えたように、石にぶっつかって怪我をしたのではなく、歩道を紅(あけ)に染めた鮮血は、彼女の胸から吐き出されたのだとわかった。
「これはわたしも知っております、見たことがあります」と官吏はラスコーリニコフとレベジャートニコフに向かって、しどろもどろに言った。「こりゃ肺病ですよ。こんな風に血がどっと出て、喉(のど)がつまるんですな。親戚の女にありましたよ、つい近ごろ見せられましたよ。さよ

う、コップにかれこれ一杯半くらい……しかも突然……しかし、いったいどうしたものでしょうな、今に死んでしまいますよ」
「こっちへ、こっちへ、わたしの家へ！」とソーニャは祈るように言った。「わたしはちょうどここに住まっているのですから！……ほら、あの家、ここから二軒目ですの……さ、わたしのところへ、早く早く！……」一同に飛びかかるようにしながら、彼女は言った。「お医者を呼びにやってください……ああ、どうしよう！」
　官吏の尽力で、事はうまく運んだ。巡査までがカチェリーナを運ぶ手伝いをした。彼女はほとんど死んだような有様で、ソーニャのところへかつぎこまれ、寝台の上にねかされた。出血はまだやまなかったが、当人はだんだん正気に返りかけたらしかった。部屋の中へは、ソーニャのほかにラスコーリニコフとレベジャートニコフ、それに官吏と、群衆を追い払った巡査が、一どきにはいって来た。群衆の中の幾人かは、戸口のところまでついて来た。ポーレチカは、震えながら泣いているコーリャとレーニャの手を引いてきた。カペルナウモフの家のものも集まってきた。当の亭主はびっこで目っかちで、剛(こわ)い髪や頬ひげが針のように突ったった、奇妙な風体の男だった。なんだか永久におどしつけられたような顔をした女房も、年じゅうびっくりしているので化石したような顔をし、口をぽかんとあけたいくたりかの子供たちもやって来た。こうした連中の中に、突然スヴィドリガイロフが姿を現わした。ラスコーリニコフは、彼を町の群衆の中に見た覚えがないので、どこから来たのか合点がいかず、驚いたように彼をみつめた。
　医者や僧侶(そうりょ)の話が出た。官吏はラスコーリニコフに向かって、こうなったらもう医者は無駄だろうとささやきながらも、迎えにやる指図をした。カペルナウモフが自分で駆け出したのである。
　その間に、カチェリーナはやや落ち着いて、喀血(かっけつ)も一時とまった。彼女は病的な、けれど心の底までしみこむような目で、哀れなソーニャをじっとみつめていた。彼女は義母の額から玉の汗をハンカチでふきながら、わなわな震えていた。やがてカチェリーナは、起こしてくれと言い出した。人々は彼女を両側から支えながら、寝台の上にすわらせた。
「子供たちはどこ？」と彼女は弱々しい声で尋ねた。「ポーリャ、お前二人を連れて来たかえ？　ほんとにばかったらない！……え、なんだって駆け出したの……ああ！」
　血はまだ彼女の乾いた唇に、いっぱいこびりついていた。彼女は調べてみるように、あたりにぐるりと目をくばった。
「なるほど、お前はこんな風に暮らしてるんだね、ソーニャ！　わたしはまだ一度も来たことがなかったが……思いがけなく見られることになった」
　彼女はさも苦しげにソーニャを見た。
「わたしたちはすっかりお前の生血を吸ってしまったねえ、ソーニャ……ポーリャ、レーニャ、コーリャ、ここへおいで……さあ、これでみんなだ、ソーニャ、どうぞ

この子たちを引取っておくれ……手から手へ渡すよ……わたしはもうたくさんだ！……芝居もこれで幕切れだ！　ああ！　もうねさせておくれ、せめて死ぬだけでも静かに死なせて……」

人々は再び彼女を枕につかせた。

「え？　坊さん？……いらない……わたしたちにどうしてそんな余分なお金があるものかね？……わたしには罪障なんかありません……でなくたって、神様は許してくださる……わたしがどんなに苦しんだか神様はちゃんとご存じでいらっしゃる……でも、許してくださらなけりゃ、それもかまわない！……」

不安な失神状態がしだいに強く彼女を領していった。時おり彼女は身震いして、あたりを見回し、ちょっと一瞬、一同を見分けたが、すぐに意識はうわ言にかわった。彼女は苦しげにしゃがれた息をした。何か喉でごろごろいっている風だった。

「わたしはあの人に言いました。閣下……」一言ずつで息を継ぎながら、彼女は叫んだ。「あのアマリヤ・リュドヴィーゴヴナめ……ああ！　レーニャ、コーリャ！　お手々を腰に当てて、早く、早く、滑足、滑足、パー・ド・バスク（バスク風の足づかい）足で拍子をとって……すっきりした可愛い子になるんですよ。

Du hast Diamanten und Perlen ……

ダイアモンドや真珠ばかりか……

その先はどうだったけ？　そうだ、これを歌ったらいいよ……

〔Du hast die scho:nsten Augen.〕

〔Ma:dchen was willst du mehr?〕

上なく美しい瞳を持って

乙女よこの上なにを望むぞ？……

ふむ、そりゃそうでなくってさ！　was willst du mehr――なんてことを考えつくものだろう、まぬけめ！……ああそうだ、まだこんなのがあったっけ。

真昼の暑さ！……ダゲスタンの！……谷間にて！……

ああ、わたしはこれがどんなに好きだったろう……わたしはこの小唄がたまらなく好きだったんだよ、ポーレチカ！……これはお前のお父さんがね……まだ約婚のころよくおうたいになったんだよ……ああ、あのころは！……これだ、これを歌ったらいいんだ！　おや、どうだったっけ、どうだったっけ……ああ、わたし忘れちまった……ねえ、思い出さしておくれ、どうだったっけ？」

彼女は激しく興奮しながら身を起こそうとあせった。とうとう彼女は、一言一言叫ぶようにしては息を継ぎながら、何やら刻々募っていく驚愕の表情で、はらわた

をたつような恐ろしいしゃがれ声で歌い始めた。

真昼の暑さ！……ダゲスタンの！……谷間にて……胸に鉛の弾丸を持ち！……（レールモントフの詩「夢」）

「閣下！」ふいに彼女はさめざめと涙にくれながら、胸を裂くような悲鳴とともにこう叫んだ。「みなし児たちをお助けくださいまし！　なくなったセミョーン・ザハールイチの饗応をおぼし召して！……貴族といってもいいくらいの！……ああ！」彼女は突然われに返って、何かぎょっとしたようにあたりを見回しながら、ぴくりと身を震わしたが、すぐソーニャに気がついた。「ソーニャ、ソーニャ！」ソーニャが前に立っているのに驚いたように、彼女はつつましやかな優しい声でくり返した。「ソーニャ、可愛いソーニャ！　お前もここにいたの？」

人々はもう一度彼女を起こした。

「たくさんだ！……もうおさらばをしていいころだ！……さようなら、ソーニャ、お前も苦労したねえ！……みんなで痩馬を乗りつぶしたんだ！……もう精も根も尽きはーてーたー」と彼女は絶望したように、にくにくしげにひと声叫ぶと、どうとばかり枕の上に頭を落とした。

彼女は再び意識を失った。けれど、この最後の昏睡状態は長くも続かなかった。彼女のやせ衰えた青黄ろい顔は、仰向けにがっくりたれ、口はいっぱいに開いて、足はけいれんするようにぐっと伸びた。彼女は深い深い息をついて、ついにことときれた。

ソーニャは空しい骸の上に倒れ、両手でひしと抱きかかえ、やせ細った胸に頭を押しつけたまま、じっと身動きもしなかった。ポーレチカは母の足もとに身を投げると、しゃくり上げて泣きながら、しきりに接吻するのであった。コーリャとレーニャは、まだ何ごとが起こったのかわからなかったが、何か非常に恐ろしいことを予感して、互いに両手で肩をつかみあい、互いにじっと眼をすえ合っていたが、いきなりそろって一時に口をあけ、わっと大声に泣き出した。二人ともまだ衣裳をつけていた――一人はトルコ頭巾を巻き、いま一人はだちょうの羽根飾りのついたお椀帽子をかぶったまま。

いつの間にどうして出たのか、例の『賞状』がふと寝台の上に、カチェリーナのそば近くころがっていた。それはすぐそこの枕もとにあった。ラスコーリニコフはそれに気がついた。

彼は窓の方へ離れて行った。レベジャートニコフがその傍へ飛んで来た。

「死にましたなあ！」とレベジャートニコフは言った。

「ロジオン・ロマーヌイチ、あなたに一言申し上げなけりゃならんことがあるのですが」とスヴィドリガイロフが寄って来た。レベジャートニコフはすぐに場所を譲り、気をきかして姿を消してしまった。スヴィドリガイロフはびっくりしているラスコーリニコフを、なおも奥まった隅の方へ引っ張って行った。

「今度のいっさいの面倒は、つまり葬儀万端のことは、わたしが引受けます。なに、ただ金さえあればいいんで

しょう。ところが、この前もお話しした通り、わたしにはいらない金があるんですから。わたしはこの二人の雛っ子とポーレチカを、どこかなるべく気のきいた孤児院へ入れてやります。それからソフィヤ・セミョーノヴナがすっかり安心するように、三人が丁年に達するまで、一人あたま千五百ルーブリずつ宛てといてやりましょう。それにソフィヤ・セミョーノヴナも、泥沼から引出して上げます。だって、いい娘さんですものね、そうじゃありませんか？　で、どうかあなたからアヴドーチャ・ロマーノヴナに、あのひとの一万ルーブリはこういう風に使ったとお伝えを願いたいのです」

「いったいあなたはなんの目的で、そんな慈善の大盤振舞をするんです？」とラスコーリニコフは尋ねた。

「ええっ！　疑り深い人だ！」とスヴィドリガイロフは笑い出した。「そう言ったじゃありませんか、その金はわたしにゃ不用なんだって。それに、単に人道上からいっても、あなたはこれだけのことすら許さないとおっしゃるんですか、え？　だってあの女は（と彼は死骸のある方を指さした）、どこかの金貸婆あみたいに、『しらみ』だったわけじゃありませんからね。そうじゃありませんか、『実際、ルージンが生きて卑劣なことをすべきか、それともあの女が死なねばならぬか？』ですよ。もしわたしが助けなかったら、『たとえばポーレチカだって、やはり同じ道を行く』ことになるじゃありませんか……」

彼は意味ありげに目くばせでもするような、陽気ないたずらっ子らしい顔つきで、ラスコーリニコフから目も放さず、これだけのことを言い終わった。ラスコーリニコフは、ソーニャに言った自分自身のことばを聞き、みるみる真っ青になって、冷水を浴びせられたような気がした。彼はたちまち一歩後ろへよろけて、けうとい目つきでスヴィドリガイロフを見つめた。

「ど、どうして……あなたは知ってるんです？」かろうじて息をつぎながら、彼はささやくように言った。

「だって、わたしはここに、壁一重隔てて、レスリッヒ夫人のとこに下宿してるんですからな。こっちはカペルナウモフ、あっちにはレスリッヒ夫人、わたしの古い親友ですよ。だから隣り同士なので」

「あなたが？」

「わたしが」体をゆすって笑いながら、スヴィドリガイロフはことばを続けた。「で、親愛なるロジオン・ロマーヌイチ、誓って言いますが、わたしはあなたに驚くほど興味を感じ出したんですよ。ねえ、わたしはそう言ったでしょう――われわれはきっとうまが合うだろうって、ちゃんと予言しといた――ところが、はたしてこの通りうまが合った。いや、わたしがどんなに調子のいい人間か、今におわかりになりますよ。見ておってごらんなさい、わたしとなら、なに、一緒に暮らしていけますよ……」